
ホームスチール～SUMMER Baseball Miracle～

ネモティッシモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホームスチール SUMMER Baseball Miracle

【Nコード】

N1249T

【作者名】

ネモティツシモ

【あらすじ】

ここは愛知県立邦南高校。
県内屈指の進学校だ。

2年生左腕ながら最速146?をほこる大場が1人でエースを務める。彼は中3のとき硬式野球日本代表に選ばれたほどの実力者だが、親の教育方針で野球より勉強をとった結果、一般入試で狭き門をくぐってきた。

このチームは他の部員のレベルが低すぎ、不勝神話が去年の夏から

続いている。

そんななか、遅れて部員が二人入ってくる。

幽霊部員のやつ、プロ野球選手の息子ながら全くセンスのないやつ、野球大好きなやつ…いろんな部員。

部員数は12人（一人幽霊部員のため実質11人）で愛知県の数ある野球名門を撃破し甲子園初出場することはできるのか…。

この野球部はどうなるんだ！？

必見です。

もし甲子園初出場できたら甲子園の試合も書きます。

No.1：部員達

『ゲームセット!』

試合が終わった。

もちろん我が愛知県立邦南高校の負けだ。これで春の大会も終わりの3年生はあとは最後の夏の大会しか残っていない。

県内屈指の進学校。

公立推薦入試でも入ることは相当困難であり、当然野球の上手いやツなどそうそう入ってこない。

エースで1番を任している2年生左腕の大場おおは翔真しょうまは中学3年生のとき硬式野球日本代表に選ばれるほどの実力者で、県外の高校から何十校も誘いが来るほどの実力者だったが、非常に賢く、親の指導方針のお陰で野球より勉強をとった結果、一般入試で狭き門をくぐってきた。

が、このチームは当分の間勝っていない。
なぜか。そう。

他の部員のレベルが低すぎるからだ。

大場を含めても部員はたったの10人。

新1年生がいなければ部員は7人でもはや試合どころではない。
だからこのチームになってから公式戦は今日がはじめて。練習試合さえもまだやっていなかった。そんなチームが勝てるはずがない。

一応、背番号順に軽く選手の説明をしておこう。

背番号1：大場 翔真 おおば しゅうま

チームの1番を勤めている。2年生。左投げ左打ち。このチームの得点は全て彼が絡んでいると思うていい。できれば3番か4番を任せたいのだが：1番打席の回ってくる1番に…。

背番号2：副島 充 そえじま みつる

キャプテン。3番バッター。3年生。右投げ左打ち。大場以外で唯一真剣に野球に取り組んでいる。

背番号3：藤武 将希 ふじたけ まさき

1年生。右投げ右打ち。9番バッター。中学校時代はバスケット部に所属してたらしい。小学校のころ、地域のソフトボールで不動の八番ライトだったと自慢している。足はそこそ早く50メートル走は6・5だ。

背番号4：島谷 涼太 しまたに りょうた

1年生。右投げ右打ち。8番バッター。身長159センチのちっちゃな少年。高校になって野球を始めた。

背番号5：松坂 健祐 まつざか けんすけ

3年生。右投げ右打ち。4番バッター。基本的にお調子者だ。筋肉バカで当たればスタンドいんもあり得るが、極端にミートがない。守備もガサツだ。感動する…。逆の意味で。

背番号6：島谷 倫暁 しまたに ともあき

3年生。右投げ右打ち。5番バッター。

島谷涼太は弟。守備はわりとできるが打力がイマイチ。

背番号7：木村 太郎 きむら たろう

3年生。右投げ右打ち。6番バッター。

チーム内でのあだ名は『キムタロ』

キムタクのパクリだろうか…。たしかにイケメンだ。元気一杯だが野球はいつこうにうまくならない。

背番号8：慶野 文哉けいの ふみや

2年生。右投げ右打ち。2番バッター。

バンド等の小技がうまく、俊足で、ある程度頼りになる。守備範囲が広い。

背番号9：氷室 佑介ひむろ ゆうすけ

1年生。右投げ右打ち。7番バッター。

チーム1のやる気のなさをほこる。いい迷惑だ。

背番号10：鬼頭 博行きとう ひろゆき

3年生。右投げ左打ち…。らしい。1年の頃入部してから一度も野球部の練習に来たことがない。俗に言う幽霊部員だ。噂によると中3のとき肘を故障して野球ができなくなったらしい。一ヶ月ほど前に大場が誰かと人通りの少ない公園でキャッチボールをしていて、それが鬼頭だったとキムタロが言っていた。しかしキムタロは嘘つきだ。すぐ話を誇張してしまう癖がある。もうこりこりだ。

そして時は過ぎ、遂に7月になろうとしている。抽選会の日。

私はキャプテンの副島と抽選会会場に行った。

副島『愛知県立邦南高校、34番です！』

その瞬間私は表情を変えた。

No.2：念願の天才

場内がざわついた。

相手は…長久手大谷高校。

高校自体はあまり有名ではないが、今年から四年前にセンバツ4強入りした清閑高校の監督を務めていたことがある森安監督を監督としている今話題の高校だ。

特に4番のアメリカ人の血をもつハーフの中村アーネストは高校通算44本塁打を誇る強打者だ。チームも森安監督のもと非常に隙のない野球をするようだ。

そして、時はあっという間に過ぎていき、開会式も終わり、遂に初戦前日。

今年の目標は3回戦出場をおいている。

そんななか授業後の練習が終わり、試合前最後の練習に取りかかるとしたところ、見知らぬ高校生が3人訪ねてきた。

『野球部はここですか？』

『そうだが…どうしたのだね？』

私は問い返した。目の前には黒めの筋肉質の男と非常に締まったからだをしている男、それに非常に美人な女が立っている。

『あした、試合っすよね？』

筋肉質の男が話しかけてきた。

『そうだが？どうかしたのかね？』

『オレ、西口にしぐち 拓磨たくまって言います。今日から野球部おねがいっす。ポジションはキャッチャー。明日の試合も出してくださいね。』

『そんなことはいいのだが、既にメンバー表は抽選会のために提出してしまっただし、試合にはでれるまい。』

『あーダイジョブですよ。先生が出す前にこっそりベンチ入りメンバーに西口と小宮って書いておきましたから。ちなみに僕は小宮こみや 哲都てつとって言います。ポジションはピッチャーですが、ここのエースは大場先輩なんでシヨートでもいいです。』

『大場先輩だつて？しってんのか？翔真のこと。』

小宮『当然ですよ！同じチームだったんですから。』

西口『オレもちなみに小宮と同じ名古屋東ブラックスシャークのにいたっす。』

（ほんとか…これはとんでもないやつらだな。）

『君はどうしたんだ？』

横で黙っている女の子に尋ねた。

『私…マネージャー希望の赤崎あかさき 明日翔あすかって言います。よろしくお願いします。』

小宮『ちなみに僕の彼女なんです。』

そして、試合当日、

1 番ピッチャー、大場

2 番センター、慶野

3 番ショート、小宮

4 番キャッチャー、西口

5 番ライト、副島

6 番サード、松坂

7 番セカンド、島谷倫

8 番レフト、木村

9 番ファースト、藤武

試合が始まる。

『プレイボール!!』

No.3：先制パンチ（前書き）

テスト期間中で更新できませんでした？
すみません???

今日は初の試合の描写です？

No.3：先制パンチ

長久手大谷高校の先発は背番号11の反町 そりまち 佳人 よしと

情報だと春の大会はエースの平田 ひらた 忠春 ただはるが怪我で登板できずにいた穴を見事に埋めた2年生左腕。
基本的には打たせてとるピッチングを主体としている。

『1番、ピッチャー、大場君。』

大場が打席にはいる。大場は基本的には穏やかで物静かな性格だが、打席にはいると人が変わる。

大場『相手は同じ2年生左腕。俺のが格上だってことを思い知らしてやる。』

ここの野球部は、

練習のときは自分が1番下手だと思ってやる。試合の時は自分がスーパースターになったつもりになってやる。

それを基本としている。

（カキーン！！）

響きのよい金属音になった。

そして打球のは、
スタンドに届いた。

邦南高校の先頭バッター大場の本塁打。

2番の慶野は三振に倒れたものの、次のバッターは…

『3番、シヨート、小宮君』

ここで天才が打席にはいる。

No.3：先制パンチ（後書き）

感想待ってます？

No.4：小宮と西口の裏

ゲームセット!!

試合はそのまま邦南が4回に相手のエラー絡みで二点を追加、そして9回にツーアウト満塁から2番慶野の二点タイムリーツーベース、そして二死二三塁から3番の小宮の今日初ヒットとなるタイムリーで二点を追加。

この当たりで二塁を狙った小宮が二塁でタッチアウトになるも7-0で大場がそのまま完封し、完勝した。
実に6年ぶりの初戦突破だ。

そして試合後…

副島『みんな今日はよくやった。これから頼むぞ!』

おう!!!

監督としても気分がいい。1番の大場は4打数3安打1四球2打点の活躍。4番の西口も4打数4安打2打点の活躍をした。

チームの安打合計も監督になってから断トツで最多の10安打だ。大場だけのチームが、小宮と西口の加入によって自信を持ったようだ。

次の相手は1回戦はシードだった栄華高校。
みんなには頑張ってもらいたい。

その頃…小宮と西口は試合後なのになぜか野球部の部室の中にいた。

（ガッツ！！）

（ボコッ！！）

（バタッ！）

小宮『やめてください…』

小宮が何者かに殴られている。
殴られている相手は…

（ガッツ！）

小宮『痛い。頼むからやめて…。拓磨くん…。』

西口『拓磨くんか？お前いつから俺のこと下の名前で呼べる立場になったんだ？西口くんにしる。じゃねえと二度と野球できなくなるぞ。』

（ボコッ！ボコッ！ガン！！）

小宮『すみません西口くん。ごめんなさい。』

西口『なんで最後の攻撃、二塁狙ったんだよ。おい！なあ！！』
（ボコッ！）

既に小宮の顔は真っ赤に腫れている。

小宮『あれは…』

西口『てめえ次のバッター今日4打数4安打なんだぞ？そんなに俺が信用できねえか？』

小宮『違います…。』

西口『お前、誰のお陰でいま野球できてると思ってんだ？おい。』

小宮『西口くんのお陰です…。』

西口『だよなあ？俺がいなきゃお前はずっとぱっとしねえ男だったんだぞ？まあいまでも十分ぱっとしねえクソ弱虫な野郎だけだな。ハハハ。』

（ガッツ！）

ついにまぶたから血が出てきた。

（ドンドン！）

『おい！誰か中にいるのか？もうすぐ完全下校の時間だぞ！早く着替えて下校しろよ！』

西口『はい！すぐにいきます！』

『おーう！』

西口『邪魔が入ったか。まあ次の試合で俺の機嫌を損ねるようなことしたら二度と動けないようにするだけだ。あとこのことチクったりしたら容赦しねえからな。わかったか？顔の怪我も風呂場で転んだことにでもしとけ。間違っても俺の名前出すんじゃないぞ。』

小宮『はい…。』

西口『じゃあな。クソ人間。』

（バタッ！）

（カチャッ）

西口は部室の鍵まで閉めていった。

部室は基本密室なので出ることはできない。

小宮『ちくしょう……。昔は……あんなに優しい……拓磨だったのに……。
なんで……。』

No.4：小宮と西口の裏（後書き）

感想待ってます？

No.5：小宮 絵梨

翌朝、朝練の時間…

小宮は疲れはてて眠っていた。
すると外から声がする。

氷室『キャプテン！部室からボール持ってきますか？』

副島『当たり前だろ。お前はボールを使わずにダッシュ100本でもするつもりか？昨日いったろ。朝練は打撃だ。ついでにバットも五本くらい持ってこい。木のやつな。』

氷室『はい。』

小宮はこのまま自分が血だらけで倒れてたらあまりにも不自然なため、とつさに横の壁にかけてあった10本くらいのバットをわざと自分の顔にむかって倒した。

（ガチャガチャ…ガチャツ！）

氷室『やっとあいた〜ってええ！テッチャン！どうしたん！？』

小宮『あー昨日ね、部室の掃除しようと思ってここにいたらバットが突然倒れてきて、痛すぎて気絶してたんだ〜。さっき眼が覚めたところ。』

氷室『なんかそれにしても随分と顔がボコボコだよ。なんか誰かに殴られたあとみたいだね！』

小宮は一瞬ドキツとした。しかしどうやら氷室はバットが突然倒れたと言う設定を理解してくれたらしい。さすが、何をやるにしてもやる気のない佑介だ。疑うことを知らない。

そして野球部は栄華高校との試合。

初回に一拳8点をあげ、4回の裏にも打者一巡の猛攻で11点。結局24-0の5回コールドで勝利した。

試合後、小宮は急いで家に帰った。

『おかえりー！』

小宮『ただいま！今すぐ飯作るからちよつと待ってる！』

小宮に現在、親はいない。10年前、小宮が5歳の頃、父親が釣りが好きの父親が、大型台風接近中にも関わらず、海で釣りをしていた。その結果荒波に飲まれてそのまま帰らぬ人になった。

そして2年前、小宮が中学二年生だった頃、お母さんが交通事故に遇い、死んでしまった。

それっきり小宮は3つ年下の妹の絵梨えりと二人で生活してきた。

小宮は絶対にプロ野球選手になって大きな家を建てて妹と暮らすと

いう夢がある。

絵梨『お兄ちゃんは何で昨日帰ってこなかったの？うち、心配したよ。』

小宮『昨日は野球部でミニ合宿みたいなのがあってさ。なにも言わないでいて悪かったね。』

絵梨はふーんという顔をしながらこういった。

絵梨『お兄ちゃん、最近元気ないけど…しかもその顔…誰かとうまくいってないの？』

小宮『なに言ってるんだよ！兄貴はいつも元気だぜ。』

絵梨『ならいいけど…。あつ！いつかお兄ちゃんの野球部の練習見に行つていい？』

小宮『ダメダメ！お前は勉強して、テニスも練習しないと！プロテニスプレイヤーになるんだろ？』

絵梨『ケチー！』

（まあどっちにしろこっさり見に行っちゃえばいいやゝ）

そして…

『三回戦の相手は、春の大会準優勝の高校、愛農大名林だ。』
大場『今の俺たちなら、絶対いい勝負ができる。自信持とうぜ！』

《《おう！！！！！》》

赤崎『ねえ！哲都はまだ大会でヒット1本しか打ってないから明日は猛打賞を前提に打ちまくって守りまくってね！！』

小宮『任せろ！明日翔！』

この二人は付き合ってもう一年がたとうとしている。

『フッフ…。許さねえぞ…ぜってえにな。』

この二人のほほえましい会話の背後で不気味な笑いをしている者が、一人いた。

N o . 5 : 小 宮 絵 梨 (後 書 き)

感想待ってます??

No. 6 : 本物のフオークボール

先攻 : 邦南高校

1 : P : 大場

2 : CF : 慶野

3 : SS : 小宮

4 : C : 西口

5 : RF : 副島

6 : 3B : 松坂

7 : LF : 木村

8 : 2B : 島谷倫

9 : 1B : 藤武

後攻 : 愛知農業大名林高校

1 : CF : 眞野

2 : 3B : 矢野崎

3 : SS : 長岡

4 : P : 下村健

5 : 1B : 江澤

6 : LF : 天宮

7 : RF : 成田

8 : 2B : 南

9 : C : 下村誠

《《 プレイボール!!! 》》

『1番、ピッチャー、大場君。』

木村『あのピッチャーチャライなあ。』
松坂『だな。』

名林のエースの下村^{しもむら} 健太^{けんた}と一年生ながら正捕手の座についた下村^{しもむら}
誠^{まこと}は兄弟だ。

二人とも中学の頃から停学処分を食らうほどの問題児だ。
とくに兄の健太は坊主なのに金髪、そしてアゴヒゲまでも金色に染
めている。

弟の誠は見た目こそまとだが、内心は廃れていて非常にずる賢い。

矢野^{やの} 舞^{まい}『健太！今日も相手をやつつけちゃえ！！』

健太『ったく。バックネット裏にいたら投げにくいじゃねえかよ。
彼女なんだから少しは俺のことも考えるよ。』

初球…

（カクッ！）

大場『…！！』

（バシン！）

『ストライーク！！』

大場『初球からインコースのスライダー？なるほど…。厄介だな。
変化球には自信があるってか…。』

2球目…

大場『甘い！もらった！！』

（カクッ！）

（スカッ！！）

翔真のバットが空を切る。

『ストライク、ツー!!』

(今のはフォークか…このフォークはそう簡単には打てないな。)

第3球…

大場『ストレートか!』

(カクッ!)

(またフォーク!!ボールだ!)

大場『くっ!あぶね』

大場はとさっさにバットを止めた。

しかし…

『ストライク!バッターアウト!』

健太『ザーコ。』

大場『さっきと変化量が…違う。今のは低め一杯のストライク…!』

誠『兄貴のフォークは力の入れ具合、ボールの抜き具合で変化量を自在に変えることができる。おぼえとけ。』

大場『…!?!』

誠『あんたの決め球もフォークなんだろう?そんなことできるわけないって?当たり前さ。兄貴はこの辺じゃ敵なしのバリバリの現役ヤンキーだからな。握力は並じゃない。そして…』

審判『君たち!私語は慎みたまえ!!』

大場『すいません。』

誠『まあ話は兄貴が打席にたったときに教えてもらえや。』
大場『あのピッチャー…。手強い。なめてかかったら…。』

その後、2番の慶野も三振。3番の小宮も三振に倒れこの回は無得点。

『1番、センター、^{まの}眞野君。』

(コン！)

西口『セーフティーバントだ！！』

松坂『足が速い！！ムリか！？』

大場『俺のフィールディングをなめんな！！』

(パシヒュッ！)

(パン！！)

『アウト！！』

眞野『チクショー！』

健太『やるね～。まあ、エースつてのはフィールディングで魅せるんじゃないんだよ。ピッチングで魅せるんだよ。本物のエースならね。そんなにドタバタしてたら見苦しいよ。クスクス。』

『2番、サード、矢野崎君。』

（カキン！）

西口『シヨート！』

小宮『一致よ上がり』

大場『よし！ツアアウトだ！』

『3番、シヨート、長岡君。』

（バシン！）

（バシン！）

西口『よし！2球で追い込んだ！』

大場『フォークだ。』

（カクツ！）

長岡（さあ、演技でもしとくか。）

西口（よし！バッターの体勢が崩れた！打ち取った。）

（カーン！）

長岡『我ながら天才だなあ。』

（ポン！）

大場『ポテンヒットか。打ち取ったと思ったのにな。』

藤武『大丈夫大丈夫！今のはピッチャーの勝ちだよ！！切り替えて

！
』

長岡（ククク…。ピッチャーの勝ちだって？俺は狙い済ましてあそこにポテンヒットをしたんだっての。）

健太『ナイスだ長岡。これで相手はフォークに自信を持ったな。隙だらけだ。』

そして…

西口『よし！カウントツーツー！次で決まりだ！』

大場『フォークだな。よし。』

大場がボールを放つ。

健太『このボールを待ってたんだよ！！』

（カクツ！）

西口『よし決まった！ストライクからボールになる！空振り三振だ！』

誠『決まったな。』

健太『こんな偽物フォークでこの俺は…』

（カキーン！！！！！！）

低めのボール球を強引に打った。

西口『え…。』

健太『撃ち取れねえよ。凡人。』

長岡『くつくつく。』

（ゴーン！！）

打球はバックスクリーンに突き刺さった。
まず愛農大名林が二点を先制した。

健太『お前は天才じゃない。俺が天才だ。』

No.7：誠の實力

決め球のフォークを打たれた翔真はリズムが狂い、3連打のあとにフォアボールを与えてしまい3点目を献上。なおツーアウトフルベースでバッターは…

『9番、キャッチャー、下村誠君。』

健太『誠は俺のフォークをガキン頃から何千球と受けてきてる。というよりアイツは1年生キャッチャーだから上位打線は荷が重いと思っで9番にしているだけだ。打力なら俺に匹敵するくらいの實力だ。』

《《 かつ飛ばせー誠！！ 》》

名林は名門高なだけあつて応援にも力を入れている。

西口『タイムお願いします。』

『タイム！！』

西口『まだ3点取られただけであせるような場面じゃない。ここは自分のペースで楽にいきましょう！！あの9番は平気で人を殴るよ

うなクソ野郎ですから！！思いきっていきましょう！！』

大場『…お前が言えることか？』

翔真が拓磨に聞こえないような声でボソツと言った。

西口『何か言いました？』

大場『別に。』

誠『きみ。知ってるよ。名古屋東ブラックシャークの4番の西口くんやら？』

西口『…。どーも。』

誠『一回やったことあるよね。』

西口『知るか。覚えてねえな。』

誠『本当かい？俺は全国大会の準決勝でお前らに負けた…』

西口『…！！まさか！！あの！？』

大場が誠に第1球を投げる。

渾身のストレート。

（カキーン！！！！）

誠『9番バッターだと思って油断してた？フッフ。』

西口『札幌ライオンズJr.の4番キャッチャー…下村誠…なぜ愛知に…？』

誠『おせえんだよ。気づくのが。ちょっと誘われちゃってさ。名林にね。』

(ゴーンッ! !)

大場『兄弟揃って…俺のボールをバックスクリーンに…。』

小宮『満塁…ホームラン…』

長岡『これでいきなり7-0か。きまったな。5回コールドってとこか?』

健太『当然だろ。』

No.8：絶体絶命（前書き）

今回は長いです???

No.8：絶体絶命

試合はその後、大場はランナーを出しながらも何とか踏ん張るが一方の名林のエースの下村健太はまだフォアボールのランナー一人だけしか塁に出さないノーヒットピッチング。
得点は未だに7-0で名林が7点のリード。
そして遂に5回の裏へ突入する。

『5回の裏、愛知農業大名林高校の攻撃は、6番、レフト、天宮君』

天宮『このピッチャー、2回以降は0に抑えてるが、もう100を越えている。そろそろ本格的にバテてくるだろう。』

天宮はこのチームのキャプテンで最も頭が回っている。

天宮『コールド。狙うか。とりあえずあと3点。先頭の俺の役割は何がなんでも塁に出ることだ。デカイのは要らないな。』

（カーン！）

『ファールボール！！』

（カーン！）

『ファールボール！！』

（カスッ！）

『ファールボール！！』

…

そして…

（バン！！）

大場『ちくしょう！高めに浮いちまった！』

『ボール！フォア！』

長岡『今、天宮何球くらい粘った？』

江澤『15球目をフォアボールだ。まああいつなら当然だろ。もう見慣れた光景だ。』

『7番、ライト、成田君。』

成田『そろそろ終わりにしようや。へボPさんよ。』

大場『言っ…くれるねえ！！！！』

成田『高いよ。もっと楽しませてくれなきゃ。』

（カキーン！！）

木村『ちくしょう。つえー…。』

健太『よし。これでノーアウトランナー二塁だ。』

『8番、セカンド、南君。』

天宮『さあーて。仕掛けるか。』

大場がセットポジションから投球モーションに入る。

小宮『ランナー走ったぞ！！！！！！』

西口『そう来るかつ!!』

(ビュッ!!)

西口は三塁へ送球する。

『セーフ!セーフ!』

南『そろそろ秘伝の技を使うか…。』

大場が南へ2球目を投げる。

松坂『スクイズだ!!』

西口『ちくしょう!!いきなり来るか!!』

(コン!)

南『見よ!この芸術的なバント!』

大場『俺のフィールディングのが…』

大場が倒れ込みながら一塁へ送球する。

大場『芸術的なんだよ!!』

(パシッ!!)

『アウト!!』

矢野崎『たくあいつは。普通に打ったほうがヒットになるんだっての。』

健太『南の打撃も一級品なんだがな。バントへの執着心が半端じゃねえからな。』

長岡『この前もバントこそが人類最高の芸術である。とか言ってた

しな。どんだけだよ。』

『9番、キャッチャー、下村誠君。』

健太『まあ何はともあれ一点追加した。あと2点で家に帰れるぜ。』

『ボール！フォア！』

誠『なんだよ。フォアボールかよ。つまんねえな。逃げ腰雑魚バッテリーが。』

『1番、センター、眞野君。』

眞野『ワンナウトー三塁か。つまり一塁ランナーの誠が帰ればコールドゲームか。』

誠『決めちゃいますか。先輩。』

眞野『行くぞ！！！！エンドランだ！！！！！！』

藤武『走ったぞ！！』

西口『単独スチール！？いや！！』

小宮『エンドランだ！！』

（カキンッ！！！！）

痛烈な当たりが三遊間を襲った。
普通のシヨートなら捕れないが…

大場『小宮!!!』

小宮『よっこらしょつと。』

小宮が素早く打球に追い付き、二塁へ送球。
『アウト!!!』

島谷倫『ナイス!!!小宮!』

しかし名林はこの間に一点を追加し9 - 0。
尚ツニアウト一塁でバッターは…

『2番、サード、矢野崎君。』

大場『ハア…ハア…ハア…ハアハア…』

矢野崎『そろそろきてるみたいだねえ。早く終わらせてあげるよ。』

大場『負けて…たまるか。』

(カキン!!!)

副島『またヒットか!』

『3番、ショート、長岡君。』

長岡『あと一点とれば10点差だ。5回の裏で10点差つてことは
どういうことだかわかるよね?』

西口『大場さんをなめない方がいいよ。』

長岡『そうか?たいしたピッチャーでもないと思うけどね。まあツ
ニアウト一二塁。さっさと打って家に帰りたいねえ。まったく。』

（バン！）

『ボール！ワン！』

（バン！）

『ボール！ツー！』

西口（このバッターを歩かせても次は強打者の下村健太。塁に出すわけにはいかない…。）

長岡（そろそろストライクだろ。今日のバッテリーのデータ的には次のボールは外角低めのストレートってどこか？）

西口（ここしかない！アウトローのストレート…！）

大場がセットポジションから投げる。

ビュッ！……！

西口『まずい……！……！これじゃ……！……！』

長岡『いただきいゝ！』

西口『シュート回転して中に……入ってくる……！』

（カキン……！……！）

江澤『いったか？』

『ファールボール！！！ファールボール！！！！』

氷室『つぶねえ…』

西口『一瞬死ぬかと思ったぜ。』

長岡『随分とおせえ真っ直ぐだな。もうバテてきたのか？』

西口（それもそうだ…。大場さんは初回からずっと全力投球で5回裏で既に145球も投げてる…。もう限界だ…。）

（バン！）

『ボール！カウントワンスリー！！』

（カキン！！！！！！）

松坂『まずい！！』

『ファール！ファール！』

長岡『ふー。遅すぎてタイミング合わないや。』

ここで大場がキャッチャーの西口を呼んだ。

西口『タイムお願いします。』

西口『どうしたんすか？』

大場『…歩かせよう。』

西口『…！？』

大場『ダメだ。今の俺じゃ悔しいがコイツは抑えらんねえ…。』

西口『ダメですよ！！次の下村健太はこのバッターよりもいいバッターなんです！！この長岡と勝負しなきゃ負けます！！』

大場『俺がマウンドを降りる。幸いなことにウチにはまだ小宮っていいいいピッチャーがいる。あいつに賭けよう。今はツーストライクだからピッチャー交代は出来ない。』

西口『…。…。』

大場『仲間を信じれないのか？ここは手段を選んでる場じゃないんだ。負けたら先輩たちの夏が終わる。だから負けは許されないんだ。』

西口『小宮…か。』

大場『わかったらさっさと戻れ。』

西口『わかりました…。』

健太『いい度胸じゃねえか。わざわざ俺と勝負とはな。』

長岡『やっぱり逃げたか。チキンキャッチャー。』

『ボール！フォアボール！！』

西口『監督！ピッチャー交代です！』

ポジションの変更←←

大場：1 ↓ 3

小宮：6 ↓ 1

藤武：3 ↓ 9

副島：9 ↓ 4

島谷倫：4 ↓ 6

『4番、ピッチャー、下村健太君。』

天宮『あと一点で5回コールドゲームだ。』

健太『粉碎してやる。かかってこい。』

小宮『望むところだ。』

ついに小宮がボールを脱いだ。

No.8: 絶体絶命(後書き)

感想待ってます??

No.9：新球の進化した変化（前書き）

今回も長めです？

今回のメインは

小宮VS下村健太です？？？

No.9：新球の進化した変化

(ザーッ!ザーッ!)

この回の途中から雨が降り始めている。

小宮『ツアアウト満塁...』

明日翔^{あすか}『哲都!落ち着いて!いつもの哲都のピッチングをすれば大丈夫!!!今1番いけないのは逃げのピッチングをすること!!!攻めるのよ!!!いける!!!勝とうよ!!!この試合!!!』

記録員の明日翔がマウンドの小宮に向かって大声で叫んだ。

小宮(ありがとう。明日翔。気持ちがずっと軽くなったよ。)

西口『...。ちつ。』

小宮『彼女にこんなこと言われて燃えねえ男は...』

小宮が投げる。

小宮『野球をやる資格はねえ!!!』

(ズバーン!!!!!!)

『ストライーク!!!』

健太『割とはえーな。やるじゃんか。』

第2球目…

健太『だが…』

(ブン！！！！！！)

(ズバーンツツ！！！！！！！)

小宮『どや！！』

健太のバットが空を切る。

健太(コイツ…。確かに速い…。まだ変化球も見せてきてねえしな…。次は何でくる？このままストレートで押してくるか。いや、なにか決め球の変化球を持つてるのか？…とにかくこのままじゃ圧倒的に分が悪い…。必要なのはあと一点。ワンヒットでコールドゲームだ。ここはバットを短く持つて…。…。いや…。短く持つて打つなんて俺のプライドが許さねえ…。)

小宮『あれ？あんなに振り遅れたのにバット短く持たないんだね。まったく。意地っ張りなやつだ。それじゃ簡単に料理させてもらうよ。』

明日翔『いつけえー！！哲都！！』

西口『…。』

ビュッ！

健太『ストレート!!』

(カクッ!)

健太『クソッ! シュートかよ!!』

(コン!)

打球は完全に詰まってキャッチャーファールグラウンドへ。

しかし。

小宮『西口君!! 上!!』

西口『…っ!!』

『ファール!』

西口は反応がかなり遅れ捕球することができなかった。

大場(なるほどな。大体わかってきた。小宮と西口の間の亀裂はあの女が原因か。)

翔真は哲都と拓磨の関係に既に気づいている。

健太(助かった。シュートを持ってるのか。)

南『あれれ? 珍しく健太のやつ随分とテンパってるんじゃない?』

小宮『この雨のお陰で手が少し濡れてボールが滑りにくくなって…。』

西口がストレートのサインを出した。

小宮は首を振った。

西口（小宮が中学ん頃得意球だったこれか？）

西口はチェンジアップのサインを出したが小宮はまた首を振った。

西口（じゃあ…これか？）

カーブのサイン。小宮はこれも首を振った。

西口（まさかとは思うが…これか？）

小宮は頷いてワインドアップから投球モーションに入る。

西口（このボールは…アイツが中学の頃猛練習しても習得できなかったばかりか…この投げ込みのしすぎで肘をぶっ壊した。そんなボールを…自信があるのか…？）

小宮『いつもならうまく曲がる確率は20%もないところだが…。

この今の指先の感覚なら…きっといけるはず。』

下村（もうストレートは捨てる。シュート系のボールと緩いボールだけに狙いを絞って…）

小宮が注目の1球を投げる。

ビュッ！！！！

健太『高い！？いや！もらった！カーブ！！』

（ギュギュギュッ！！）

健太『な、なんだこの変化は！！！！！！』

西口『……！！！！』

(バン！！)

眞野『あーあ。』

長岡『それはないぜ。』

『ストライク！バッターアウト！チェンジ！！』

氷室『すげえ。ベンチから見ても並の曲がりじゃなかった。』

藤武『今のカーブスゴいですね！』

大場『いや。今は恐らくドロップだ。ただし並のドロップじゃなかったがな。』

西口『今のは確かにドロップですが、ドロップではないんです。小宮のドロップは、三段ドロップなんです。中学の頃よく練習してたけど結局習得できなかった。』

小宮『まさかこんなにうまくいくとはいかなかったけど、今のボール、三段ドロップじゃないんだ。』

西口『……？』

小宮『三段ドロップを越えた変化を見せる……【四段ドロップ】これがこのボールの名前なんだ。』

舞『くうーっ！今の場面健太に決めてほしかったなーっ！！』

健太『なんなんだ……？今の変化は。』

誠『つたく。早く帰りたいんだから打つてよ。もう。』

健太『……。』

長岡『帰宅が遅れちゃったぜ。』

江澤『ホントホント。』

(ザーザーッ!!)

慶野『雨がさらに強くなってきた…。』

No.9：新球の進化した変化（後書き）

感想待ってます????

No.10:キャプテンVS下村兄弟

(ザアザア!!ザアザア!!)

六回の攻防も終わり、試合は七回の表、9 - 0で愛農大名林が9点のリード。この回で3点以上とらなければ七回コールドが成立する。

健太『結局七回コールドか。まああのピッチャーやな4連続で三振にとられてちやしょうがねえ。』

名林のエース下村健太はここまで6イニングを投げ被安打0、四死球2のノーヒットピッチング。

『3番、ピッチャー、小宮君。』

(ザアザア!)

健太『雨がつえーな。こりゃ投げにくいな…。』

健太が小宮へ第一球を投げる。

小宮(高い!もらった!)

(カキン!!)

大場『しゃあ!やっとヒットが出たぜ!ナイス小宮!!』

小宮は実に8打席ぶりのヒットだった。

『4番、キャッチャー、西口君。』

西口『コイツは確実に試合を早く終わらせようと焦ってる。ノーゲームになったら勝ちゲームを捨てるようなもんだ。だから…』
小宮（初球はストライクを取りにくる…）

健太『だあっ！』

西口『このカーブでカウントを取りにくると思ったぜ！』

（カキーン！！！！）

健太『ちくしょう！雑魚があがきやがって…』

打球は右中間を破って好スタートを切っていた小宮は一気にホームイン。打った西口も三塁へ。

これで9 - 1。

『5番、セカンド、副島君。』

…

…

そして…

『ボール！カウントスリーボール！』
健太『ちくしょう…ボールが滑る。』

南『あーあ。ノースリーかよ。さっさと終わらせてほしいねー。』
長岡『まったくだ。』

副島（俺はこのチームのキャプテン…だけどまだチームのための最低限の仕事もやってない。）

大場『副島さん！打てえ！！』

副島（この兄弟バッテリー…。案外リードは単調だ。カウントを取りにくるときは外角の変化球が低めの直球だ。でも西口に打たれた外の変化球は使いづらいだろう。）

誠（これ以上ランナーをためるとまずい…兄貴は少しだとはいえ球威が序盤よりも落ちてきている。とにかく低めだ。アウトローから真ん中低めってところかな。）

誠はアウトロー直球のサインを出した。

健太はそれに頷いた。

副島（直球だろう。さらにこのカウントだ。インコースはない。このピッチャーもこのインニングがフィニング目だ。いくら好投しているとはいえ、たまが浮く可能性は十分にある。だから、真ん中低めもない。となると…外角低め。これで決まりだな。）

心理戦は完全に副島が勝った。

そして健太が投げた。

副島（アウトロー直球！！完全に予想通り！！！！）
（ガッ！！！！）

誠（コイツ！！こんなに踏み込めなんて！クソッ！配給が読まれていたのか！！！！！！）

(カッキーンッッン!!!)

(ゴン!!!)

木村「ツーラン…ホームラン…!」

副島「じゃあああああ！！！！！！」

下村兄弟VSキャプテン副島の対決は副島に軍配があがった。

これで点差は $9 - 3$ 。

ここから、邦南の逆襲が始まる…。

No.10:キャプテンVS下村兄弟(後書き)

感想待ってます？

No.11:代打氷室！（前書き）

今日はあんまり内容がないです？

すみませんがたまには許してくださいm (・_・) m

No.11: 代打氷室!

木村『ナイスキャプテン!』

松坂『グッジョブ!!グッジョブ!!』

一方…名林ベンチでは

山崎(控え選手)『まったく…コールドにしたかったな。』

江澤『相手の小宮ってやつも相当いいピッチングをしてるしな…。

あと一点はおるかランナーすら出ないんじゃない…』

天宮『これで9回まで戦う羽目になるな。』

名林ナインはリリースした小宮を打つのは難しいとし、皆がコールドは無理だと悟った。

そしてその後後続が続かず七回の表は終了。

小宮は七回の裏もドロップを駆使し全員奪三振をし、これで7連続。

そして回はついに八回の表、9-3で愛農大名林が6点のリード。

『8回の表、邦南高校の攻撃は、9番、ファースト、藤武君に代わりまして、代打、氷室君。』

氷室『何でかな…。いつもだったら6点差で8回だったら諦めるのにな…。不思議だな。なんか俺…逆転できる気がする。』

眞野『だっりーな。今日は無名のガリ勉高校って聞いたからすぐに

ゴールドにできると思って瑞江とデートの約束したのに…。あと20分で家に帰らないと間に合わねえよ。これ以上長引かせたら承知しねえぞ。健太。』

矢野崎『ふわぁー。あーあ。眠いな。アクビがでちまうぜ。昨日テレビゲームで夜更かしして一睡もしてねえんだよ。いいから早く帰って寝させてくれよ。』

名林のムードは最悪だ。

これから邦南高校野球部の怒濤の攻撃が始まる…。

No.12: 名門崩壊(前書き)

今回は結構長いです???

No.12:名門崩壊

(ザアザア!!)

5回の裏の途中から降っている雨はやむ気配はない。

健太『この俺から3点もとoryがって。ガリ勉高校のくせに…気に入らねえ。』

しかし…

(バン!!)

『ボールスリー!!』

氷室(制球が荒れてる。この雨だ、ボールが滑ってカーブは投げずらいだろう。となるとあとはあの厄介なフォークとストレートの區別。ノースリーのこの場面。フォークはない…。ストレートだ!!)

誠(このバッター…前の試合を見る限り基本的にはストレート狙いだな。このカウントだ。もうストレート以外眼中にないって感じか。じゃあこのボールを心おきなく試させてもらうか。)

誠はカットボールのサインを出した。

健太が投球モーションに入る。

シュツ!

氷室（きた！狙い通り！…じゃない！！）

カットボールは曲がるのが早すぎて氷室はかるうじてバットに当たった。

（カスッ！！）

（ボテッボテッボテッ！）

誠『サード！前！！』

矢野崎『めんどくせえな。』

（ピタッ！）

矢野崎『なにっ！？』

グラウンドはこの雨でぬかるんでおり、ボテボテのサードゴロの勢いが殺され、途中で止まってしまった。

サードの矢野崎が急いでボールを取るも、バッターランナーの氷室は既に一塁ベースを駆け抜けていた。
これでノーアウト一塁。

矢野崎『ちっ。』

健太『へたくソ。もっと一歩目を速くすればまだわかんねえ当たりだっただろ。』

矢野崎『あ？なんかいったか？おいへボピッチャー。』

健太『てめえ深く守りすぎなんだよ。あの1年坊がそんな強い打球飛ばすと思ってるのか？あ？わかった。速い打球来んのが恐いのか。』

チキン野郎。』

矢野崎『なんだテメエ？誰のせいで8回にもなって守備やってんだ
と思ってるんだ？』

南『お前が一打コールドのあの5回裏の場面ででかい振りして三振
したり、抑えればコールド勝ちっていう7回表の場面でことごとく
失敗してんだろ。何様のつもりで矢野崎のこと責めてんだ？』

長岡『それにさつき矢野崎のことチキン呼ばわりしたが、テメエの
ピッチングじゃコイツらすら抑えられねえと思って深めに守ってん
だよ。』

南『そうそう。調子に乗らないでほしいね。まったく。』

眞野^{センター}『なにゴチャゴチャやってんだよ…。瑞江とのデートに遅れる
のは決まったな。瑞江に何て言おうか…。』

（カキーン！！）

天宮^{レフト}『センターバック！！』

眞野『え！？え！？』

成田^{ライト}『どこ見てんだ！上だ！！上だ！！』
眞野『打球が…！』

（ポテン！！）

大場『じゃあ！！！！』

慶野『翔真！ナイスバッティング！！』

藤武『回れ回れ！！』

眞野『ヤバい！！！！』

天宮『三塁打はしょうがない！！ランニングホームランだけは防げ！！』

江澤『何やってんだ！やる気あんのか！』

遂に眞野は打球に追い付いたが既に大場は三塁を回ろうとしている。

島谷倫『回れ回れ！いけるぞ！！』

眞野の精一杯の送球も及ばず大場のランニングホームランで二点を追加し、これで9 - 5。一気に4点差となり試合の行方はまだわからなくなった。

『2番、センター、慶野君。』

大場『いいぞ！！続け文哉^{ふみや}！！』

誠『タイムお願いします。』

誠はこの空気を変えるために内野手を呼んで勝利への執念を改めて忠告しようとした。誠はこういったところは案外真面目なやつだ。

しかし…

健太『困っちゃうね。ヘタクソがバックにいたら撃ち取った当たり

もことごとくヒットにされちゃうから。』

長岡『おいテメエ。あんま調子乗ってんじゃないぞ。大したことしてねえのに人のせいだよ。こっちのが困っちゃうね。』

健太『調子乗ってるだつて？誰が？そもそも5回の裏の攻撃でお前が相手のエースを打つとけばよかった話じゃねえか。モタモタしてるから結局相手ピッチャー代わっちまったじゃねえかよ。自分のこと棚にあげんのも大概にしとけよ。雑魚が。』

長岡『言葉には気を付けろよ。結局人のせいにしてんのはどっちだよ。いい加減にしやがれ。雑魚はテメーの方だよ。』

健太『いい加減にしろ…。』

(ガッ！！)

健太が長岡の胸ぐらをつかんだ。

長岡『あ？やんのか？強いぞ。俺は。』

誠『…。』

誠は下級生だけあって先輩の喧嘩には口を挟めないでいる。

南『つかお前さー。こんな無名校のやつらに5点もとられてエラそーにしているって頭どうかしてんじゃないの？』

矢野崎『謝れ。今すぐ頭下げたら許してやる。』

江澤『クッククク。早くしろよ。』

健太『ざけてんじゃないやねえつつつてんだろ！！』

（ボコッ！！）

健太が江澤を殴った。江澤はうずくまっている。

審判『コラ！君たち何やってんだ！！』

誠『すみません！今終わらせます！！』

審判『君！大丈夫かね！？』

江澤『別に。なんともないっすよ。こんなヒヨロヒヨロゴボウやろ
うのパンチなんて蚊に刺されたのと同じっすよ。』

審判『大丈夫みたいだが、次暴力ふるったらこの試合は没収試合となり、没収試合を招いてしまったチームは自動的に敗北するぞ！いか！？これは最終警告だ！わかったね？』

誠『はい…わかりました。』

健太『誰がヒヨロヒヨロゴボウやろっすって？このゴキブリ人間が。』

江澤『はいはい。俺らはみんなゴキブリですよ。まあゴキブリは守備なんざできねえからお前一人でこの試合終わらせるんだな。』

健太『…。』

長岡『おいおい。そんなデケー口叩いてまさかできないなんて言うはずないよな？』

誠『もうやめましょ！こういうの！！みんな一生懸命野球しようよ！！全国制覇するために今まで頑張ってきたじゃないですか！！』

健太『誠…。』

南『わかりましたあー。弟がかわいそうだから守備はしてあげるよ。弟に感謝しな。お兄ちゃん？』

矢野崎『守備する代わりにこの試合負けたら全責任をお前に背負わせるから。そこんとこよろしく。』

健太『おう。当然だ。』

誠（兄貴…。無理しやがって…。みんなは気づいてないかしんないけど、俺は気付いてるぜ…。）

健太（ちょっと、いや、相当ヤバいかもしんねえ…。）

誠（兄貴はもう全力投球できる状態じゃない…。）

No.12:名門崩壊(後書き)

感想お願いしますm(´・`m

N o . 1 3 : 三日前の出来事 (前書き)

今日は少し残酷かもしれません？

No.13:三日前の出来事

誠（兄貴はもう全力投球できる状態じゃない…。）

それは三日前のことだ。

名林の猛練習が終わったあと、健太と誠は帰り道にあるゲームセンターに寄り道した。

カラオケ屋の地下に建てられた古くからヤンキーがたむろしている世間では評判のよくないゲームセンターだ。

そんなところでも二人は構わずスロットで遊んでいた。

そして健太がトイレに行くといって誠1人になった。

すると一人になった誠にヤンキー5人が絡んできた。

←←回想シーン←←

『おい。こんなガキがこんなところで何やってんだ？』

『俺たちと一緒に遊ぼうぜ。』

誠『なに？あんたらと遊ぶなんて嫌だし。』

『まあそんなこと言うなって。ちよつと金がほしいと思っててね。』

『金さえくれれば他のところに行くけどさ。とりあえず金よこせ。』

誠『なめてんじゃねえぞ。お前らみたいな暇人にくれてやる金なんざこれっぽっちも持ってねえんだよ。バーカ。』

『ほおー。言ってくれるねえ。それはつまりぶつとばされても良い
つてことだよな?』

(ガッ!ー!)

ヤンキーの一人が誠の胸ぐらをつかんだ。

『今なら許してやる。最後の警告だ。金よこせ。』

誠『寝言は寝て言えや。てめーらシバかれてえんか?』

『交渉決裂だね。じゃあ俺らの餌食になってもらうか。』

(ボコッ!ー!)

ヤンキーが誠の腹にパンチを一発入れた。

誠『やめろ!ー!』

(ボコッ!バン!ドコッ!ー!)

ヤンキーが四人がかりで誠に襲いかかった。

誠『ぐっ…。』

『金。渡す気になったか?おい。ザコ。』

誠『渡すもんか…。俺はそこらの腰抜けとは違う…。』

『ほおー。しゃべれなくなっても知らねえぞ?』

(カツッ。カツッ。)

ヤンキーの恐らくリーダーであろう、一番ガタイのいい奴が金属バ
ットを持ってきた。

誠『それは…!?!?』

『自業自得だ。さつさとよこせばよかったものを。バーカ。』

ヤンキーのリーダーが誠に金属バットを向けた。

『あはよ。』

N o . 1 3 : 三日前の出来事（後書き）

続きます？

感想お願いしますm (´・`)
m

No.14：満身創痍の健太（前書き）

注意（念のため）

無死↓ノーアウト

一死↓ワンナウト

二死↓ツニアウト

No.14：満身創痍の健太

『あばよ。』

誠『うわあっ！！！！！！』

ビュー！！！！

（ガッツ！！）

『イテっ！！！！』

（カランカラン！！）

突然何かが横から飛んできてヤンキーの右腕に直撃してヤンキーはバットで誠を叩くことができなかった。

誠『野球…ボール…！』

『なんじゃ！！！テメー！！！！』

健太『よくも俺の弟をここまでいじめてくれたな。覚悟しろ。』

『おめえもシバかれてえんか！？なあ！？』

『まて**薮谷**！！この人はひょっとして…。

薮谷『びびってんじゃねえ！！』

ヤンキーの増田**ますだ**が薮谷を止めようとしたがリーダーの薮谷は健太に襲いかかった。

しかし…健太は藪谷を返り討ちにした。

増田『もしかしてあの…下村健太か…？』

健太『なんで俺の名前を知っている？』

増田『この辺じゃあんたを知らないヤンキーの方が少ないさ。アンタは裏じゃ「愛知の猛魂」って呼ばれるくらい強いんだろ。噂には聞いてるが…』

ヤンキーが四人同時に襲いかかってきた。誠は痛みで動けない。小熊『あんたさえ倒せば俺らが有名になれるんだよ！！』

健太は四人のうち一人は倒したが残る三人に集中攻撃を受けた。そして10分後、健太は多少のダメージを負いながらも、全員を倒した。

健太『ぐっ…。』

誠『兄貴！！大丈夫か！！』

健太『大丈夫だ。心配すんな。』

（ズキズキ！！）

健太（コイツはちつとヤバいかもな…。）

健太はヤンキー四人を相手にしたとき脇腹を痛めた。おそらく肋骨が折れたかヒビが入っているのだろう。

→→回想シーン終わり→→

（ザアザア！！）

雨はいつこうに弱くならない。

慶野『ストレート！！』

（カキーン！！）

誠『ショート！』

長岡『あいよ。』

しかし。

（ツルツ！）

江澤『まじかよ！！』

長岡『ヤベツ！滑った！』

大場『シャー！！回れ回れ！！』

名林のショート長岡の一塁への悪送球で打った慶野は一気に二塁へ達しこれでノーアウト二塁。

健太『ヘタクソが。』

長岡『けっ。』

『3番、ピッチャー、小宮君。』

小宮（二塁ランナーは足の速い慶野。バッテリーも三盗には警戒し

てる。サードも俺は三番打者だし、二盗を警戒して二塁ランナーが見やすいように深めの守備。」

健太が投げる。

ビュッ！！

小宮『セーフティーバントして欲しいとしか思えないポジションングだね！！』

（コン！！）

健太『サード！』

矢野崎『またかよ！』

矢野崎が一塁へ送球をするもセーフ。

これで無死一三塁。

健太『同じ失敗を二回もされちゃあ困っちゃうね。まったく。』

矢野崎『簡単にバントされてんのはどこのどいつだ？いいわけが似合う男だな。』

健太『自分の仕事してからそういうことは言おうね。おバカさん。』

矢野崎『。。。』

『4番、キャッチャー、西口君。』

…

……

『ボール！！フォアボール！！』

矢野崎『おい！ストレートのフォアボールはねえだろ！！ビビッてんのはどっちだ！！』

『5番、ライト、副島君。』

松坂『よっしゃー！ノーアウト満塁だ！繋げよ！キャプテン！！』

健太（ノーアウト満塁……。にげらんねえ。脇腹も死ぬほど痛えし……。）

しかし副島が打ち損じて2球で追い込み、

健太『これでもくらえ！！』

（ビュッ！シュー！ガクッ！！）

副島（ストレート！！……いや！フォークだ！）

（バン！！）

『ストライク！！バッターアウト！！』

健太『あとアウト5つだ……。』

『6番、サード、松坂君。』

……

（バン！！！！）

『ストライク！！バッターアウト！！』

長岡『2連続か。』

南『はじめからそれをやれっの。』

『7番、レフト、木村君。』

大場『ノーアウト満塁で一点もとれないとなるとマズイ…。ここはなんとか打ってください！！』

キムタロのこれまでの打席結果

長久手大谷戦

- 1：見逃し三振
- 2：空振り三振
- 3：見逃し三振

栄華戦

- 1：セカントゴロ
- 2：四球
- 3：空振り三振
- 4：空振り三振
- 5：ショートゴロエラー

愛農大名林戦（本日）

- 1：空振り三振

2：ファーストフライ

3：見逃し三振

合計 10打数0安打

打率・000

木村（小さい頃の夢は親父と同じプロ野球選手…。今日もきつと親父、見に来てくれるんだろうな。でも打てそうにないや。）

キムタロは普段こそお調子者だが、昔から試合になると縮こまってしまう。

そしてキムタロの父親はもとプロ野球選手で投手として通算215勝をしてプロ野球名球会にも入っている木村^{きむら} 豊己^{とよみ}だ。

木村（多分高校生活最後の打席なんだろうな…。）

豊己（太郎…。思い出せ…。ガキの頃からの猛練習を。）

No.14：満身創痍の健太（後書き）

感想もらえたらうれしいです??

N o . 1 5 : プロ野球選手の息子（前書き）

今回はキムタロ（木村太郎）がメインです？

No.15:プロ野球選手の子

島谷倫『キムタロ…。ここで一本頼む…。』

氷室『先輩…。』

邦南ナインは必死にキムタロのバットが目を冷ますことを願っている。

木村（…無理だ。俺は武器なんてないし…。）

豊己（太郎…。）

木村（小さい頃から野球をやってきて、ずっと一生懸命やってきて…。）

木村『だけど…。だけど…。』

（ズバーン！！）

『ストライク！！ワン！！』

木村（いくら練習を一生懸命やっても…。試合で打ったことなんて数えられるくらい…）

（スカッ！！）

『ストライク！！ツー！！』

大場『明らかなボール球だろ…。』

木村（だめだ。俺なんかにこんな名門のエースの球なんて打てるわけねえ…。みんな…ごめん。）

誠（このバッター…。ここ最近まったく当たってないしこの打席も狙い球を絞れてない…。見せ球は不要だな。3球で片付けるよ。兄貴。）

誠がサインを出す。

健太（わかった。）

健太がうなずく。

（バン！！）

木村（やばっ！！）

ストレートがアウトローに決まった。

『ボール！！カウントワンボールツーストライク！！』

誠『ちつ。わずかに低かったか。でも次で終わりだ。』

木村（助かった）。見逃し三振じゃかつこつかないよ。でも次でどうせ三振だな…。）

『キムタロー！！』

一塁コーチャーボックスから声がした。

松坂『キムタロー！！お前！！今までなにやってきたんだ！？思い出せよ！！俺らが一年生だった頃を！！』

木村（……！！1年の……とき。あの頃は部員もいなくて上の学年も大学受験とかいってみんなやめてったなあ。結局夏の大会も1年の頃は人数不足で出られなかったなあ……。）

松坂『どんなに部員が少なくても、夏にいろんなチームと戦いたくて……少しでも多く勝ちたくて……！！一生懸命やってきたじゃんか！！』

副島『そうだろ……あのキツイ練習で何度も何度も倒れたりしたじゃんか……！！』

島谷倫『お前だって！何万本とバットを振ってきただろ……！！その手を見てみるよ……！！』

木村（みんな……。）

松坂『お前なら打てる……！！あとはその1球にかける……！！』

大場『先輩……！！』

慶野『打ってください……！！』

木村（……！！）

健太がセツトポジションに入る。

健太（バッターの目が変わったな。気を抜くわけにはいけないかな。……）

木村（絶対打つ……！！満塁にしてくれたみんなの努力を無駄にはできねえ……！！）

木村（あのフォークは狙っててもなかなか打てるもんじゃない。こ
こはストリートに絞って…!!）

健太が投げる。

ビュッ!!

（カクッ!!）

誠（コイツがフォークを狙う可能性は0%!!兄貴のストライクを
とるフォークで…見逃し三振だ!!）

木村（1・2の…3!!）

（カキン!!）

健太『えっ…?』

誠『えっ…?』

木村『えっ…!?!』

ビュー!!ポンッポン!!

大場『よっしゃあ!!!!!!!!』

打球は右中間をまっぴたつに破った。

ツーアウトだったのでランナーのスタートがよく、一塁ランナーも
一気にホームインした。

これで一気に3点を返し、9 - 8。

点差はわずかに一点差となった。

健太『今のアイツ…フォークを狙ったか？』

誠『いや。確実にストリート狙いだっただけだ。』

健太『ならなんで俺のフォークを？』

誠『わかんねえ。兄貴のフォークを狙わずにいきなりヒットにできるなんて享神高校の桜沢以来じゃねえか？』

健太『アイツは別格だ。俺でもアイツには敵わねえからな。』

誠『ずいぶんと弱気だな。8点もとられて気が狂っちゃったのか？』

健太『んなわけねーだろ。まあ享神とは決勝にいかなきや当たらねえんだから今考えることじゃねえ。ツーアウト二塁だ。次は8番だし落ち着いていくぞ。』

誠『だな！まだ一点差だ！よろしく頼むぜ！兄貴！！』

長岡『おいおい…。今のフォークをツーベースだぜ！？』

南『案外やるね。ガリ勉高校のくせに。』

豊己『今のヒット…今の打席、太郎は明らかに直球狙いだっただけがとつさの反応でヒットにした。成長したな。太郎。それでこそ俺の息子だ。』

N o . 1 5 : プ ロ 野 球 選 手 の 息 子 (後 書 き)

感想お願いしますm (.) m

N o . 1 6 : 魔球！四段ドロップ（前書き）

今回は主に守備です？

No.16：魔球！四段ドロップ

（ザアザアザア！！）

さっきまでの雨がさらに強くなってきた。

『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！』

二死二塁の一打同点の場面だったが8番の島谷倫は三振に打ち取られスリーアウト。

しかし邦南は9 - 3で迎えた8回の表に打者9人の猛攻で一挙5点を返しこれで9 - 8。

序盤に大量9点のリードしていた愛農大名林がわずか1点のリードとなった。

8回の裏、名林の攻撃は3番の長岡から。

長岡『やれやれ。困っちゃうね。こんな試合になるなんて思ってもみなかったよ。まあ名門の俺たちにも意地つてもんがあるからね。そこら辺考えて配球してよ。』

西口『。。。』

小宮は5回途中からリリーフし、今までのアウト（7個）を三振でとる好投。出したランナーはフォアボールのランナーの一人だけというピッチング。

小宮『このバッターがこのチームで一番怖いバッターかな。要警戒

だね。』

（ザアザアザアザア！！）

西口（クソっ…。こんな雨じゃボールが滑ってストレートでカウント稼がないとすぐフォアボールでランナー溜めるぞ…。）

西口はストレートのサインを出した。

しかし小宮は首を振った。

西口がサインを出す。

四段ドロップのサイン。

小宮は首を縦に振った。

西口（おいおい…。まだ未完成なのに大丈夫なのか…？）

小宮『この程度の雨で揺らいでちゃ…』

小宮が投球モーションに入る。

小宮『名東黒シャー（名古屋東ブラックシャークの世間での略称）でエースなんか務められないよ！！』

（グググッッ！！！！）

長岡『な…なんだ！？この変化！！』

（パン！！）

『ストライク！！ワン！！』

小宮『へっ！！』

明日翔『ナイスボール！！』

西口『。。。』

小宮（次も四段ドロップだ。。。）

小宮は四段ドロップのサインに頷いた。

小宮が投げる。

（ギュギュグギュ！！）

長岡『またこのボールか！』

（カン！）

『ファールボール！！』

副島『よし！！2球で追い込んだぞ！』

小宮（当てられたか…さすがだ。この3番はそう簡単には三振してくれない…。）

西口（次はこれだ。）

西口がチェンジアップのサインを出した。小宮はこのボールが中学のときまでは決め球だった。

小宮（チェンジアップ？いや、ここは1球高めにストレートを見せてからまた四段ドロップで…）

小宮は首を振った。

しかし西口のサインは変わらない。

小宮はもう一度首を振ったがサインはチェンジアップのまま。

さらにもう一度首を振ったがチェンジアップのサインは変わらない。

長岡『タイム！！』

あまりのサイン交換の長さにしびれを切らした長岡が打席をはずす。そして小宮が西口をマウンドに呼ぶ。

小宮『どうしたの？ボーツとしてた？』

西口『んなわけねーだろ。俺はお前の四段ドロップも確かにいい球だと思うがチェンジアップのサインのが安心して出せる。』

小宮『なんで？』

西口『名東黒シャーはお前のチェンジアップで全国の頂上の一つ下まで行けたんだぜ。』

小宮『そうか？正捕手の西口くんはもちろんショートで1番だった多賀谷とか4番の勾城とかのお陰だと思っけどね。まあそれにしてもあの戦力で全国制覇できなかったのはエースの俺の責任かな。』

西口『おっと、話がそれたか。とにかくチェンジアップで頼むぜ。』

小宮『おう。』

ちなみに今、小宮と西口が普通に会話しているのはマウンドに大場もいたからである。

ちなみに大場が二人の關係を知っているとは二人は知らない。

『カウントツーナッシング！プレイ！！』

小宮『これでもくらいな！！！！』

ビュッ！！！！

長岡『これは…！！？』

（ブン！！）

『ストライク！！バッターアウト！！』

長岡『クソ野郎…。まだあんないいボール持ってたのか…。』
大場『よっしゃー！！ワンナウトワンナウト！！』

『4番、ピッチャー、下村健太君。』

№ 16：魔球！四段ドロップ（後書き）

感想お願いしますm (・) m

No.17:失投

『4番、ピッチャー、下村健太君。』

（ズキズキ！）

健太（脇腹痛すぎ…。）

健太は前に述べた通り脇腹に小さくはないだろう怪我をしている。

（ザアザア！！）

健太（ホントなら当然雨でコールドゲームってところだが1点差で8回の裏だし審判もコールドにはしづらい…。）

小宮（なんだこのマウンド…。ぐちゅぐちゅしてて投げづらい。こりゃ雨でボールが滑りやすいのはもちろん、足を踏み込むのさえ気を付けないとすぐ滑るぞ…）

小宮が投げる。

ヒュー！！

小宮『あっ！！！！』

西口『どこ投げてんだ！？』

雨でボールが完全に抜け、ボールはキャッチャーのはるか上に飛んでいき、バックネットに当たった。

小宮（投げずらいなあ……こりゃ早くしないとつとびしょびしょになるぞ。）

西口がチェンジアップのサインを出した。小宮「オッケー。」

小宮が投げる。
ビュッ！！

しかし…

西口（ヤバイぞ……！コイツは……！）
健太「完全な失投ど真ん中変化球……！」
小宮「ちつくしょ……！！打つな……！」

（カッキン……！）

江澤「いったな。」

天宮「どこまで飛んでいくんだ……？」

（ボサッ！）

南「うつひよー。場外かよ。飛ばすねー。」

健太「これで10-8。二点あれば十分だ。」
名林のエースで4番が復活した。

No.17:失投(後書き)

感想もらえるとうれしいです???

No.18：格の違い

『5番、ファースト、江澤君に代わりまして、西本君。』
にしもと

西本『この弱小チームでよくも俺らをここまで苦しめてくれたじゃん。お前らは十分よくやったよ。でもね…』

（カキーン！）

小宮『クソっ！！アウトローにきっちり決まったストレートをうまく打ちやがって！！』

打球はレフト前ヒット。

これで一死一塁。

『6番、レフト、天宮君。』

天宮『このピッチャーも1年生。やっぱ俺たちとはいろんな面で…』

西本『格が違うんだよ。』

小宮が天宮へ第一球を投げる。

（サッ！！バーン！！）

西本『ほー。クイックは案外練習してるんだ。いい精度だと思うよ。でもね…』

小宮がセットポジションにつく。

一塁ランナーの西本のリードの大きさもしつかりと確認した。

サインの交換が終わった。

そして…

西本（ここだ！！！！）

西本は小宮のクイックを完全に盗んだつもりだったが…

小宮（甘いんだよ！！）

ビュッ！！

小宮が素早く牽制をした。

小宮『こっちこそあんたたちとは格が違うんだよ！！！！』

西本『なにっ！？！？』

西本は右足に体重が乗っていて一塁へ戻るのが遅れた。

（パン！！）

『アウト！！！！！！』

大場『よっしゃ！！！！ナイス牽制だ！！！！』

氷室『よし。これでツーアウトだ。』

南「ふーん。わかつちやった。相手の弱点。」

南が不適な笑みを浮かべていた。

N o . 1 9 : 見 抜 か れ た 弱 点 (前 書 き)

今回は名林の8番バッターの南がキーマンです？

No.19：見抜かれた弱点

南『天宮！！タイムだ！！』

天宮『タイムお願いします。』

『タイム！！』

小宮『なんだ？この場面でなんか仕掛けてくる気か？』

南『わかったか？』

天宮『おう。お前の言う通りにしてやる。』

南『さっすが、キャプテンは話がわかるなあ。』

『プレイ！！』

成田『おい南。なに話してたんだ？』

南『まっ。見てりゃあ分かるって。』

（カキン！！）

打球はライト線際へ。

ライトには藤武に代わって代打に出た氷室がそのまま守備についている。

氷室『うわっ！！きたっ！！』

『ファールボール！！』

氷室（よかったー…。）

副島『おい氷室！！もっとラインによれ！！右中間に守りすぎだ！！違う！！今度は行きすぎだ！！もっと左！！左！！そこ！！オツケー！！』

成田『なーるほど。俺もわかった。』

（カキーン！！）

南『よし！！これはヒットだ。』

大場『氷室！！突っ込め！！とれるぞ！！』

（ポテン！！ポテン！！）

打球はライト前ポテンヒット。

ツーアウトからまたランナーが出た。

副島『積極的にな！！今のも一歩目が遅かったぞ！！』

『7番、ライト、成田君。』

（カキン！！）

氷室（うわあ。また来たよ…。）

打球はまたライト前。今度はクリーンヒットだ。

（バスっ！）
氷室

氷室が打球を弾いたが、大きく弾いたわけではないのでランナーは一二塁のまま。

『8番、セカンド、南君。』

（カキン！！）

『ファール！！』

西口『またライト方向のファールか…。左打ちのコイツは無理に引っ張ってきたな。つまりはライト方向を狙っている。今までの打席では逆らわずに打っていたのに…怪しい。』

小宮（なにかたくらんでるよ。）

西口（ここは外角のカーブで様子を見よう。）

小宮（オッケー。）

ビュッ！！カクッ！！

南（ライトへ狙って…！！）

（ブン！！）

『ストライク！！ツー！！』

西口（やっぱりライト方向狙いか。このアベレージタイプのバッターがああ球をあそこまで引つ張ろうとするのはおかしい…。）

慶野『おい氷室！！アイツらお前の方狙い撃ちしてるぞ！！俺が右中間はカバーするからお前はもっとラインによれ！！』

眞野『見てみるよ。あのライトまた指示されて守備位置変えたぜ。』
矢野崎『いや。違う。指示されなければ守備位置を変えることもしない。つてのが正しいようだな。』

長岡『そーいえば、さっきもあのセカンドのやつに大声で指示されてたよな。』

健太『つまりだ。あのライトは初心者レベルだ。だからさっきそれに気づいた南は天宮にその事を伝えたんだろう。さすがだな。』

江澤『さすが。全国模試で上位3位に常に入るようなやつは頭の回転とか分析力とかが違うね。』

南（よし。バッテリーもそろそろ気づくと予想してたよ。だからあんなあからさまにライト狙ってる演技したんだよ。それでもってセンターのポジションニングの指示も想定通り。まさかここまでうまくいくとは思ってもみなかったけど。）

ビュッ！！

南『そんなんじゃ左中間がら空きだよ！！』

（カキーン！！）

慶野『なにっ!!』

南『よしっ。完璧。』

天宮『スゲーな南は。さっきタイムとって話した内容を完全に再現したよ。』

長岡『よっしゃあ!! ナイバッチ!!』

南『我ながら、天才。』

南のスリーベースで名林がさらに二点を追加し、これで12-8。
邦南はこれ以上点をとられたくないところだ。

『9番、キャッチャー、下村誠君。』

西口（ここでこいつか…。）

小宮（もう一点もやれない。絶対にこいつを抑えてやる。）

No.19：見抜かれた弱点（後書き）

感想もらえるとうれしいです？

N o . 2 0 : 翔真の男気(前書き)

今回は大場翔真がメインです？

No.20：翔真の男気

『9番、キャッチャー、下村誠君。』

8番南の二点タイムリースリーベースで12-8とした愛農大名林は尚二死三塁で強打者の誠を迎える。

小宮（ライト方向を完全に狙われてた…）

西口（内角中心に攻めてできれば左方向に打ち取るか三振が理想だが…）

ちなみに誠は右打ちだ。

小宮（下村誠には一打席目で内角のボールをバックスクリーンまで運ばれてる…。）

西口（これまでの打席からして内角は得意コースのようだな。こりや仕方ないが外角中心で攻めるしかない。慶野…氷室のアシスト頼むぞ。）

誠（流し打ちは苦手なんだよなあ。）

小宮が投げる。

ビュッ！！

誠（外角ストレート！！もらった！！）

（カキン！！）

西口（ちくしょう！！もう一点もやれないのに！！）

小宮（またライト前か…）

大場『おーしゃあーっ！！オーライオーライ！！』

副島『翔真！！』

（バシッ！！）

翔真がダイビングキャッチした。

一塁ベースカバーの小宮とバッターランナーの誠の競争。

誠『なにっ！？あの打球を！？』

健太『ファーストが処理するだっ！？！？』

眞野『なんて守備範囲してやがる…。』

小宮『大場さん！！』

大場『おうよ！！』

誠『セーフになってやる！！』

（バン！！）

『アウト！！！！！！！！』

小宮『よし！！ここを4点差で防いだのは大きいぞ！！』

9回の表、12-8の4点ビハインドで迎えた邦南の攻撃は9番の

氷室から。

(ブン!!)

『ストライク!! バッターアウト!』

健太『監督!!』

浜津(愛農大名林高校監督)『交代だな。』

大場『なに!?!』

慶野『ピッチャー交代だと?!?』

『愛知農業大名林高校、ピッチャー下村健太君がショート。ショートの長岡君がピッチャー。以上に代わります。』

ポジション変更

下村健：1↓6

長岡：6↓1

健太『頼んだぜ。』

長岡『まさかこの俺まで出す羽目になるなんてな。ずいぶんと炎上してくれたな。脇腹が痛いとか言い訳すんじゃないぞ。』

健太『お前!俺の怪我のこと知ってんのか?』

長岡『当たり前だ。7回くらいからずっと一人で痛そうにしてたじやねえか。気づいてないとも思ったか。ばーか。最初は同情したが試合に出てんだから関係ねえ。全力でやれよ。エース。』

健太『ありがとな。長岡。とにかくあとアウト二つだ。思いきっていけ。お前のストリートならこいつらなんか楽勝だ。』

長岡『おう。』

大場『どんな球投げるんだ…？』

長岡がセットポジションから投げる。

（ドバンッ！！！！）

慶野『これって…』

大場『たぶん出てるな。150km/h。』

慶野『こんな球…。』

大場『はあ？何言ってるんだ？楽勝だろ。』

慶野『…だいいいな。』

大場『じゃあ、もし俺が打ったら、この点差だし当然バントはしなくていい。だから、お前も続け。小宮と西口なら希望をつないでくれる。頼んだぞ。』

慶野『翔真…。』

『1番、ファースト、大場君。』

No.20:翔真の男気(後書き)

感想お願いしますm(´・`)
m

No.21: 気合いの一撃

『1番、ファースト、大場君。』

『翔真!! 打ってくれ!!!!』

大場『3年生は負けたらこれが最後…。』

(ズバーン!!)

『ストライク!!』

木村『うつ…。』

島谷倫『くそ…速い…4点差か…』

大場『端から見たら相当速いように思えるがボールの伸びはそこま
でだ…。決して打てない球じゃない。』

長岡『こいつを撃ち取ればゲームセットと同じだ!!』

長岡が投球モーションに入る。

ビュッ!!ゴウ!!!!

大場『あの人たちともつと野球をやっていたい!!あの人たちともつ
ともつと上まで勝ち進みたい!!!!』

(カキン!!!!!!)

打球は痛烈なセンター返し。

ピッチャーの長岡は思わず尻餅をついた。

長岡『びびった！。死ぬかと思っただぜ。』

これで一死一罌。

大場『俺は打ったぜ。文哉も続く約束だろ。』

慶野『オラ！！こいよ！！！！』

慶野がピッチャーに向かって吠えた。

No.22:野球が好きだから(前書き)

また一人しか進みません…

いったいいつになったら試合が終わるのでしょうか(笑

辛抱強くよろしく願いますm(・ー・)m

No.22：野球が好きだから

続くバッターは2番の慶野。

昔、慶野は大場と同じ中学だった。

といっても大場は硬式のクラブチーム名古屋東ブラックシャークに入っていたため中学時代は帰宅部だが…

慶野は中2のときにテニス部から野球部に移籍した。

慶野『アイツがあのととき野球に誘ってくれなかったら今ごろここに俺は立ってない…。』

3年前…

わかばはちまえ

場所は名古屋市立若葉八前中学校。

（パコン！！）

（パコン！！）

『よっしゃー！！また勝ったー！！』

慶野『また負けたよ…。』

慶野は昔から運動神経はよかったがよりによってテニスができなかった。

それを時々大場が下校するときにチラ見していた。

そして大場と慶野がはじめて顔を会わせた日になった。

二人は1年生のころも2年生になってからもクラスが離れていたの
で話すことはなかった。ただし大場はすでに野球がかなりうまかつ
たので学校では有名だったが。

慶野は運動神経は割りといい方のごく普通の中学生。

（パソコン！）

今日は慶野は普通に練習をしている。

慶野『なかなかうまくいかないなあ…。』

慶野は中学生になってからテニスを始めた。

それまでは特にこれといったスポーツはやってこなかったが、中学
生になってテニスをやろうと決めたのだ。

しかしなかなか上達しない。こんな思いは初めてだった。

そのとき…

『キミ？野球やってた？』

突然肌の黒い男の子が話しかけてきた。
後に親友となる、そう。大場翔真だ。

慶野『え？俺が？』

大場『オレ大場翔真ってんだ。野球大好きな中学二年生だよ。野球
やってなかった？』

慶野『ううん。やったことないよ。』

大場『ホント！？ならやろうよ！！そのテニスのスイング見る限り
絶対いいバッターになれると思うよ！』

慶野『俺の？へたつぴなテニスのスイングを見ていつてるの？』

大場『おう。テニスのスイングにしては力みすぎですごいダメなフォームだと思うけど野球やってみたら絶対うまく行くと思うよ！』

慶野『なんで？』

大場『だってキミのスイング、野球のスイングだもん。』

それから慶野は野球部に体験しにいき本入部することになる。

そして3年の市総体では若葉八前中学の3番センターに定着し、ベスト8進出に貢献する。

慶野は俊足をいかすために左打ちだ。

回想シーン終わり→

慶野『アイツが居なきゃオレはここに立ってない。野球っていう大好きなものができたからオレは今まで楽しかった。アイツが野球を誘ってくれたからオレは……！』

（カキーン！！！！）

『ファール！！』

慶野『当たった……！！』

大場『ナイススイング！！当たるぞ！！いけ！！』

慶野『オレは打つ！！大場と約束したからじゃない。先輩のため、そして何よりチームのために絶対打つ！！だってオレは……』

ビュッ！！

慶野『俺は野球が好きだから。』

（カキーン！）

打球は左中間へ。

眞野『天宮！！カバ―頼む！！』

天宮『おう！！』

眞野『どらっ！！！！』

センターの眞野が飛びついた。

慶野『クソっ！！捕るな！！！！』

（バスっ！！！！）

（コロコロ）

大場『よし！落ちた！！』

打球は一瞬眞野のグラブにはいったが、眞野のグラブがそれを弾いてしまった。

副島『ボールが転がってるぞ！！！！』

小宮『まわれ！まわれ！！』

ハーフウェイの体勢だった大場は打球が落ちた瞬間にスタートを切ってボールが転々としてる間に一気に三塁へ。そして打った慶野は…

健太『セカンドだ!!間に合うぞ!!』

天宮がようやく捕球し二塁へ送球する。

南『よし!!タイミングは完全にアウトだ!!』

小宮『まずい!!これじゃ…タッチアウト…』

(ギュギュツ!!)

西口『え…』

誰もがこのままいけばアウトだと思ったが…

(バシツ!!)

南が捕球してタッチしようとしたが…

南『あれ?ランナーは?』

健太『ファーストだ!!』

慶野は一二塁間の真ん中辺りまでいったがそこから驚異の切り返りで一塁に戻った。

整理するとこれで一死二三塁になった。

小宮『すげ…』

西口『全力疾走から瞬間的に切り返した…並みの人間じゃ…いや、全国にもあんな切り返しができるやつはほとんどいないだろう…』

大場『さすが…スポーツテストの反復横跳びで80回オーバーしたやつは違うね。』

ちなみに慶野は反復横跳び(20秒)で最高83を記録したことがある。

これがどんなに難しいことかわかるだろう。(ちなみに高2の反復横跳びの10点評価の回数は64回以上ははず。)

長岡『魅せてくれるねえ。まあこんくらいのやつらが相手じゃねえとやりがいがないよな。』

一死一三塁でここからクリーンナップ。

ここから邦南野球部の真価が問われる…。

No.22:野球が好きだから(後書き)

感想お願いしますm(・)m

N o . 2 3 : 未来を拓く！(前書き)

三年生頑張れ？

って思っています？

No.23：未来を拓く！

大場『クリーンナップがしっかり働かないと、この試合の勝ち目はほぼ無に等しい。』

慶野『頼んだぞ。お前ら。』

9回の表、一死二三塁。4点ビハインドの邦南高校の攻撃。
『3番、ピッチャー、小宮君。』

（ザアザア！！！！）

雨はピーク時ほど降ってはいないが、やはりかなり降っている。両軍ナインも全員が服から雨水を垂らしている。

小宮『この天気では圧倒的に攻撃側が有利だ。逃せない。』

長岡はセットポジションについた。

そして一呼吸おいて投球モーションに入る。

ビュッ！！

長岡『しまっ……！！！！』

小宮『うわっ！！！！』

（ガッ！！！！）

長岡の投球は小宮の足首に当たった。

雨の影響で完全に制球が狂った。

長岡『クソっ！うぜえな。この雨。』

副島『小宮！！大丈夫か！？』

小宮『いてて…。まあたぶん大丈夫です…。』

これで一死満塁の大チャンス。
バッターは…

『4番、キャッチャー、西口君。』

長岡『1点くらいなら別にくれてやっても大丈夫だ。アウトをひとつとることを最優先する。』

西口（満塁でカウントは悪くしたくないはずだ。初球は必ずストライクをいれてくる。アウトコースのストレートしかない！！）

ビュッ！！

ゴウ！！！！

西口『インコースのストレート！？このカウントで！？』

西口（ちくしょう…！バットが止まらねえ…！！）

（ボン！！）

大場『あ…』

打球は一塁ファールグラウンドへ。

代打の西本に代わって一塁の守備についている^{たかばやし}高林が両手をあげる。

（パシッ！！）

『アウト！！！！！！』

西口『ちくしょー！！！！！！』

（バン！）

西口が地面にバットを叩きつけた。

これでツーアウトになってしまった。
あとワンナウトで名林の勝利だ。

しかもここから邦南のもっとも脆いところ……そう。下位打線に向か
っていく。

『5番、セカンド、副島君。』

副島『俺たち3年生が天命を握ってる。』

松坂『自分達が打たなきゃ高校野球が終わる。』

木村『でもオレらが打てばまだ野球が続けられる。』

島谷倫『野球の神様は俺たちを試してるんだな。』

副島『だな。まあ野球の神様は乗り越えられない試練なんか与えな
いんだよ。乗り越えられる試練を打開するのは自分自身だ。他の人
に頼ってちゃいずれ負ける。自信持とうぜ。みんな。』

松坂『当たり前だろ。むしろ打てる自信しかねえよ。』

木村『つていうかお前が打たなきゃオレらにはチャンスすら与えられないんだからな。』

島谷倫『そうだぞ。頼んだぜキャプテン。俺たちにつないでくれ。そしたらあとはオレ達に任せろ。』

副島『オツケー。じゃ、みんな行くぜ!!!』

3年全員『おう!!!!!!!』

N o . 2 3 : 未来を拓く！ (後書き)

感想お願いします？

No.24：絶対的守護神（前書き）

今回は享神高校の桜沢が話に出てきます？

後の話のキーマンとなる人物です？

こいつ誰だよねとか思ってもそのときはスルーしちゃっていいです？

No.24：絶対的守護神

南『今日の長岡、ピリツとしないなあ。』

健太『だな。まあこの雨でベストピッチできりゃあ苦労しないぜ。』

（ザアザア！）

雨はまだ降っている。

長岡『お前らみたいな弱小高校相手にそう何点も取られてたまるか…。』

中学の頃長岡は奈良にいた。

奈良の私立中学の鵬明中学だ。

長岡は当時県内最強だった鵬明中学の軟式野球部のエースで4番、かつキャプテンを務めていた。

そして全日本軟式野球大会でぶっちぎりで優勝。しかし長岡は全国大会初戦で負傷し（軽傷）、思うようなピッチング、打撃ができずに2回戦で愛知県の優勝チームの陰奨中学に負けた。

長岡は愛知のチームに負けた。だから愛知にきて頂点に立とうと決心した。兵どもと自分を磨こうと。

そして愛農大名林に入学する。
長岡は当然ピッチャー志望だ。

1年生からエースの座を奪おうとさえ考えていた。それほど自分に自信があつたのだらう。

しかし皆がものが違った。

来た1年生のほとんどが他の1年生や先輩をみて驚いた。

当時ピッチャー志望だったのは長岡だけではない。セカンドの南も最初はピッチャー志望だった。他にはライトの成田、ファーストの江澤、ざっと30人はいただらう。

今スタンド組になっているやつでさえほとんどが中学時代の実績は十分なやつらだった。

そんな中、1人飛び抜けた怪物がいた。

上級生組と混ざって練習してもなんの遜色もない1年生がいた。

そう。下村健太だ。

健太は1年生から名門愛農大名林の5番レフトとして活躍。新チームになってからは4番エースとして秋の神宮大会制覇、春のセンバツ高校野球大会準優勝に大きく貢献。特にセンバツでは1年生ながらセンバツ記録（当時）に並ぶ3本塁打を記録。

ちなみに現在のセンバツ本塁打記録は今から約4か月前のセンバツで4本塁打を記録した愛知県の享神高校きょうしんこうの4番桜沢さくらざわが記録。ちなみに桜沢は2年夏の甲子園でも2年生ながら当時T.L.学園の清原の5本塁打を抜く6本塁打をを記録し既にドラフト一位が確定的なスラッガー。現時点で高校通算96本塁打を記録。

…話は戻るが長岡は入学した瞬間、下村健太と出会い、ピッチャーを諦めることになる。

（バン！！）

『ストライク！！ツー！』

副島『く…速い…』

二死満塁。4点ビハインド。バッターはさっきツーランホームランを放っているキャプテンの副島。

長岡『俺は2番手ピッチャーなんじゃねえ。俺は名林の…』

副島『絶対打つ！！！！』

長岡『絶対的守護神だ！！！！！！！！』

長岡が渾身のストレートを誠のミットめがけて投げこむ。

（カキン！！！！！！！！）

N o . 2 4 : 絶対的守護神（後書き）

感想お願いします？

N o . 2 5 : 筋肉バカ (前書き)

また一人しか進みません…？
申し訳ないです。。。

No.25：筋肉バカ

（カキン！）

誠『セカンド！！』

打球は二遊間へ。セカンドの南が追い付く。

一塁ランナーの小宮はスタートを切っていたので二塁フォースアウトは無理。

南は一塁へ精一杯送球する。

南『これで…ゲームセットだあ！！』

健太『よし！』

松坂『ヤバイ！！！！』

副島『ちくしょー！！』

（ズリッ！！）

南『！？』

ビュッ！！

木村『えっ！？』

健太『うわっ！』

高林『バカ野郎！！どこ投げてんだ！！』

南は泥沼のようなグラウンドに足を滑らせてしまい、送球が高めに浮いた。

高林『おりゃ!』

ファーストの高林がジャンプする。

(パシッ!)

そしてなんとか捕球。

高林が着地してベースを踏めばゲームセット。
副島の足が少しでも早ければ試合は続く。

(ドン!!)

二人が同時にベースを踏んだ。

判定は…

『セーフ!セーフ!』

高林『なに!?!』

副島『助かった。』

『バックホームだ!!』

高林『え…?!』

高林がホームベースの方に振り返った。

二塁ランナーの俊足慶野がホームに向かっている。

高林『間に合えっ！！！！』

ビュッ！！

（ザザーッ！！）

『セーフ！！』

慶野がキャッチャーのタッチをうまくかわしながらホームイン。

これで2点を返し12 - 10。点差は2点差となり尚二死二三塁の一打同点の場面。

バッターは6番の松坂。

松坂『キャプテンは危なっかしーね。まあ一応俺たちに回すって約束は守ったし、オレも続くしかないな。』

松坂は小宮と西口が来る前までは4番バッターだった。

『6番、サード、松坂君。』

木村『絶対打てよ！お前で決めちまえ！』松坂『言われなくても決めるつもりだぜ！』

島谷倫『任せたぞ！！』

チーム1の筋肉バカに邦南サイン全員が託した。

No.25：筋肉バカ（後書き）

感想待ってます？

No.26:元4番(前書き)

今日はまあまあ長いです？

読んでくださった方は感想もらえると嬉しいです。。。

No.26：元4番

木村『打てよ！！健祐^{けんすけ}！！』

誠『タイムお願いします。』

『タイム！！』

誠がピッチャーの長岡の元へ向かう。

誠『どうしますか？』

長岡『なにが？』

誠『いや、このバッターと勝負するより、次の7番と勝負した方がいい気がします。何となくですが。』

長岡『はあ？俺が6番バッターを敬遠だつて？』

誠『はい。このバッターは見る限りスタンドにまで運ぶ力も持っています。他のバッターとはスイングスピードも違いますし。』

長岡『ここは強気に押していくしかねえだろ。そんなに俺が打たれるとおもうのか？』

誠『…はい。正直今日の長岡先輩は持ち味のストレートも走つてない上に、制球も甘い。だから割りと力のある邦南の上位打線にはこことくどく打たれました。』

長岡『下がれ。勝負だ。』

誠『でも!』

長岡『敬遠なんてする気はねえ。さっさと帰れ。』

誠『…、…はい。』

『プレイ!!』

誠(2点差のツーアウト二三塁、一打同点の場面。長打はもちろんヒットすら打たせてはいけない。まずはストレートです。)

(ズバン!!)

『ボール!!』

誠(明らかに要求したところよりも高い…。長岡さんはスタミナは問題ないくらいあるし全然オツケーだ。でもこれだけ球が浮くってことは…)

誠はまたストレートのサインを出した。

ビュッ!!

(ズバン!!)

『ボール!!』

長岡『クソ…』

誠（間違いなく投球に集中できていない。いつもの長岡さんならこんなボール球が続くわけがない。今のも明らかにボール球だと分かる球だ。きつと雨がどーたらこーたらで投球に集中できていないんだろう。リリースポイントが完全に速い。だからバッターも球の伸びは感じない。だからストレートに押し負けずにバッターも打ち返す。）

誠がスライダーのサインを出した。

長岡『スライダー？こんな雨で変化球でストライクが取れるかよ。特にスライダーなんてボールを切るようにして投げるんだからな…』

長岡は首を振った。

誠（絶対にストレートはダメだ。このカウントで今の長岡さんにストレートを投げさせちゃいけない…。）

誠はカーブのサインを出した。

ちなみに長岡は速球中心のピッチャー。

大体の球種の割合は、

ストレート… 80%

スライダー… 18%

カーブ… 2%

このデータから分かるようにカーブは基本的に投げない。

長岡『カーブだあ？そんな球じゃダメに決まってるんだろ。ここはストレート…』

長岡はまた首を振った。

しかし誠はまたスライダーのサインを出した。

長岡は断固としてストレートしか投げないつもりだ。

一方の誠はストレートは絶対に投げさせないつもりだ。

打者の松坂はこの長い間に対して集中力を切らすことなど考えられないほど集中している。

一方バッテリーは既に見えない喧嘩状態だ。

長岡『わかったよ…。投げればいいんだろ。投げれば。』

誠（よし…。）

長岡がやっとボールを投げる。

ビュッ！！

（カクッ！！）

（パン！！）

『ボール！カウントノー 스트ライクスリーボール！！』

長岡『ちつくしよ！。ノー スリーかよ。』

誠（これでいい。次も変化球だ。）

誠はまたスライダーのサインを出した。

しかし長岡は…

長岡『何がしてえんだよ。おい…。またスライダーって…歩かせる
気が…？』

松坂（ノー スリーだ。セオリーならここは1球見るべきだが…。甘
く入ってきたら思いっきり叩くぞ。）

…

…

長岡は5回も首を振ったがサインはカーブかスライダーの変化球。

この雨で細かい制球の利かない長岡に変化球でカウントを稼げるハ
ズがない。

誠は歩かせる気だ。

誠（このバッター。明らかに他のバッターとは狙いが違う。コイツ
は本能で打ってくるタイプだ。甘い球が来たら確実にやられる。次
のバッターはさっきやっとヒットを打ったようだがさほど打撃のセ
ンスがあるとは思えない。この6番を歩かせて次の7番と勝負した

方が確実に撃ち取れる可能性が高い。」

誠の考え通り、松坂は野性の勘でボールにしがみついてくるタイプだ。

その野性の勘はほとんど外れるが、こういうしびれるビハインドの場面ではその野性の勘の的中率は大幅にアップする。

つまり、松坂は逆境に強い男だ。

誠はそれを何となくだが感じていた。

誠はいぜんとして変化球のサイン。

長岡『こうなったら…。』

なんと長岡はスライダーのサインに頷いた。

その長岡の狙いは…

長岡（いくらキャッチャーがサインを出そうとも、ボールを投げるのはピッチャーだ。）

長岡はスライダーのサインに頷きながらもストレートを投げようとしている。つまり、サイン無視だ。

長岡がセットポジションから投球モーションに入る。

（ゴゴゴゴゴ…）

長岡が足をあげる。

誠（まさかとは思いが…。ない…とは言えない。）

長岡『オレのストレートが…』

（ガッ！！）

長岡が投げ込む。

長岡『そう簡単に打たれてたまるか！！！！』

ビュッ！！

誠（ストレート！？サイン無視か！！）

松坂『甘い！！これを打たなきゃ何を打つ！！』

誠 だからストレートはダメだって…

誠は目を閉じた。

打たれることを確信したからだ。

（カッキーン！！！！）

長岡『え…』

打球はレフトへ。

レフトの天宮が追う。

キャッチャーの誠は打球を目で追うこともしなかった。

（バサッ！！）

邦南ナイン『……！！！！』
名林ナイン『……』

『よっしゃー！！！！！！！！！！！！！！！！！！』
『入ったー！！！！！！！！！！！！！！！！！！』
『ナイスバッティン！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

打球はレフトスタンドへ飛び込む、逆転のスリーランホームラン。
9回ツーアウトから邦南が遂にこの試合初めてリードを奪った。

これで13 - 12。

邦南が愛農大名林を一点リードした。

誠は打たれた投手長岡に声をかけるつもりもなかった。
打たれたのはサイン無視をしてストレートを投げた長岡に責任があるのは当然だ。

誠『ふざけんな……。』

誠はマスク越しに泣いていた。

誠（長岡さんがストレートを投げれば無意識のうちに置きにくいのが
なんか容易に想像ができた……。だからこのバッターを歩かせて次の
バッターでゲームセットにしようと思ったのに……。）

長岡はピッチャー不利の苦しいカウントに立たされて無意識のうちにボールを置きにいった。

それを松坂は逃さなかった。

それを誠は事前に防ごうとした。

それを投げたのは長岡だ。

バックネット裏の下村健太の投球を見に来たプロ野球のスカウト達
はついでに長岡の球の球速をスピートガンで測っていた。
そのスピードガンには…

《 132 km/h 》

と表示されていた。

『さっきまでは140？終盤のいいボールを放ってたのになあ。』

スカウト達も話している。

長岡が逃げのピッチングをして打たれたという事実はそのにいた人
なら誰もがわかっただろう。

No.26：元4番（後書き）

次回からは遂に

最終9回の裏の名林の攻撃です？

この回で決着がつくのか…

どちらが勝つのか…

はたまた延長戦突入なのか…

楽しみにしておいてください？

あ…でも次回だけじゃ試合は終わらないです？

N o . 2 7 : 暴 踪 者 (ば う そ う し ゃ) (前 書 き)

今日からテスト準備のため少しの間お休みとさせていただきます m
ー・ (・) m

これからもよろしく願います？

No.27：暴跡者（ぼうそうしゃ）

その後の三年生軍も続いてさらに二死一二塁としたが9番の氷室がサードライナーに倒れスリーアウト。

しかし邦南が逆転し遂に9回の裏を迎える。

『1番、センター、眞野君。』

一点ビハインドで9回の裏の名林の攻撃はトップバッターの眞野から始まる。

眞野『俺たちが9回の裏で一点ビハインドだ…。せっかく12点も取ってやったのにピッチャーは何やってんだか。今ごろ瑞江はカンカンに怒ってるだろうな。』

小宮（さっきの回の僕の打席でのデッドボール…。正直今でもかなりヤバイ。歩くだけでじんじんするよ…。）

小宮は9回の表の逆転劇の際にコントロールを乱していた投手の長岡から足首にデッドボールを食らっている。

小宮（こりゃ打撲ってやつかな。）

眞野（俺は名門の1番バッターだ…。さすがにそろそろ本気出さね

えとマジで負けそうだぜ。)

名門の名林にも焦りが出ている。

西口(さすがにこいつらでもこの回ばかりは本気で一点を掴み取るうとしてくるハズだ。バッター一人一人の隙が少ないこの回が最大の山場だ。)

小宮が眞野に第1球を投げる。

(ガッ!!)

(ズキッ!!)

小宮『うぐっ!!』

ビュッ!!

ヒュー!!

(カシャン!)

ボールはキャッチャーの遥か頭上を越えていき、バックネットに当たった。

小宮(雨はもう大分小降りになってきた…。天は僕らの味方だ。でもこの状況…)

ビュッ!!

『ボール!!』

今のも完全にボール球だと分かるボール。

眞野は打率こそ3割前半から2割後半だが、持ち前の選球眼と粘り強さで出塁率は5割を超える。

小宮（既に大場さんは150球近く投げた。もう一度マウンドに立ってもたぶん上位打線に捕まるだろう。だからここは僕が踏ん張らないと!）

ビュッ!!

（パン!!）

『ボール!!スリー!!』

小宮（くそ…。ノースリーかつ…）

眞野（さっきの対戦の時より明らかにボールの勢いが違うな。何があった…。）

ビュッ!!

（パン!!）

小宮（くそっ…うまく投げれねえ…）

『ボール！フォア！』

眞野『よっしゃ。』

『2番、サード、矢野崎君。』

矢野崎『どうしちゃったの？先頭バッターをフォアボールだなんて負けたいの？』

西口『そんなわけねーだろ。少しは頭使え。』

矢野崎『相変わらず強気な性格だねえ。一年坊のくせに。』

ビュッ！！

（スッ…）

西口（なに！？）

小宮『バントだって！？』

松坂『セーフティーか！！』

（コン！！）

矢野崎は名門名林の2番打者だけあってバントはかなりうまい。

（コロコロ…）

西口『サード！！ファーストだ！！間に合うぞ！！』

西口がサードの松坂に叫ぶ。

松坂も猛ダッシュでボールに追い付く。

（パシッ！！ヒュッ！！）

松坂が一塁へ送球する。

タイミングは微妙。しかし、

大場『どこ投げてるっ！！』

（パシッ！！）

松坂の送球は大きく横に逸れ、大場はベースから離れてなんとか捕球する。これで無死一二塁。

松坂『わりい…小宮。』

小宮『何がですか？あんないいバントされちゃいくら送球がよくてもセーフでしたよ。悪いのはあのバントを決めさせてしまった僕です。』

『3番、ピッチャー、長岡君。』

（ズクッズクッ！）

小宮（さすがにこれは…投球に集中できないレベルの痛みだ…投げ

る度にどんどん痛くなつてく…。）

長岡『お前ら。もう絶対許さねえ。覚悟しろ。名林の守護神の俺から1イニングに5点だと？ふざけんな…。ふざけんな…。…。ふざけてんじゃねーぞ！……………！』

西口『！？！？！？』

小宮『なんだ！？』

副島『おいおい…。アイツ…狂っちゃったんじゃねえか？』

長岡が叫び出した。

長岡『エースで4番が怪我を隠してことごとく足を引っ張る。キャプテンもいっこうにチームをまとめようとしない。センターのやつも女の事考えててボールを後逸する。キャッチャーのやつは逃げ腰リードしやがる。セカンドのやつはまともに送球もできない。そんなでもってしまいいはこんな雑魚高校が俺から5点を奪って逆転しやがる。』

西口（殺気を…感じる…。）

小宮（こわっ…。）

長岡『こんなに野球やってて気分が悪くなったのは久方ぶりだああっ！……………！ぶっ殺す！！俺がテメーらみたいなクソチー

ムの夢とやらをぶっ壊してやるよ！……！！……！！……もうこりこりな
んだよ！……！！……！！……！！」

大場（…。）

南「長岡があーなるのはいつ以来だっけ？」

健太「最後に見たのは…たしか一年秋の県大会決勝のとき以来じゃ
ねえか？これが3回目だな。」

南「あーなると誰も止められないよね。」

成田「アイツは1年半もあーならなかったんだからその間心のダム
でせき止めてあつた怒りが今流出してるね。ありや相当ヤバイと見
た。」

江澤「あーなるとやたらと人の悪口言うからね。俺は言われてない
みたいけど。」

南「アイツはいままで守護神として名林を支えてきた。それなのに
俺らが守備で足引つ張っちまったから…結果逆転されて…。」

誠「どこが？逆転されたのは全部あの人の責任でしょ？俺のリード
を信じないからサイン無視して結果逆転ホームランだからな。ほん
と身勝手な人は困るわあ。」

西口（狂気して力んでるかと思えば打法は今までよりも力が抜けて
いて自然体だ…。こりや何の球狙ってるか想像もつかないな…。）

天宮『おい。よく聞け。お前らの考えは、間違ってるぞ。』

誠『なんすか？キャプテン。』

南『俺らにも言ってるの？』

天宮『当たり前だ。俺はお前ら全員の考えが間違っているとしか思えない。いずれ、こうなる運命だったのだろ。それがたまたま今日だったってわけだ。』

名林ナイン『…？？』

長岡『おら！…！さっさと投げろや！…！…！…！』

天宮『俺たちの弱点は、俺たちの中にある。それは俺たち自身で気がつかないといけない。』

No.27:暴跡者(ぼうそうしや)(後書き)

何度も言って申し訳ないですが、今日からテスト準備のためお休みとさせていただきますm(・|・)m

読んでくださったかはありがとうございます？

これからもホームスチールをよろしくお願い致します？

No.28：新魔球の更なる進化

天宮『一つ問うが、なんで俺らが今になってまだこんなに一つになれてないと思う？』

南『そんなの、知らないね。』

高林『突然どうした？』

天宮『言っておくがこのままじゃ、負けるぞ。絶対に。』

『ボール!!』

長岡『オラ!どうした!?!かかってこいよ!!ボッコボコにしてやるからよ!!』

西口(これでノーツーか…このままフォアボールなんかにしちまったらノーアウト満塁で4番の下村健太を迎えることになる…)

小宮(痛いなんていつてられない…何がなんでもこのバッターを抑えなければいけない!!)

南『つまりキャプテンは何が言いたいの?そんなネガティブ発言しちゃってさ。つか、バッターは怒った長岡だぜ?負けるどころかサ

ヨナラの可能性のが十分高いじゃん。』

天宮『そこを言ってるんだ。今この事に気づいてるのは俺と健太くらいだな。』

南『??.』

江澤『何が言いたいの...?』

『ボール!!スリー!!..』

小宮『ちくしょう...ストライクがはいんねえ...。こんなんじゃ...。』

長岡『びびってんじゃねえぞ!!もつと勝負してこいよ!!..』

『長岡!!落ち着け!!..』

長岡『うるせえ...。』

ビュッ!!

『カキン!!..!!..』

南『デカイ!!..!!..』

『ファール!!』

成田『おっしーい!!』

長岡『殺り損ねちまったぜ。まあ次で終わりだ。』

西口『タイムお願いします。』

『タイム!!』

西口『あれ。試してみるか。』

小宮『僕もちょうど考えてたところ。』

西口『もうあのときの怪我は完治したか?』

小宮『うん。一週間前に投球オツケーもらったときに。』

西口『お前の右腕はもう大きな故障しすぎた。また怪我をしたらどうなるかわかってるか?』

小宮『当然承知だよ。』

西口『俺のお陰でここまでこれたことを忘れんなよ。』

小宮『わかってる。』

明日翔『哲都!!頑張れえー!!!!!!』

小宮『まったくあいつは…。恥ずかしいなあ…。っ。』

西口『…。……。試合中アイツを黙らせる。うるさくて集中できやしない。』

小宮『どうして？突然そんなに顔強張らせちゃって…。』

西口『お前さえ居なけりゃ…。今ごろ俺は…。』

西口が小声で言った。

小宮には聞こえなかった。

小宮『まあ僕の彼女の話はおいとして、このバッターを仕留めなくちゃね。』

西口（こいつ…。あとでぶっ殺してやる。）

西口はなぜか小宮にキレている。

小宮『このフォームで投げるのは久々だなあ。』

西口『…。とりあえず、怪我だけには気を付ける。それと今カウントはワンスリーだ。次のボールはお前の四段ドロップで追い込む。うちの守備力じゃ打たせてたらこの緊迫した場面なら必ずと言っていいほどボロが出る。全部三振のつもりで行け。』

小宮『足も痛いしね。早く終わらせちゃおう。』

西口『やっぱりな。さっきのデッドボールだろ。投げ方ですぐわかった。』

小宮『テヘヘ…。追い込んでからのあの戦法でいくよ。』

西口『二つとも実践使用は初だな。』

長岡『長いな。早くしてほしいな。』

小宮『ちゃんと捕ってよね。特にあの戦法は。』

西口『おう。ただし失投はジエンドだ。それだけは頭に入れておけ。お前の投球結果で夏の長さが変わるからな。』

小宮『あいよ。』

『プレイ!!』

小宮（僕なりの研究結果だと、四段ドロップを2球続けるとき、2球目の方は必ずと言っていいほどキレ、変化量が落ちる。）

小宮『だからこの球は…』

小宮が投げる。

ビュッ!!

長岡『これがアイツらのいつていたボール……!!!!』

(キユキユツ!!)

長岡『見える!!見える!!』

西口『切れが悪い!!』

(カキン!)

『ファール!!!!』

長岡『なんだ。思ってたより当たるじゃん。みんなこんなボールも当てられなかったのか。』

小宮『今のくらい君なら当てるってわかってたよ。』

西口(今の四段ドロップは明らかに精度が低かった。もうバテてきたのか……?)

小宮『大丈夫。スタミナには自信あるし。』

小宮(実は今のはわざと加減して投げたんだ。)

小宮『このボールの精度を維持するためにね。』

西口(何はともあれ追い込んだ。この戦法で三振だ。)

小宮がセットポジションから投げる。

(ガッ!!)

地に足をしっかりとつく。

長岡『!?!?!』

大場『なにっ!?!』

健太『マジかよ!』

副島『サイド…スロー!?!』

長岡『突然サイドに変えたって俺を抑えられるかよ!!なめんじやねえ!!!』

西口(変わったのは腕の位置だけじゃない。サイドから四段ドロップの握りで投げることによって…)

小宮『くらえ!ライジングスライダー!!!!!!』

ビュッ!!!!!!

ゴウッ!!

長岡『高い!?!』

カクッ!!!

長岡『ストライクになる!!!!!!』

長岡はとっさにカットしようとした。
しかし、

ギュルギュルガッ!!!

西口(なんじゃこりやあ!?!)

(スカッ!!)

長岡のバットが空を切る。

しかし、

(バスッ！)

キャッチャーの西口があまりの変化量にボールを捕球することができなかった。

『長岡！！走れ！！』

長岡は嫌々一塁へ駆け抜けた。

記録は振り逃げ。これで無死満塁。

西口『わりい…。まさかあんなボールに進化するなんて思ってたかったからさ。』

小宮『でしょ！？しかも四段ドロップと違ってコントロールもつきやすいし！でも肘と肩の両方にすごい負担がかかるんだ。』

西口『一瞬浮き上がったと思ったらいきなり莫大なスライダーの進化…。こんな球プロでも余裕で通用する！！』

小宮『まあサイドからじゃないと投げられないんだけどね…。』

西口『でもこのボールは使える。まだサイドで行けるか？』

小宮『ここでライジングスライダーを使いすぎると、10日位はピッチャー出来なくなるよ？』

西口『後のことなんか考えてられつかよ！』

小宮『だね！！今しかできないことを今やらなきゃ損だもんね！』

西口『ノーアウト満塁。こっちが一点勝ってるからと言って楽な場面じゃない。長引けばお前の体力も尽きる。思いきれよ！！』

小宮『うん！！』

『4番、シヨート、下村健太くん。』

小宮『行くよ！！！！』

西口『こい！！』

大場『アイツら…。』

小宮の新球、ライジングスライダーが名林への最後の抵抗となるか
！？

No.28：新魔球の更なる進化（後書き）

今日は家の鍵を忘れて家に入れなくてその暇潰しのために更新しました♪

小宮くんはもはやプロレベルのピッチャーと化しましたね。
まあいくら最強とつたわれても弱点はありますしね。
それに小宮は昔から怪我の多い選手だったので…

感想待ってます？

No.29:意地の再登板(前書き)

やっとテスト終わりました♪

期末だけあって全部で13教科…
ほとんど死にましたね？

これからよろしく願いしますm(´・`)
m

No.29：意地の再登板

??『ノーアウト満塁で4番の下村兄か。あの新星サウスポー…またあの球でいくのか…?』

小宮『こんなピンチ…乗り越えられなきゃ勝ち進む権利はねえ…』

西口『こい!!小宮!!』

小宮がサイドから投げる。

ビュッ!!

ゴウッ!!

健太『高い!ボールだ!!』

ギュギュッ!!

(スパーン!!)

『ストライク!!ワン!!』

健太『くそ…。またあのボールか…。今のボール…サイドスローに変えた途端に投げ始めた…。恐らくサイド独特の軌道だろう。この

ボールは早々当たるもんじゃねえ…」

ビュッ!!

ギュギュッ!!

健太「く…。」

(ブン!)

(パン!)

健太は豪快に空振りした。

「ストライク!! ツー!!」

西口(ふーっ。捕るのも相当気合いいれなきゃパスボールで同点だ…。こりゃこっちも大変だな。)

健太(3球勝負か…? 次あのボールが来ても確実に対応することはできない…。ごめんな。みんな。)

「打てるぞ! まだまだ! ここで一本頼む!」

ベンチから大声が聞こえた。

天宮「お前が決める! 絶対に打て!」

健太『天宮…。』

舞『健太！！打て！！諦めちゃだめ！』

健太『舞…。』

ビュッ！！

小宮『うぐっ！！足が！！』

ギュキユッ！！

西口（まずい！！）

小宮『曲がない！？失投だ！』

健太『絶対に打つ！！』

（カキン！！）

『ヤバイ!!』

大場『小宮!!前だ!!』

小宮は痛めている左足首をかばっていたので打球に反応するのが遅れた。

つまり言うつ、ボールに集中していなかった。

小宮『まえ!?!』

ビュン!!

小宮『うわっ!』

(ガッッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!)

痛烈なピッチャー返しが小宮を襲った。

打球は小宮に当たりちょうどキャッチャーの西口のところに来て西

口はそのままホームベースを踏んでワンナウト。一塁は間に合わなかった。

これで一死満塁。

『小宮！！大丈夫か！？』

『立てるか！？』

『どこ当たった！？』

小宮『イテテ…。さっき食らったところです…。』

大場『さっきデッドボールで当たったところか！？』

小宮『はい…。痛くて動けないっす…。』

副島『ちよつと足見せてみる。』

…

…

…

大場『うお。』

松坂『これって…やべーんじゃない？』

島谷倫『すっげー腫れてんな…。』

大場『これじゃ交代しかないな…。あとベンチに残ってるのは背番号4の島谷涼太（島谷倫暁の弟）と背番号10の鬼頭…。』

西口『前からずっと思ってたんすけど、背番号10って誰ですか？背番号9までは前からいた人たち、背番号11はオレ、背番号12は小宮…。』

大場『…。』

副島『背番号10はオレと同じE組の鬼頭博行って言うんだよ。ま、アイツは1年の頃から一回も来たことない筋金入りの幽霊部員だけどね。』

大場『…。…。』

西口『へー。じゃあ意味ないですね。』

小宮『みんな話進めてるけど、オレはまだ下がるなんて一言も…。』
大場『うるさい。お前は引っ込んでろ。この試合勝って次以降の試合に出るためにもここは一旦引け。そっちのが賢明だ。』
小宮『でもピッチャーは！？！？』

大場『オレがやる。今度こそ抑えてやる。』

小宮『でも…。』

大場『オレはこのチームのエースだ。セカンドピッチャーのお前に頼りきってちゃだめだろ。』

副島『小宮。お前にはもっともっと戦ってもらわなきゃいけない。』

そのためにもここはエースに任せてみよう。』

小宮『わかりました。だけどその代わり約束をしてください。』

大場『なんだ？』

小宮『この試合、絶対に勝ってください。』

小宮は泣いている。

大場『おう!!』

大場（アイツがなくなんてな。こりゃ勝つしかないか。当然だけど。

）

小宮はだっこされてベンチに引いた。

守備位置の変更 ← ←

小宮 ↓ 島谷涼：1 ↓ 4

大場：3 ↓ 1

副島：4 ↓ 3

大場『小宮が抜けても、オレは揺らがねえ。絶対に勝つ。』

『5番、ファースト、高林さんに代わりまして、代打、たなへ棚辺くん。』

??『翔真…。勝ってくれ。この試合に勝てば…。俺は…。』

このとき、邦南高校側のスタンドで密かに邦南の応援をしている男がいた。

一度ノックアウトされたエースが再びマウンドに上がる。

No.30:S.6(エス・シックス)の2人(前書き)

今回から新設定登場します？

その名も…

S.6(エス・シックス)

Sは^{スプリーム}Supremeです。。。

意味は…至高の6人組

です？

これからも是非楽しみにしてください？

あとこの試合終わったら急展開になります？

あらかじめご了承下さいm)・(m

No.30:S・6(エス・シックス)の2人

??『一死満塁…。アウト一つ取ったからといって油断できる場面じゃない。しかもバッターは代打…。翔真、どう攻める…。?お前は一度K・Oされても立ち直れると信じたいが…。ピッチャーがリズムを取り戻すのはそう簡単じゃないぞ…。』

大場『来てるか…。』

西口『誰がですか?』

大場『享神だ。』

西口『え!?!』

大場『ホラな。あそこだ。見る限りマネージャー1人を含めて5人しか来てないけどな。』

西口『アイツら…。』

大場『多分こっちの山の優勝候補の名林を偵察しに来たんだろうがな。この試合展開にさぞかしビックリしてることだろう。』

西口『あれって…。』

大場『桜沢だな。あと1年生エースの堂金どうがねも来てるな。』

西口『堂金…。アイツか…。去年中学硬式野球大会で全試合完封(地方大会から数えて10試合連続。尚中学硬式ルールの三連投禁止等のルールあり。)それに全国大会でも1回戦と準決勝と決勝で3

度のノーヒットノーラン（うち2回完全試合）達成してるしな。相当頭よかったのに名林に享神に進学したのか。」

大場『お前らが決勝で負けた時のピッチャーもアイツだったんだろっ？』

西口『はい。ただしアイツは…本気では投げてませんでした…。確実に…。』

大場『なんでわかる？』

西口『アイツ…あの試合…いや、あの大会で一度も決め球の高速シンカー、縦カッター（縦のカットボール）を使わなかったんです。』

その頃、享神の観覧者たちは…

桜沢『なんだよ。名林もこんな公立高校に負けちゃってよ。これじや俺たちの甲子園出場もフリーパスだな。』

余語『正直名林とは試合になると思っただけ残念だね。』

桜沢『名林と？そんなん20点差つけて勝てるぜ。名林なんか俺の敵じゃねえ。』

余語『じゃあ誰が敵なの？』

桜沢『全国にオレと渡り合えるピッチャーなんて二人しかいねえよ。しかもそのうちの1人が同じチームだしな。な？堂金？』

堂金『知りませんよ。そんなの。ただ、高校野球のレベルの低さに驚いているのは事実ですけど。』

余語『言うねえ。じゃあさっきまで投げてた途中からサイドスローに替えたやつに関しては？』

堂金『アイツとは中学ん時一回だけやったことあります。が…』

余語『どうした？』

堂金『なにも感じなかったです。普通の野球やってる人間ってだけで、特別良い球だって訳でもなかったです。』

神郷^{かとう}『ふわあ…。よく寝た。試合終わった？』

藤野（ふじの：マネージャー）

『まだよ。しかも1点差で邦南がリードしてる。…って！』

（ぐーぐー…。）

神郷はまた寝てしまった。

藤野『…はあ…。』

神郷『サヨナラ…ホームラン…。』

神郷は寝言を言っている。

そのとき…

『よお！サク！（桜沢のあだ名）』

桜沢『お！久しぶりだな！水仙！』

水仙^{すいせん} 知哉^{とみや}

『こんなところで名林の見学？負けてるみたいだけど。』

藤野『え！？水仙ってあの！？』

堂金『間違いないですね。日本中で騒がれてるS・6（Supreme 6：スプリムシックス：至高の6人組）の1人、静岡の^{せい}西高校の1番ショートの人ですね。今春のセンバツでは準々決勝で姿を消しましたが、甲子園3試合合計で15打数11安打、打率・733、11盗塁を記録した俊足の持ち主です。』

神郷『ふわあ…。よく寝た。ところでなんでS・6（エスシックス）って呼ばれてんの？』

余語（コイツ…起きてたのか。笑）

藤野『今S・6って呼ばれてる人は中学時代元々同じ中学でね。みんな軟式野球部に入ってたの。』

神郷『へーっ。強かったの?』

藤野『そりやそうでしょ!!そのときの中学校は大阪の南阪中学って言うんだけど聞いたこと無い?』

神郷『知らないなあ。』

藤野『もう!!なんで知らないのよ!!あんたのそのでっかな頭には何がはいってんの!?超有名中学でしょ!!』

神郷『そうなんだあ。よくわかんないや。』

藤野『……。……。まあいいわ。話は戻すけど、南阪中学は他を寄せ付けない強さで、全国大会で圧倒的な強さで勝ち進んでいったわ。コールドゲームの無い決勝戦以外では全試合3回コールド。(3回10点差、5回7点差)』

神郷『すごいねえ。』

藤野『そのときの4番が桜沢さん。あの水仙って人が1番セカンドだった人。』

神郷『S・6って言うくらいなんだから他にもあと4人いるの?』

藤野『そうよ。彼らは全国各地の名門高校に散らばって進学していったから甲子園にいけば何人かとは対戦することになるわ。』

神郷『なんで6人なの?野球は9人ポジションにつくんだよ?残り

の三人は？』

藤野『その三人のうちの二人はそこまで高レベルじゃないから騒がれていないだけ。残りの1人は高校野球から手を引いたらしいわ。確か…鬼頭っていつたっけ？よく覚えてないわ。その鬼頭っていう人は実力ならS・6に全くひけをとらないくらいの実力があつたらしいけど…なんで野球やめちゃったんだろう。その鬼頭っていう人を併せて昔はS・7（エス・セブン）って言われてた。大体S・6の説明はこんなところよ。わかった？』

（ぐーぐー…。）

神郷『サヨナラ…ボーク…』

藤野『はあ…。……。ホントよく寝るわねえ。』

水仙『あはは！！あつ！そろそろ静岡に帰らねえと行けねえ時間だ！！わりのいな！じゃあそろそろ帰るわ！じゃあまた甲子園でな！』
桜沢『じゃあね〜！！水仙！！また会おう！』

（バン！）

『ストライク！！バッターアウト！！』

大場『じゃあ！！』

余語『このピッチャー、さっきよりも球が違っね。』

堂金『まあどっちでも良いですよ。どっちが勝とうと甲子園に行くのは俺らですから。邪魔をする奴は俺が蹴散らしますよ。軽ーくね。』

余語『たいした自信だな。』

堂金『そりゃ。チビの頃から野球やってきて今まで1度も敗戦投手になったこと無いですから。』

『6番、レフト、天宮くん。』

大場『俺がみんなを救う。絶対に打たせねえ！！』

??『翔真…。その意気だ。』

南『なあみんな、オレ、分かったかしんねえ。』

江澤『なにが?』

南『さつき天宮が言ってたことの意味。』

江澤『だよな。あのエースにあんな顔されちゃ嫌でも気づかされる。』

話は戻すけど、南阪中学は他を寄せ付けない強さで、全国大会で圧倒的な強さで勝ち進んでいったわ。コールドゲームの無い決勝戦以外では全試合3回コールド。(3回10点差、5回7点差)』

神郷『すごいねえ。』

藤野『そのときの4番が桜沢さん。あの水仙って人が1番セカンドだった人。』

神郷『S・6って言うくらいなんだから他にもあと4人いるの?』

藤野『そうよ。彼らは全国各地の名門高校に散らばって進学していったから甲子園にいけば何人かとは対戦することになるわ。』

神郷『なんで6人なの?野球は9人ポジションにつくんだよ?残りの三人は?』

藤野『その三人のうちの二人はそこまで高レベルじゃないから騒がれていないだけ。残りの1人は高校野球から手を引いたらしいわ。確か…鬼頭っていったっけ?よく覚えてないわ。その鬼頭っていう人は実力ならS・6に全くひけをとらないくらいの実力があつたらしいけど…なんで野球やめちゃったんだろう。その鬼頭っていう人

を併せて昔はS・7（エス・セブン）って言われてた。大体S・6の説明はこんなところよ。わかった？』

（ぐーぐー…。）

神郷『サヨナラ…ボーク…。』

藤野『はあ…。……。ホントよく寝るわねえ。』

水仙『あはは！！あつ！そろそろ静岡に帰らねえと行けねえ時間だ！！わりいな！じゃあそろそろ帰るわ！じゃあまた甲子園でな！』
桜沢『じゃあね〜！！水仙！！また会おう！』

（バン！）

『ストライク！！バッターアウト！！』

大場『しゃあ！！』

余語『このピッチャー、さっきよりも球が違うね。』

堂金『まあどつちでも良いですよ。どつちが勝とうと甲子園に行くのは俺らですから。邪魔をする奴は俺が蹴散らしますよ。軽ーくね。』

余語『たいした自信だな。』

堂金『そりゃ。チビの頃から野球やってきて今まで1度も敗戦投手になったこと無いですから。』

『6番、レフト、天宮くん。』

大場『俺がみんなを救う。絶対に打たせねえ!!』

??『翔真…。その意気だ。』

南『なあみんな、オレ、分かったかもしんねえ。』

江澤『なにが?』

南『さっき天宮が言ってたことの意味。』

江澤『だよな。あのエースにあんな顔されちゃ嫌でも気づかされる。』

No.30:S.6(エス・シックス)の2人(後書き)

S.6は今のところ

享神の桜沢と

晟西の水仙です？

あと邦南の幽霊部員の鬼頭は実は…

残りの4人も話が進むにつれて登場していくので楽しみにしていてください？

感想とか貰えたら嬉しいです??

No.31:勝負師としての道標(前書き)

前回の話の最後らへんはすみませんでしたm(´・`・)m

原因は自分でも全くわかりません…

投稿したあとに気づきました？

申し訳ございません…>(_ _)<

No.31: 勝負師としての道標

『6番、レフト、天宮くん。』

天宮『俺がお前らを勝利へと導いてやる!』

南『…。頼んだぞ。』

江澤『俺らに足りなかったもの…。それはきっと…。』

南『頼れるのは己の力のみって感じかな。』

高林『そうだよな。』

江澤『俺ら、頼ってる意識はなくても、みんな長岡と健太に頼ってたんだよ。』

南『自分で蹴りをつけるって気持ち…。確かに欠けてたかな。』

高林『キャプテンはずっと感じてたのかな。』

(ブン!)

(スパーン!!)

『ストライク!! ツー!!』

天宮『何だコイツ…。序盤よりも球威が格段にましてやがる…。』

大場『あんたらとの試合、楽しかったよ。だけど勝つのは俺らだ。次で決めるよ。』

翔真はにっこりとした。

天宮『ふっ。よくこの場面でそんな笑顔見せられる余裕があるよね。』

西口『あなたたちのお陰ですよ。あなたたち野球名門校と互角にやりあえたことで試合中に僕らは何段もステップアップできた。感謝しますよ。』

天宮『感謝されたってちっとも嬉しくねえな。ははは…。』

大場『これは…。』

（ピカーッ！！）

副島『雨が…！！』

島谷涼『止んだ…！！』

大場『眩しいな。太陽は。』

天宮『天もそろそろ勝者を決めようってか。』

大場『蹴散らす!!俺の力で!!』

天宮『オラ!こい!!』

大場が振りかぶる。

健太『勝負だな。』

大場『勝って次に進む権利があんのは…』

ガッ!!!!!!!!!!

大場『俺たちだあっ!!』

ビュッ!!

(ズバーン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!)

『ストライク!!バッターアウト!!ゲームセット!!』

観客『わあああっ!!!!!!!!!!』

邦南	—	0	0	0	—	1	3
名林	—	7	0	0	0	2	0
		0	2	0	0		
		0	3	0	—		

希に見る壮絶な打撃戦を無名の邦南高校が愛知の名門、愛農大名林を下した。

これで邦南高校史上初の四回戦進出。

No.31:勝負師としての道標(後書き)

次回からは試合後です？

やっと長かった名林戦が終わりました。。

これからもよろしく願いますm(´・`・)m

No.32:託された力

試合後…

更衣室から外に出ると…

『来たぞ来たぞ!!!』

『お前らつえーな!!!』

『よく名林に勝ったな!』

邦南対名林戦を見ていた観客たちが邦南をたたえる。

そのとき…

『おい!大場!!!』

遠くから声が聞こえた。

大場『お前は…。』

健太『よっ。』

天宮『完敗だよ。』

大場『どうしたんすか？』

天宮『これ。お前らに渡したくてよ。』

そう言つて天宮が取り出したのは…

健太『千羽鶴だ。俺らの夢だった全国制覇はお前らに負けて夢になつちまつたけどさ。』

天宮『これで少しでも思いを託したくてよ。お前らに。』

健太『ホントはこんなことするようなキャラじゃねえんだけどな。なんでかな、たぶんお前らと試合やって感化されちまつたんかな。』

大場『お前ら…。』

天宮『貰つてくれる？』

大場『もちろんだぜ。お前らの気持ち…俺らが引き継いだ。絶対勝ち進んでやるよ。』

天宮『ありがとう。はい。』

名林の千羽鶴が邦南へ渡った。

天宮『じゃあな。お前らなら、甲子園、狙えるぞ。だってあんないいチームなんだからな。』

そう言つて天宮は戻つていった。

『おい！健太！！行くぞ！』

健太『ちょっと先行つて。オレはまだコイツに話したいことがある。』

『早くしろよ！』

大場『ど、どうしたんですか？話したいことつて…？』

健太『オレのウィニングショットのフオークボール…お前もたしか決め球だったな？』

大場『あんたのには到底かなわねえけどな。』

健太『いや。お前ならオレのフオークを完全にものにできるはずだ。ちよつと今から付き合つてくれねえか？』

大場『いいっすけど…。どうせこのあと柔軟とかなんで。』

健太『俺からの気持ちだ。行くぞ。』

No.33・目撃者

その日の夕方…

小宮宅前…

西口『なあ小宮。赤崎とどうなんだよ？』

小宮『どうって…。特に進展はないよ。』

西口『正直に言えよ。』

（ガッ！）

西口が小宮の胸ぐらをつかんだ。

小宮絵梨『お…お兄ちゃん…。またあの人に…。』

小宮の妹の絵梨が家の影から二人を見ている。

小宮『な…なんなんだよ！』

西口『おめえがいなけりや俺とアイツは今ごろなあ…。！』

（ガッツ！！）

小宮『いてて…。いたいなんなんだよ…。』

絵梨『お兄ちゃん！』

西口『!!!!!!』

小宮『??????』

絵梨『お兄ちゃん!』

小宮『お前…見たのか?』

絵梨『…』

小宮『見たのか?どうなんだ?』

絵梨『…』

小宮『見たのか!!!!!!?!!?』

絵梨『見た。お兄ちゃんがその人に殴られてるの。もう何回も見た。ねえ。何があつたの…?』

小宮『…』

西口『行くぞ。小宮。』

小宮『う…うん。』

(スタスタ…。)

小宮と西口は学校の方へ歩いていった。

『お兄ちゃん!お兄ちゃん!』

小宮（ごめんな…。絵梨。兄貴はこの人がいる限り、従うしかないんだ。）

（ガチャガチャー！！）
（バタンツ！）

その日、小宮はまた部室に閉じ込められた。

夜10時…

絵梨『お兄ちゃん…。やっぱりおかしい！！探さなきゃ！！』

絵梨は邦南高校に向かった。

学校の回りは柵で入ることができないが、一ヶ所だけその柵が破れているところがある。普通の人なら入れる大きさではないが、中学生の女の子で、比較的からだの小さい絵梨は入れてしまう。探検好きの絵梨はこのルートを知っていた。

そして誰もいない暗い学校の野球部の部室の前にたどり着いた。
部室の鍵はしまっていたが、絵梨は探検セットの中にある細い鉄の
棒を取り出した。

（ガチャガチャ！！ガッチャ！！）

鍵が開いた。

『お兄ちゃん！』

絵梨は小さな部室のなかで大声で叫ぶ。

『お兄ちゃん！』

しかし、返事がない。

慌てて部室の電気をつける。

『お…お兄ちゃん？』

部屋には誰もいなかった。

絵梨は不思議に思いつつも、家に帰っていった。

N o . 3 4 : 来 る べ き 時 (前 書 き)

今日も野球の話はあんま出てこないです…

No.34:来るべき時

絵梨が家に帰ると小宮はすでに帰っていた。

絵梨は兄である哲都にたくさん言いたいことがあった。なぜなら心配だったから。

お母さんもお父さんもいない。そんな中でも自分を毎日育ててくれていた。

だから兄の存在は偉大だった。

しかし絵梨は帰宅しても兄と話さなかった。

自分では兄の気持ちを感じとるだけで恐らくこの問題は解決しないだろうと思った。

自分では…

次の日…地元の新聞紙…

『邦南、名林との雨中の激戦制し4回戦へ!!』

邦南は地元の名門、名林を破ったことによって有名になった。
その勢いのまま4回戦の志同館しどうかん高校を破り5回戦進出。これでベスト16。

小宮は怪我が明らかに悪化しており試合にはでなかったが、8 - 0
の7回コールドで勝利した。

その日夕方、場所はまた野球部の部室。

絵梨『また入ってった…。お兄ちゃん…。』

そのとき…

『お前は下がってる。俺がかたをつける。』

絵梨の後ろから声が聞こえた。

その声の主は…

絵梨『翔真くん!!』

大場『兄貴にお前の存在がバレたらだめだろう。さっさとここから離れる。お前も思うようにこれはかなり大きな問題だ。上級生の俺が行くしかない。この事を知ってるのも当事者のアイツらと俺とお前だ。事がでかくなる前に片付けなけりゃいけない。』

絵梨は嬉しかった。自分1人ではどうにもならないことは分かっていた。

「お願いします。お兄ちゃんを助けてください…。」

大場「おう。じゃあ俺、行ってくるわ。」

そう言って大場は野球部の部室へと向かった。

（ガチャっ！！）

「観念しやがれえつ!!!!!!!!!!!!!!」

大場の怒号と化した声がグラウンド中に響きわたった。

No.34:来るべき時(後書き)

翔真と絵梨が知り合いというのは昔からよく遊んでいたなかだから
です？

次回で遂に事件発覚する予定です！！

No.35:憎しみの矛先(前書き)

サブタイトルがなんとも思い付かなくて…

No.35: 憎しみの矛先

『観念しろ。お前の行動はすべて把握している。』

小宮『うぐ……。翔真……くん……。』

大場『小宮……おとなしく座ってる。お前らの関係は大体把握しているぞ。一応聞く。何があった？』

西口『別に。ただの気晴らしですよ。』

小宮『……。』

西口『聞きたいことがそれだけだったら俺帰るんで。気分わりいし。』

そう言っつて西口は大場を横切つて部室を出ようとした。

(ガシッ! !)

筋肉質の大場が西口の太い腕をつかんだ。

西口『なんすか？離してくださいよ。先輩。』

(グイッ!!バシンッ!!)

大場が西口をそのままなぎ倒した。

西口『…!!ってえな!!なにしゃがんだ!!ああ!?!』

大場『正直に言え。なにが原因だ?まあ大体予想はつくがな。』

小宮『…。』

西口『あんたに予想なんかつくかよ。まあいい。言ってみなよ。』

大場『ホントにいいのか?』

西口『ああ。イイツスよ。俺の気持ちができるならね。』

大場『赤崎明日翔。』

西口『あ?』

小宮『明日翔がどうしたんですか…?』

大場『おまえ…自分で気づいてねえのか?俺でもしってんのに。』

西口『黙れ!!!!!!!!!!!!!!その女の名を出すな!!!!!!!!!!!!!!』

小宮『!?!』

大場『黙らねえよ。なにがあつたんだ？』

小宮『え…？西口くんが俺のことをいじめてたのは明日翔が関係してるの？』

西口『おまえ。知ってていつてるんだよな？殺すぞ。マジで。』

大場『小宮…。理由…わからないのか…？』

小宮『当たり前です！いつの日からか西口くんが俺のことを…。』

西口『誰がおまえのことをいじめるかよ。』

大場『とぼけるなよ？俺は知ってんだぞ。おい小宮、言ってやれ。』

小宮『…。』

西口が小宮を凝視している。

大場『小宮、どうなんだ。答えろよ。』

西口『…。』

小宮『…。…。なにもされてないです…。西口くんは大切なともだち…。』

『違うよお兄ちゃん！！！こんな人のいいなりになっちゃダメだよ！！！！！！！！！』

西口『!?!』

大場『まったく。結局出てきちゃうのかよ。』

小宮『絵梨!!なんでここにいるんだ!?!』

絵梨『お兄ちゃん!!もうやめよ!!ここでこの人と蹴りをつけようよ!!!!!!』

西口『おまえ…。もしかして小宮の妹か…?いつの間に退院してたんだ?』

絵梨『なんでうちのこと…。』

西口『この俺を忘れたか?まあしょうがねえよな。もう8年たったもんな。あの頃から。』

絵梨『…!まさか…!!!』

西口『昔お前の病気が発覚する前、毎日のように遊んでいた。あの頃はまだ俺も8歳だったから大分顔も変わっちまったけどな。』

絵梨『タク…?』

西口『そうだ。いつ治ったんだ?心臓病。』

絵梨『幼稚園の年長組から入院して中学1年の最初に退院したの。』

小宮『？』

西口『お前は…赤崎の裏を知らねえ…。アイツは俺らの人生もてあそんでるだけなんだ…』

小宮『…明日翔が？』

大場『やっぱりあの女が絡んでたか。』
絵梨『なにが言いたいの…？』

西口『…。お前らにだけ真実を話してやる。ただし小宮…これは聞いておいた方がいい情報だが、彼氏のお前は相当のショックをうけるぞ。それでもいいのか？』

小宮『…。…。うん…。』

小宮は数秒間考えたが、首を縦に振った。好奇心が小宮の決断を下した。

西口『俺は小宮が赤崎と付き合う前、アイツと付き合ってた。しかし赤崎は…』

『それ以上喋らないで!!』

美声が聞こえた。

その場に立っていたのは…

大場『!!!!!!!!!!』

西口『お前は…』

小宮『明日翔…』

赤崎『拓磨。あんた、言わなかったっけ？あたしたちの過去を他人にばらすなって。』

普段は美人なはずの赤崎の顔は相当苛立っていて崩壊しかけている。

西口『…。言った。』

赤崎『まあいいわ。アンタじゃいずれ言うつて分かってたから。』

小宮『明日翔？西口くんとどういう関係なの？』

赤崎『別に今はたいした関係じゃないわよ。ただ、アタシはこいつの元力し。まあ別に愛してなかったし、今の彼氏も正直なところ遊んでただけだし。』

小宮『は…？』

絵梨『誰なの？この人？』

大場『おまえの兄貴の彼女さんだ。』

赤崎『はあ。物分かりの遅いやつね。つまりアタシは別にあんたなんか好きでもなんでもなかったってことよ！』

小宮『え…。』

N o . 3 5 : 憎しみの矛先（後書き）

感想等もらえると嬉しいです？

No. 36: 赤崎明日翔という女(前書き)

一応…

R R… 右投げ右打ち

R L… 右投げ左打ち

R B… 右投げ両打ち

L R… 左投げ右打ち

L L… 左投げ左打ち

L B… 左投げ両打ち

No. 36：赤崎明日翔という女

赤崎『あなたを愛したことなんて一度もなかった。それが真実よ。』

小宮『明日翔？突然なに言ってるの？』

赤崎『だから…アタシはあんたなんか好きになつた覚えは無いって言ってるのよ！』

小宮『…！？嘘だ。』

赤崎『嘘なんかじゃない。これがあなたの彼女の真実なのよ。』

西口『俺もこいつと付き合ってた頃…突然フラれた。そのとき理由はよくわからなかった。だけどそのあと気付いた。こいつが俺を振った理由は、小宮のことが好きだから。ってね。だからこそ小宮が憎かった。赤崎は好きだったから到底憎めなかった。小宮が俺らが付き合ってたことを知らなかったなんて思わなかった。知ってた上でオツケーしたのかと思ってた。けど違った。この女の真実を知ったのもちよつと前さ。ごめんな小宮。殴ったのも、全部勘違いから始まった。悪いのは全部赤崎…。さっき小宮が理由を知らないと分かったとき…素直にそう思えた。謝っても許されない事をしたのは分かってる。だからこそ小宮…いや、哲都にはこれからの人生…思いつきり生きてほしいと思う。それが今の俺の願いだ。だからこの野球部…いや、学校は辞める。大会期間中はメンバー変更ができな

いから休部するだけだけど…。今までありがとう。そしてすみませんでした。全て僕の勘違い。それがわかりました。さようなら。』

そう言つて西口は去つていった。
その目は微かにだが光っていた。

赤崎『アンタとは別れるしかないようね。じゃあね。おバカさん。
じゃあアタシもあの子を見習つてこの野球部からは手を引くわ。じゃあね。』

赤崎も不気味な笑顔のまま去つていった。

小宮『う、う…。』

小宮は泣いている。

大場『小宮。歩けるか？』

小宮『う…。』

大場『よし。じゃあ俺の背中に乗れ。良かったじゃないか。いずれわかることが、今わかつてさ。お前は憎いのか？あの二人のこと。』

小宮『…。憎いです…。』

二人と絵梨は帰っていった。

次の日は5回戦、大峰明館高校^{だいほうめいかん}。今年で創立4年目を迎えた新設校だ。

ここまで、くじ運が非常によく普通の公立高校と接戦の試合をものにしてきた高校だ。正直なところあまり強いとは言えない。

しかしこちらは4番捕手の西口が抜けた。まだどう転ぶかは分からない。

そして次の日…

『おい小宮！どうしたんだ！？その松葉杖…。』

『ははは…。3回戦で怪我したところちよつとドジっちゃって…。』

ちなみに松葉杖になったのは西口の暴行のせいである。

というか、いい遅れたが、小宮が怪我のため離脱しました。

『はあああああ！?!?!?!?』

先攻・大峰明館高校

1:P	:谷	:LL
2:1B	:園田	:LL
3:RF	:宮池	:RL
4:3B	:高橋	:RR
5:SS	:太田	:RL
6:C	:土佐	:RR
7:2B	:寛	:RR
8:LF	:仲沢	:LL

9 : C F : 佐々木 : R L

後攻・邦南高校

1 : C : 副島 : R L

2 : C F : 慶野 : R L

3 : P : 大場 : L L

4 : 3 B : 松坂 : R R

5 : S S : 島谷倫 : R R

6 : R F : 氷室 : R R

7 : L F : 木村 : R R

8 : 1 B : 藤武 : R R

9 : 2 B : 島谷涼 : R R

『プレイボール!!!!!!!!!!!!!!』

No.37：必至の投手戦

副島『相手のピッチャー、背番号20か。どうやら主戦格らしいね。』

大場『ああ。アイツは去年まではエースだった谷だ。それまではオーバースローだったのに投球練習を見る限りサイドスローにしたみたいだな。』

松坂『たのむぜ。新一番。』

松坂が副島の肩に手をかける。

副島『そーいえば小宮と西口抜きで戦うのも初めてなんだな。』

大場『だな。まああいつらが来る前に戻ったって考えればやりやすいじゃん。とにかく勝つぞ。まずは表を抑えていこう！』

『1回の表、大峰明館高校の攻撃は、1番、ピッチャー、谷くん。』

『さあ始まりました！！創立4年目で初の5回戦進出の大峰明館高校 対 邦南高校の注目対決。邦南高校も創立以来初の5回戦進出と勢いに乗っています！！』

大会も5回戦ということもあって遂に実況がついている。テレビでも放映されているようだ。

谷『さあ、お手並み拝見と行きますか。この前までの試合で4番打った西口くんは欠席か…。対戦を唯一楽しみにしてただけに残念だな。』

キャッチャー
副島『そうですか。でも今のウチを侮らない方がいいですよ。今までの試合でみんな自信をつけてきましたから。』

『さあピッチャーの大場、振りかぶって第1球投げる!!』

(スパン!!)

『ストライク!!!』

谷『いいボールだね。アウトローいっぱい。』

副島『黙ってもらっていいですか?真剣勝負に私語は必要ない。』

谷『よくいうね。じゃあバットで語るとするか。』

谷が独特のオーブンスタンスで構える。

2球目…

ビュッ!!

谷(さっきと同じ軌道!今度は打たせてもらっ!!)

(ブン!ズバーン!!!!!!)

『ストライク!! ツー!!』

谷（空振った!?! タイミングは完璧だったはず…。）

副島（ふっ。今日の翔真のボールを打つのは相当厳しいぞ。なんて
って翔真は…。）

ビュッ!!

（ズバーンっ!!!!!!!!!!）

『ストライク!! バッターアウト!!!!!!』

副島（今日は小宮も西口もない。だからこそ自分がこの試合自分が
どうにかしなければいけないという思いが強い。そのときのアイ
ツを打つのは困難だ。この前の名林戦の9回ノーアウト満塁からの
リリースのときのようにな。）

谷（くそっ…。この試合、俺が抑えるしかない…。）

（ドバンッ!!!!!!!!!!）

『ストライク!! バッターアウト!!!!』

（ドバンッ!!!!!!!!!!）

『ストライク！！バッターアウト！！』

大場『しゃあああ！！！！！！！！！！』

『三振！！！！3番の宮池^{みやいけ}も三振で1番の谷^{たに}、2番園田^{そのだ}、3番の宮池と三者連続三振に打ち取りました！！愛知県屈指の進学校、邦南高校のエース、大場翔真！！！！！！！！！！』

『1回の裏、邦南高校の攻撃は、1番、キャッチャー、副島くん。副島（左のサイドハンドか…。今大会初登板のやつだしこっちもお手並み拝見ってところだな。）』

初球…

セットから谷が投げる。

ビュッ！！

副島『ぐっ!!』

(ズバン!)

『ストライク!!』

副島(初球からインコースのまっすぐ?球の出どころが見えにくい
変則的なフォームから制球力にも長けてるか。この打席は粘って相
手の手の内を読ませてもらうか。)

2球目:

ビュッ!!

(ズバン!)

『ストライク!!ツー!!』

副島『2球続けてインコースのまっすぐ…。ちくしゅう。もう追い
込まれちゃった。』

3球目:

ビュッ!!

副島（またストレート!!カットで逃げるしかないっ!!）

（ブン!ズバーン!!!!!!）

『ストライク!!バッターアウト!!』

副島『今のもストレート。今までとは球の威力が違った!!。』

副島が場内球速表示を見る。（ちなみに5回戦から球場がかわってスピードガン導入。）

そこに表示されていたのは…

《 148 km/h 》

副島『148 km/h…!!?左のサイドハンドでこの球速…』

続く2番の慶野も三振。

『3番、ピッチャー、大場くん。』

初球…

（ククッ!!!!!!）

（スパーン！！！！）

『ストライク！！』

大場（今までは思いっきり直球で押してきたのに俺には初球から緩いスライダーか。）

2球目…

（スパン！！！！）

『ストライク！！ツー！！』

大場（インコースか。しかしよくも左打者のインコースにその角度からバシバシストライク入れてくるよな…。）

3球目…

ビュッ！！

（ククッ！！）

大場（スライダー！見逃せばギリギリボールだ！！！！）

（スパンっ！！）

大場（これでツーワンか…。）

『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！』

大場（えっ！？今のが！？）

谷『よくボール見ておけばわかると思うけど、ベースの端っここすってんだよね。うはっ。』

大場（制球力…球威…共に抜群か…。これは厄介な相手だ…。長期戦は覚悟しておかないとな…。）

両チームエース共に初回を三者連続3球三振に抑え、二回の攻防へ…！！！！！！

N o . 3 8 : 酷い守備力（前書き）

今回は長いです？？
あと新キャラとか出てきます？

No.38：酷い守備力

試合は両投手共に三振の山を築き、3回裏が終了。両チームとも未だヒットは0。

邦南の大場は3インニング打者9人を投げ被安打0、奪三振8、無四球の好投。

対する大峰明館の背番号20、左のサイドハンドの谷は3インニング全打者奪三振（9個）の投球。

バックネット裏…

『いやあ。楽しみな対決だなあ。推定偏差値74の進学校の邦南がここまで来るなんて。俺んち邦南高校のすぐそばだから応援したくなるねえ。地元だし。』

こんなところで独り言を呟くおじさんの名前は、野中のなか 栄嗣えいじ。

邦南高校の近くにすんでいるおじちゃんだ。

毎年夏は邦南の試合を見に来ている。

今年はまさかの16強ということもあって非常にテンションが上がっている。

野中『でもいまのところすごい投手戦だね。ケイさん。』

今日は仕事場で知り合った高校野球ファンの友達、川越かわごえ 啓造けいぞうとの試合を見に来ている。

ちなみに川越の出身高校は享神だ。

もちろん野球部に入っていて、享神が30年前に甲子園初出場で優勝したときエースで4番だった。

『4回の表、大峰明館高校の攻撃は、1番、ピッチャー、谷くん。』

川越『これはなにか企んどるよ。長年の勘だね。』
野中『だろうか。』

初球…

（スッ…）

大場『！！！！！！』

川越『やっぱりね。』

（コンー！）

副島『くそっ！！セーフティーか！！サード！！！』

松坂『あいよ！！！！』

（パシッ！！ヒュッ！！）

藤武『んあっ！！！！』

松坂『やべっ！』

松坂の送球はショートバウンドになった。

一塁守備が上手くない藤武はそれを後逸した。

川越『あーあーあー！！！！やつちやつたよ……。焦ってあんな送球するから。ファーストの子もあれくらいとってあげなよ。』

野中『去年もあのピッチャーの子が1年生エースでね。だけど内野の守備の乱れで4-3で敗北したよ。去年と同じ感じだな。今のは相変わらず守備の安定しないチームだ。』

川越『去年は何失策したんだ？』

野中『たしか……。8個かな？』

川越『ははは。それでよく4失点で抑えたな。あのピッチャーくんは。』

野中『邦南が取った3点は全て大場くんの打点だしな。』

川越『しかしあの大場ってピッチャー、昔の俺に似てる気がするな。』

野中『知らんよ。そんなの。』

『2番、ファースト、園田くん。』

大場（無死二塁か。先制点を渡すわけにもいかねえし、結構ピンチだな。ウチの守備力の低さはこれまでの試合の失策数で証明済みだしな。（ちなみにこれまでの4試合…28イニングで12個の失策）

（コンー！）

『さあ2番の園田、いいバントだ。今度も三塁手に捕らせるうまいバント！三塁手の松坂、今度は丁寧にさばいていきま…！？』

『あーあつと！一塁ベースカバーの二塁手が遅れた！一サードの松坂、一度ためて投げる！！しかし間に合わない！！セーフ！！邦南高校、二塁手のベースカバーミスでこれで無死一三塁のピンチです！！！！！！』

川越『たく…。見てて酷い守備だね。今のも頭使って守備してくれ

ばバントの予想だつて簡単につくだろくに。」

野中『投手力はほぼ互角。打力は邦南の方が若干上だが、守備力は天地の差で大峰明館が上手いな。』

大場（去年の二の舞になつてたまるか。去年も味方の守備に足引つ張られた。だけど俺が気持ち切れなければ勝てたはずだった。今年は小宮や西口がいたから守備力も向上したし、なんといっても打線が増した。だけど今日は違う。俺がこいつらを勝利へと導くんのだ！）

川越『ふーん。おれこのピッチャー気に入った。』

野中『なぜだ？』

川越『この大場つてピッチャー、昔の俺に似てるつてのもあるんだけど、どんなに味方に足引つ張られても動じない心。俺がどうにかしてやるんだ！！つて気持ちがここまで熱く伝わってくるからな。』

野中『やっぱお前連れてきて正解だったな。大場のいいところにもうきづいちまうんだからな。』

川越『当たり前だろ。俺を誰だと思つてる？はははっ。』

大場（まだ点をとられた訳じゃない。三振とつてワンナウト二三塁になればこっちのモンだ。）

（ズバン！！！！）

『ストライク！！ワン！！！！』

《 144 km/h 》

吉松（大峰明館監督）（外すつもりは無さそうだな。次でスクイズ行くか。）

大場（スクイズの可能性もある。ここは1球様子を見た方がいい。）
大場は首を振ってウエストのサインが来るのを待つ。

副島（ん…。そうか。スクイズもあるのか。ここは1球はずすか。）

大場がセツトポジションにつく。
そして足をあげた。

大場は左投手なのでランナーは大場が足をあげた瞬間にスタートを切る。

しかし…

副島（やっぱりスクイズだったか！！よしこれで三塁ランナーは！）

バッターはバットに当てることはできなかった。

大場（よし！！）

しかし…。

（バスッ！！）

副島『うわっ！！！！』

キャッチャーの副島はボールを完全に捕球する前に三塁ランナーの方へ目がいつてしまったので大場のボールを弾いてしまった。

『ランナー突っ込め！！！！！！』

ホームは悠々セーフ。

まずは大峰明館が副島のパスボールで先制。

『サード行つたぞ！！！！！！』

スクイズの際、スタートを切っていた一塁ランナーはパスボールの際に一気に三塁を伺おうとする。

副島『暴走だ！！！！』

副島が三塁へ送球。

ランナーは二三塁間で挟まれた。

だがなかなかアウトにできない。

そう、当然ながら挟殺の練習などしていないからだ。

川越『あららららら……。小学生の球遊びじゃないんだから。』

そして……

二塁手の島谷涼が挟殺プレーで偽投を入れてしまった。三塁手の松坂もボールが来ると思ったのに来ない。少しひるんだ。そのとき島谷涼が三塁へ送球。

一瞬ひるんだ松坂はコレを捕球できずに後逸。

三塁手のカバーもいないなんとの間抜けな邦南はこのランナーもホームに還してしまった。

大場（……。先制点だけはやっちゃいけなかったのに……。しかも2点かよ……。あのピッチャーから2点は相当厳しいよ……。）

大場はスクイズのサインも読んでいただけに呆然としている。

川越『かわいそうにね。彼ならもっと強豪校でやってれば甲子園も夢じゃなかったはずだろうに。』

大場（くそっ……。）

（ビュッ！！）

大場（やば！ど真ん中！！）

（カキーン！！！！）

打球はセンターの慶野へ。

慶野はこちらむきだ。

大場（ふう。文哉なら安心だ。）

大場はマウンドを降りようとした。

しかし

慶野『あれっ…ボールは！？』

センターの慶野は眩しく照りつける太陽を背景にボールを見失った。

大場も慶野の異変に気づく。

そして…

（ポトン！！）

『センターまでもが後逸した！！！！バッターランナーの宮池はもう二塁を蹴る！！！！早いぞ！！レフトの木村くんがようやくカバーするがどうだ！？バッターランナーは三塁を回った回った！！！！木村から内野にボールが返ってくるもホームはセーフ！！宮池がダイヤモンドを一周してきた！！これでこの回3点目！！！！』

大場『文哉……。お前もか……。』

川越『これで決まったね。3点目を献上しちゃったし。この試合、邦南が勝つ可能性は限りなく無に等しいね。』

邦南！！早くも大ピンチ！！どうなる！？？5回戦！！！！

N o . 3 8 : 酷い守備力（後書き）

感想もらえると嬉しいです（＾Ｏ＾）

№ 39:エラーの連鎖(前書き)

今日も長めです？

No.39：エラーの連鎖

結局4回の表は邦南のエース大場が4、5、6番を三者連続三振に打ち取りスリーアウト。

これで4回までで11奪三振。

しかし味方のエラーで3点をこの回失った。

大場は完全に孤立無援だ。

『4回の裏、邦南高校の攻撃は、1番、キャッチャー、副島くん。』

打席には先制のパスボールを献上してしまったキャプテンの副島。

副島『くそ…。』

副島は去年の敗戦を思い出していた。

副島達（今の三年生）が1年生だった頃は部員不足で夏の大会には出場できなかった。

そして去年、大場と慶野が入って部員がちょうど9人になり、夏の大会を経験した。

副島が2年生だったときは、キャッチャーはひとつ上の先輩がやっていたので、副島は捕手ではなく二塁手だった。

回想シーン←←

『1回の裏、港西こうせい高校の攻撃は、1番、ショート、高橋くん。』

（カキンー！！）

打球はセカンドの副島へ。

しかし…

『ああーっ！！！！！！』

副島は初回の先頭打者の打球をトンネルしてしまう。

その後も失策や四球が絡み、この回ノーヒットで2点を先制される。

しかし大場の二打席連続のホームランで同点にする。

その後、港西はまたもエラー絡みで1点を追加。対する邦南も二死一塁から大場のタイムリースリーベースでまた同点にする。

が、9回の裏…

一死一二塁。

ゲッツーができればチェンジの場面。

（カキーン！！）

打球はサードの島谷へ（島谷倫）。
注文通りのダブルプレイコース。

しかし

（バスッ！！）

サードの島谷は弾いてしまってアウト捕れず。これで一死満塁。

バッターは3番の川口。

港西高校で1番の好打者を迎えるが、大場はなんとか三振に撃ち取る。

『4番、キャッチャー、安藤くん。』

（カキーン！！カキーン！！カキーン！！）

追い込んでからもファールで粘る安藤。

絶対に勝つ！！という強い気持ちでいたが…

（カキーン！！）

打球はファーストファールフライ。

安藤が打ち損じてしまった。

ファーストの松坂が手をあげる。

だれもがスリーアウトだと思った。
だがあなたが思う通り…

『うわっ！！』

松坂は落下地点にうまく入れずばんざいしてしまいチェンジならず。
このプレイで大場の集中力が切れてしまった。

無理もない。この試合、自分がずっとマウンドを守ってきて何個アウトを損じたことか。今のも疲労感たつぷりの自分に対し元気一杯の4番バッターにかなり手こずっていた。しかし打ち損じてくれたラッキーだった。だがアウトを野手がとってくれない。

普通のピッチャーならこれまでに何度崩れてもおかしくなかったはずだ。

それを我慢して未だ3失点の投球。

しかしこの一年坊には限界だった。

顔には出さなくとも、これじゃあ勝つチームの試合じゃないと思った。

負けてもいいと思った。

そして次の1球…

（バン！！！！）

『ボール！！フォアボール！！』

投げた瞬間明らかにわかるボール球だった。

三塁ランナーがホームベースを踏む。

『ゲームセット!!!!!!!!!!』

邦南はこの試合、打たれたヒットはわずかに2。

一方の邦南は大場の4本。

大場は4打数4安打2本塁打3打点。

ちなみに邦南の失策は8。

回想シーン終わり→

(バン!!)

『ストライク!!バッターアウト!!!!』

『見逃し三振!!!!!!これで大峰明館の谷くん!!!!10者連続!!!!!!』

『2番、センター、慶野くん。』

…

（バン！！）

『ストライク！！バッターアウト！！』

『空振り三振だ！！これで11者連続！！』

『3番、ピッチャー、大場くん。』

大場『まだ4回だ…。負けるわけねえ！！』

（カキン！！）

『打ったあ！！！！痛烈な打球は右中間へ！！打った大場は三塁へ向かう！！！！！！余裕のスリーベース！！！！！！このヒットが邦南の初ヒット！！！！』

しかし…

『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！！！！！』

『4番の松坂くんも三振でスリーアウト！！！！邦南！！！！一点もとれず！！！！』

大場『まだ…まだ…。…。』

…試合は両投手の好投でテンポよく進み、七回の表、大峰明館の攻撃。

点数は未だ3 - 0で大峰明館がリード。

『7回の表、大峰明館高校の攻撃は、4番、サード、高橋くん。』

カキン！！

『抜けた！！！大峰明館の4番高橋、三遊間を抜けるレフト前ヒット！！これで無死一塁！！』

『5番、シヨート、太田くん。』

(コン！！)

『打球をうまく殺した！！いいバントだ！！ピッチャーの大場が丁寧に処理してこれで一死二塁！！』

『6番、キャッチャー、土佐くん。』

カン！！！！

『打ち上げたー！！！！しかしこれはライトの氷室手をあげる。アウ

箕（速いな…。こりゃバット短くシャープに打っていかなきゃあたんねえな。）

箕がバットを拳一つ分短く持った。

野中『ここにきて今日最速…。しかも自己ベスト更新か。やっぱこの子はすごいよ。』

川越『間違いないえな。俺の知り合いにスカウトがいる。そいつにコイツをマークしとくように言っておくかな。俺のお気に入りってことでな。』

野中『へー。ケイさんの知り合いにスカウトがおるんやな。ちなみにどこのチームの？』

川越『難波ライオンズや。ちょっと遠いけどな。』

『ストライク！！ツー！！』
《 146 km/h 》

川越『くーっ、いい球だな！こんなチームにこのピッチャーはもったいねえな！！』

大場『よし…。追い込んだ。次はこのボール。』

大場がフォークの握りを試す。

この試合では旧フォークは使ったがまだ下村健太直伝の新球・下村フォークは使っていない。

なぜならまだ握力が下村健太レベルではないので多投は終盤に影響するからである。

大場『出し惜しみしてる場合じゃねえ。ここは一気に3球勝負で片付ける。』

大場が投球モーションにはいる。

ビュッ!!

シュルシュル!

大場『なっ!!なんで!?!』

筧『絶好球!!』

(カキン!!!!!!!!!!)

痛烈な打球だが打球は三塁松坂の正面。

しかし

『トンネルだあ！！！！！！大峰明館に追加点が入った！！！！！！これで4点差！！大きな大きな一点が入りました！！！！！！』

松坂『…わりい…。翔真。』

大場『お…おう…。気に…すんなよ…。』

《 121km/h 》

野中『今は変化球かい？あまり曲がっているようには見えなかったけど。』

川越『今は抜け球だろうね。まったくこんな場面で。大場くんがあんな精度の悪いボールを投げるわけないし。』

野中『だが4点目を取られちゃったね。』

川越『かわいそうだがこの大会でこの子を見るのは最後になりそうだ。』

野中『意義なしだが…このインングで終わるのは勘弁だな。』

川越『考えてることは同じだな。栄嗣。俺もコールドにならないか心配してたところだ。』

野中『またエラーでの失策。ピッチャーの気分も最悪だろう。しかも今の投球、俺は確実に何か試しているように見えた。この場面で

試すくらいだ。きつと賭けたんだろう。だがそれは失敗に終わった。

川越『ピッチャー心理的にもう限界だ。とっくに集中力は切れているだろう。この回、まだまだ終わらないだろうな。』

(ズッバーン!!!!!!!!!!)

《 149 km/h 》

川越『怪物か……!? なんなんだこの精神力は……!? もはや高校レベルじゃない!! この場面でこの日出した自己最速を2? も更新するだど!?!』

野中『去年から成長したね。俺はわかる。』

(ズッバーン!!!!!!!!!!)

『ストライク!!!!!!!!!!』

《 149 km/h 》

(ズッバーン!!!!!!!!!!)

《 149 km/h 》

『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！！！』

『大場が3球連続の149 km/hで8番仲沢を三振にきってとりました！！しかしこの回大峰明館は邦南のエラーでさらに一点を追加これで4-0！！！！』

『7回の裏、邦南高校の攻撃は、2番、センター、慶野くん。』

慶野『ごめんな。翔真。またおれらが足引つ張っちまって。』

大場『謝ってもとられた点は返ってこない。まだまだ4点差。決して諦める点差じゃない。とりあえず塁に出てくれ。あとは俺がどうにかする。』

慶野『相変わらず。強いやつだ。』

大場『良いからでろよ！！！！』

慶野『任せろって。』

『大峰明館の先発、谷は今までと6回をなげて被安打1無四球の16奪三振の好投を見せています！！！！』

初球…

（バン！！）

『ストライク！！』

慶野（くそっ…。俺の打力じゃとても対応できるボールの速さ、キレじゃねえ。）

2球目

慶野『俺の打力の話だけだな！』

（ポン！！）

『プッシュバントだ！！ピッチャーとファーストの間を狙ってきた
！！！！』

谷『くそっ！！取れねえ！！』

『抜けた！！これで2番慶野の内野安打でノーアウトランナー一塁
です！！邦南高校、ここにきて今日初めて先頭打者が塁に出ました
！！』

『3番、ピッチャー、大場くん。』

ビュッ！！ゴウッ！！

（カッキーンッ！！！！！！）

谷『あの高めの、クソボールを…』

（ボサッ！！！）

『入ったーっ！！！！！！3番の大場のツーランホームラン！！！！これ
れで2点を返して4 - 2！！邦南高校が反撃ののろしをあげた！！』

？？『勝てるぞ…。頑張れよ。お前ら。』

邦南高校の制服を来た青年が、ランニングを始めた。

No.39:エラーの連鎖(後書き)

感想くださいm(・・)m
読んでくださった方、お願いします？

No.40: やつちまった…

7回の裏に大場の2ランホームランで2点を返した邦南は後続がまた抑えられスリーアウト。

『8回の表、大峰明館高校の攻撃は、7番、セカンド、^{かけい} 寛くん。』

大場『はあ…。はあ…。はあ…。』

副島（翔真はもう130球を越えてきてる。そろそろ疲れも表に出てくるはずだ…。だからこの回は変化球中心の攻めで体力温存するぞ。）

寛（今まで相当飛ばしてきたからさすがにまだまだ直球中心はキツいだろ。じきに変化球の割合が増えてくるはずだ。）

初球…

ビュッ！！ガクッ！！

寛（フォークだ！！曲がりがい！！！！打てる！！！！！！）

副島（うがっ！！！！）

（カキーンっ！！！！！！！）

『先頭打者の筈が捕らえた打球はセンターへ！！！！！！二点リードの大峰明館、先頭バッターが出塁です！！！！！！』

副島（今のフォーク、明らかにキレが悪かった。これも疲れからか……？）
大場（……いける。さっきはダメだったけど、今の手の感覚ならいける気がする。まだまだ疲れてなんかいいえ。）

『8番、レフト、仲沢くん。』

仲沢がバントの構えをする。

川越『手堅いな……。』

野中『まあ当然っちゃ当然だろ。守備の安定しない邦南から一点をとるより堅守の大峰明館から一点をとる方が遥かに難しい。』

川越『大峰明館も打撃があまりよくない分取れるところでとらなきゃ苦しくなる可能性だってあるしな。』

野中『ただ。一つだけ懸念がある。』

川越『……………。いつバテるかだな。残念だが。』

野中『球数なら十分根性でなんとかなる状況だが……』

川越『球数以外での消耗量が半端無さすぎる。』

野中『味方の大量失策。それだけじゃないな。』

川越『打撃の時も休んでないしな。』

野中『普通ピッチャーは自分の打席以外の時は座って体力回復に当てるんだが、あいつはこの試合ベンチの最前列に立つてずっと大声で味方に声援送ってるからな。』

川越『ったく。見ててこっちが心配しちまうよ。』

大場『バントなんかやらせてたまるか。ここはぜってえさせねえ!』

初球…

ズバン!!!!!!

アウトローに見事に決まった直球。

2球目…

大場『ここで使う。副島先輩、頼みました。』

副島（おう。）

副島が下村フォークのサインを出す。

セットポジションから大場が投げる。

大場（身体脱力^{リラックス}、決して力まずに、しなやかな腕の振りで、最後の最後…）

『指先だ！……！！……！！……！！』

ビュウッ……！！……！！……！！

仲沢（ストライク……！！送らせてもらっ……！！……！！）

カクッッッアッ……！！……！！……！！

仲沢（なっ……！！）

副島（よしっ……！！……！！……！！……！！）

バン……！！……！！……！！

ボールがワンバンする。
仲沢はバントを空振りした。

そしてボールはホームベースの1番後ろのトンがったところに当たった。

バウンドが変わった。

ゴロバウンドになった。

キャッチング技術が未熟な副島は腰が浮いていた。

体で止めようとした捕手副島の股の間をボールが抜ける。

これで無死二塁。

副島（やっちゃった…。）

キャプテンの副島は下を向いている。

川越『負けたな。この場面でパスボールやってちゃダメダメ。股抜けなんて完全にキャッチャーの責任だよ。』

そう言って川越は席を立つ。

野中『どこ行くんだ？』

川越『ちよつと外いつてくる。次の試合やるやつらがアップしてると思うからな。』

大場（ちくしょう……。負けられるかよ……。……。こんなところで。まだバント継続だな……。しかし。この試合、もう下村フオークは使えない。またワンバンになって暴投になっちゃったらもう終了だ。）

大場はここまで体力的、精神的に追い込まれているのにも関わらず未だ最善の手を尽くしている。

（コン……！）

『うまい送りバントだ……！サードにうまく転がした……！これでワンナウトランナー三塁……！……！……！』

『9番、センター、佐々木さんに代わりまして、代打、美濃島^{みのしま}くん。』

大場（ここで代打か。代打には変化球中心の攻めが鉄則だな。）

谷『美濃島は俺らの代打の切り札だ。美濃島の異名は…』

『変化球キラー』

（カキン！！！！！！！！）

『痛烈な打球はセンターへ！！！！！！犠牲フライには十分だ！！！！！！！！！！』

これ以上点をとられることは敗北を意味する邦南、どうなる！？！？
？ベスト8争い！！！！！！

No. 41: 謎の男(前書き)

今回の話はかなり重要ポイントです?????????
????????????????????????????????

読んでくださった方はぜひ感想お願いします?

No. 41: 謎の男

『打球はセンターへ……犠牲フライには十分だ……センター慶野！……こちら向き……うまく落点に入った……！……！……！』

副島「4つ!!!!!!!!!!バックホーム!!!!!!!!!!」

慶野（俺のエラーさえないけりやもつと逆転の可能性は高かった。これであのプレーを帳消しにできるとは思わねえけど！！！！見てろ翔真！！！！俺はいつまでもお前に引つ張られるつもりはねえええつつ！！！！！！！！！！）

『今バックホーム！！！！三塁ランナーの筈もタッチアップの体勢からスタートを切った！！！！！！』

慶野「アウトになれ!!!!!!!!!!!!!!」

『おっと！……！これはかなりの好返球だ！……！……！タイミングはどうだ！？！？』

副島（微妙だ……でも俺が体を張って……！このランナーを

アウトにする……………！）

（がつ……………ズバーン……………ダン……………バツ……………！）

『三塁ランナーも壮絶なスライディング……………！！！！しかしキヤッチャーの副島も怯まずにブロック……………！！！！タイミングは微妙……………！！！！タッチは！？！？』

『アウトオーツツツツ……………！！！！！！！！！！』

『バックホームはアウトだ……………！！！！！！！！！！飛距離は十分の打球、センターの慶野のバックホーム、そしてキャッチャーの副島の見事なブロックで追加点を防いだ……………！！！！！！！！！！邦南高校、見事な守備を見せました……………！！！！！！！！！！』

しかし

副島『くっ……。……。』

副島が座ったまま膝に手を置いて苦しそうにしている。

大場『副島先輩！』

大場も副島の異変に気づく。

『キミ！！大丈夫か！?!?』

主審も心配する。

松坂『翔真！？立てるか！？』

副島『く……。む、むり……。』

副島がおぶられて退場する。

今のプレーでスリーアウトチェンジだが副島が負傷した。

ベンチ前で残った選手全員の9人が集まる。

木村『充が次の回からもし出られないなんてなったら……。』

大場『この試合は没収試合ですね。まだ9人いるってなっても小宮は松葉杖ですし。』

小宮『こんなときに……。すみません。試合前に一応聞いたら松葉杖でも代打ならオッケーらしいですけど守備は許可はもらえなかったんで……。』

慶野『副島先輩に復帰してもらうしか…。この試合は続けられない…。西口もないし。』

『8回の裏、邦南高校の攻撃は、7番、レフト、木村くん。』

木村『充…。絶対復活しろ。それまでみんな待つてるから。』

『副島くんの状況はまだ情報が入っていないので情報が入り次第お伝えします。』

…

（カキン！）
『ファール！！！！』

『さあ粘る7番の木村くん！！次が11球目！！』

（ばん！！！！！）

『ボール！！！！フォア！！！！！！』

木村『よしっ！！！！』

『さあここにきて今日初めてのフォアボール！！！！！！これでノーアウト一塁！！！！！！』

『8番、ファースト、藤武くん。』

『ランナースタート！！！！！！これは…！？』

カキーン！

『ヒットエンドランだ！！！！！！サードがとつて一塁送球！！アウト！！ワンナウトランナー二塁に変わりました！！！！！！』

『9番、セカンド、島谷涼太くん。』

（カキーン！）

『打球はファーストへ！！！！！！二塁ランナーは三塁へ！！！！！！これで二死三塁！！！！！！』

大場『次の打順は…。』

慶野『キャプテン…。』

大場（こんなとき…あの人がいたら…あの人がいたら…。今日はまだ来るかわからないって言ってたけど…。期待は薄い…。）むしろ

しない方がいい…。

そのとき医務室では…

副島『うぐ…くつ…。また俺のせいで負けちまう…。絶対に勝た
い…。でも…膝が…うぐぐ…。』

??『試合、出られるか？今ツーアウト三塁。お前の打席だ。』

副島『おまえ！！！！！なんでここに！？』

??『まあ一応俺も野球部員だからな。3年は同学年だし知ってる
やつもいるだろうが1・2年は俺のことは知らないだろうがな。こ
んなおれでも今までずっとリハビリしてた。』

副島『え…？なんの？』

??『肘だよ。オレ、中学の頃まで野球やってたんだ。それまでは
けっこう有名だったんだ。とりあえず出れそうか？』

副島『じゃ、じゃあおまえ…』

??『お前が出られないようなら試合出るしな。西口もいなくて小
宮も怪我してんだろ？』

ガチャっ！！！！！！！

扉の開く音がした。

大場『副島先輩！？大丈夫で…！？』

大場と謎の男が視線を合わせる。

謎の男は邦南のユニホームを着ている。

大場『え…。今日は来るかわかんないんじゃない？』

『？？俺が復帰する前にチームが終わってた意味ないだろう。正直名林戦から復帰しようと思ったんだけどなんともしずらくてな。』

副島『お前ら…知り合いなのか…？』

『？？知り合いもなにも、俺が頼み込んで翔真には邦南に来てもらった。ついでに言う和小宮と西口が邦南に来たのも俺が熱心に誘ったからなんだけどな。』

副島は痛みを忘れて口を開けて啞然としている。

大場『この人の実力は僕が保証します。』

副島『おまえ…。そんなすげえやつだったのか…。』

『？？同じクラスでも知らないことはたくさんあるもんだろ？ごめんな。今まで黙ってて。いままでずっと幽霊部員だったのは中途半端だった訳じゃない。すべて…この夏に復活するためだったんだ。だから3年に及ぶ肘のリハビリから耐えてきたってわけ。』

副島『…。わかった。今のオレじゃ試合に出れない…。まず立つこともできないし…。俺の分まで打ってくれ。そんでもって次の試合

…オレはおまえと一緒に野球をやりたい。』

??『ありがとう。まかせろ。』

ガチャっ!!!

大場が扉を開けてベンチに戻る。

慶野『翔真!!!どうだった!?!』

大場『代打だ。』

慶野『え…?』

ガチャっ

謎の男もベンチに入る。

かなり体格もできている。

そしてヘルメットをかぶり、バッティンググローブを両手に着け、最後にバットをバット置きから抜いた。

松坂『あいつってE組の…』

島谷倫『ああ。ずっと幽霊部員だった。野球の格好してるの初めて見た。』

氷室『だれ…？』

慶野『背番号10…』

『邦南高校、選手の交代をお知らせします。1番、キャッチャー、副島さんに代わりまして、代打、鬼頭くん。』

謎に満ちた男がついに初登場！！

No. 41: 謎の男（後書き）

鬼頭初登場？

実はこの話の主人公的存在です（笑

登場遅い？

N o . 4 2 : 快打炸裂！（前書き）

今回は鬼頭の打席中心です？

No.42：快打炸裂！

島谷涼『あの人、試合に出ていいんですか？』

鬼頭きとうの存在を知らない一年生部員が率直な疑問を述べた。

慶野『たしかに背番号10はいままでいなかったけど…。まさかあの人？』

大場『ああ。あの方は3年生だが今日初めて邦南の野球部に顔を出した。鬼頭きとう博行ひろゆきって言うんだ。』

慶野『翔真はあの人と知り合いみたいけどあの人にこの場面任せて大丈夫なの？野球初心者じゃないの？』

大場『その心配は要らない。あの方はここにいる誰よりも中学校までの実績なら勝っている。』

氷室『大場先輩はあの人とどういう関係なの？』

大場『詳しくはいずれ話すときが来るだろう。そのときに話す。ま、言ってみれば俺の師匠ってポジションかな。』

島谷涼『でも大場先輩よりもすごい実績って…。』

大場『あの方は中学の頃…あのS・6と一緒に野球をやってて、当

時は鬼頭さんを含めてS・7って言われてたんだよ。そんでもってS・7は中学軟式出身にも関わらず硬式野球の世界大会に出場してな、S・7を中心にした中学硬式野球日本代表は世界一になった。しかもあの鬼頭さんは背番号1。俺も中学硬式野球日本代表のエースだったが、世界大会では一回戦負け。実績でオレよりも上つてのはそういう意味なんだよ。」

そこにいる皆が驚いた。

だが…

『翔真は嘘をつかない。』

ということを知っていたのですぐに飲み込んだ。

鬼頭(さつきスタンドから見る限り持ち球は速いスライダーと遅めのスライダー、あとカウント球にカーブも持っているな。打たせてとりたい場面では速いシュートを多投。緩急自在なうえ制球力も抜群。ストレートも左のサイドハンドのくせして常時140km/h前半から中盤。勝負どころでは140後半を出してくる。かなりいいピッチャーだ。まず初球、何で来る?久々の打席でおそらくさすがのオレでもストレートには目がついていかないだろう…。代打への初球は変化球でいくのが鉄則だ…。なぜなら代打は初球ストローを狙っているやつがほとんどだからな。ってことで初球は変化球がいいな…。)

鬼頭は今の自分のコンディションから直球はまず捨て、変化球狙いにした。

初球…

（ビュッ！！ズバーンッ！！）

『ストライク！！』

《 143 km/h 》

鬼頭（初球はストレートか…。今ので143 km/hか。やっぱりストレートには目がついていかねえ…。）

2球目…

（ズバーンッ！！）

『ストライク！！ツー！！！！』

《 140 km/h 》

鬼頭（今のもストレート？たしかに球速はさっきよりも少し遅いがさっきほど球のノビは感じられなかった。）

鬼頭がピッチャーの谷の方をチラッと見る。

谷（さすがに序盤に飛ばしすぎたかな…。このバッター…ストレートの反応が悪い。このままストリートで押す方が安全だと思うが…まだ8回の裏…。9回にバてるわけにはいかない…。）

谷は顔には出さなくとも内心バテ始めていた。

鬼頭（しめた。次のボール、確実に変化球だ。）

鬼頭は谷のほんのわずかな表情の変化を感じ取った。

（バテてきたな。）

鬼頭（最終回のためにスタミナ温存しておきたいわけだろう。まあ無理もない。今まで7回2/3を18奪三振。序盤に比べて三振のペースが落ちてきた時点で少しバテてきていたのはわかっていたがな。次の1球…仕留めるしかない。）

ピッチャーの谷がセットポジションから投球モーションにはいる。

ゴウー！！！！！！

カクククッ！！！！！！

鬼頭（いいスライダーだ。左バッターのオレに当たる軌道から入れ

てくるつもりだったんだろうけど。今のオレに変化球を投げた時点でキミの負けさ。）

筧『うがつ!!!!!』

『セカンドの中継に入った筧も渾身のバックホーム!!!!!!判定はー!?!?!?』

『セーフ!!!!セーフ!!!!』

『セーフだ!!タイミングは微妙でしたがバッターランナーの鬼頭くん、キャッチャーのタツチをうまくかわして見事なホームイン!!8回の裏、ここにきて邦南高校が代打鬼頭くんのランニングホームランで2点を返し5-4!!!!ついに一点差まで詰めてきた!!!!!!』

鬼頭『よっしゃあ!!』

島谷倫『すげ...』

松坂『こんなやつがまだいたのか...』

大場『それは向こうのチームも同じ気持ちだと思いますよ。あのベースランニングなかなか真似できるものじゃないですね。』

鬼頭『よし!!あと一点だ!!』

大場『みんな。この人のことはまた違うときに話してもらおう。だからこの試合はとりあえず勝つぞ!!!!一点差なら絶対に追い付ける!!!!』

『『『 おう!!!!!!!!!!!!!! 』』』

邦南の選手は鬼頭の登場にまだ啞然としているが序盤から味わって
いなかった感覚が戻ってきた。

『勝てる。まだまだ諦める場面じゃない。』

その後次の打者慶野、大場が連続四球、4番の松坂も死球で出塁し、
二死満塁となるもここで大峰明館はここまで好投していた背番号2
0の谷をレフト代えてエースの飯尾^{いとお}を投入し、この飯尾が5番の島
谷倫を打ち取りスリーアウト。

そして一点差のまま、9回を迎える…。

No. 43：以心伝心？

松坂『あ！！！！！』

木村『ど、どーしたの！？』

松坂『キャッチャー…は…？』

木村『た、確かに…』

鬼頭『俺がやればいいんだろ。』

木村『で、できるのか？キャッチャーなんて特殊なポジション。』

鬼頭『心配すんなって。オレ、本職はピッチャーだけど基本どこでもできるから。』

副島の代打の鬼頭がそのままキャッチャーをすることになった。

『9回の裏、大峰明館高校の攻撃は、1番、レフト、谷くん。』

大場（一応球種の確認はしたけども…）

鬼頭（オレのサインに首ふるなよ。planが台無しだ。）

大場（ど真ん中って…。）

（カキーン！）

『打球はセンター前へ！！一点リードの大峰明館！9回の表まず先頭の1番、谷くんが出塁しました！！』

大場（いきなりど真ん中ストレートって…。もう5順目だっていうのに。）

鬼頭（次は外角のボール球。）

大場（この場面で初球ボールからはいろの！?!?!?!）

鬼頭（シャラップ！！さっさと投げろ。）

大場（…ったく。はいはい…。）

（バン！！）

『ボール！！！！』

大場（もう！！絶対無駄球だっただろ！！）

鬼頭（スキあり！！）

鬼頭が座ったまま一塁へボールを投げる。

一塁手の藤武は頑張って捕球しランナーにタッチする。

『アウト！！！！！！！！』

『アウトだ！！！！キャッチャーの鬼頭くん！！見事なスローイングを見せました！！！！！！』

鬼頭（よし。完全にplan通りだ。）

大場（大胆だな…まさかこれを狙ってさっきのバッターの初球わざと打たせたのか…？いや。そうに決まってる。だってあの人もん）

鬼頭（とりあえず決め球のフォーク2球で追い込むぞ。）

大場（とりあえずって…もうけっこう疲れてるんですけど…。）

鬼頭（もう一度言う。シヤラップ！！口応えすんな。）

大場（はい。）

この二人は幼い頃から一緒に野球をやってきたため野球をしながら

なら無言で会話をすることができる。

（バン！バン！）

『ストライク！！ツー！！』

大場（師匠がいった通りとりあえず2球で追い込みましたよ。とりあえず1球外のへんか…）

鬼頭（仏の顔もthirdまで。シャラップ！！次はこれだ。）

大場（ええっ？下村フオーク？いくら師匠でも初見じゃとれないんじゃない…）

鬼頭（What's？なめてんのか？オレにとれない球なんて存在しねーんだよ。）

大場（はいはい。）

大場が投球モーションにはいる。

大場（マジでパスボールだけは勘弁…。）

大場が投げる。

ビュッ！！

カクアツアツ！！！！！！！！

（ブン！！バシッ！！）

鬼頭（good news！ツアーアウト！）

大場（うわぁ……。初見の人に下村フォーク捕られた……。けっこうシヨック。）

鬼頭（言ったる？baby？オレにとれない球はないって。）

『3番、ライト、宮池くん。』

大場（3番か……。これは慎重に攻めないと長打食らうぞ……。）

鬼頭（まずはここ。）

大場（ほんまですか！？絶対ヤバイですって！）

サインはど真ん中ストレート。

鬼頭（ここ以外に投げたら捕らねえからな。）

大場（はぁ……。）

ビュッ！！

（バスっ！！）

鬼頭（oh！！）

ど真ん中のストレートを鬼頭が弾いた。

宮池（初球からこんな甘い球かよ！！チックショー！！）

大場（なんでさっきの下村フォークが捕れて今のど真ん中直球が捕れないの！？）

鬼頭（まあそう固いことteeするな。）

鬼頭がまたど真ん中直球のサインをだす。大場は既にあきれて反論もしなかった。

ビュッ！！

（カキーン！）

大場『ぬおっ！！』

（バシッ！！！！！！）

『痛烈なピッチャーライナーでしたが見事にさばいて9回の裏の攻撃に移ります。』

大場（死ぬかと思った。）

鬼頭『さあ逆転すつぞ！！』

大場『なんか疲れたな……。今回のキャッチャーがこの調子じゃ大変だよ。ははは。』

『9回の裏、邦南高校の攻撃は、6番、ライト、氷室くん。』

一点を追う邦南高校、遂に最終回を迎える！！！！

No.44：バッターは松葉杖

『9回の裏の、邦南高校の攻撃は、6番、ライト、氷室くん。』

『ベスト8をかけた夏の高校野球愛知県大会5回戦も遂に9回の裏、邦南高校の攻撃です！！点差はわずかに一点差！！』

野中『おい！ケイさん！帰ってこいよ！邦南もまだまだわかんねえぞ！』

野中が携帯電話で川越に電話をする。

川越は8回の表に邦南の捕手副島がパスボール（記録は暴投）してしまったときに呆れて次のチームの球場外でやっているアップを観に行っていた。

そのころ川越は…

川越『は！？なんだって！？1点差で9回の裏！？…わかった。すぐに行く。』

また視線を切り替えて今度は邦南高校ベンチ

慶野『氷室ってここ最近なんか違うよな。』

大場『だな。昔はあんなやる気なかったのに最近じゃ練習への取り

組み方も変わったしな。』

慶野『4回戦も4打数4安打だったしね。』

大場『なんやかんやいってあいつが1番ここ最近成長したよな。』

氷室『副島さんのためにも…絶対にこの試合勝ちたい!!』

そのころベンチ裏医務室では…

副島『入ってこい。そこにいるんだろ。』

副島が医務室の空いている扉に向かって言った。(ちなみに医務室には副島一人しかいない。)

(コツ…コツ…コツ…)

足音が響く。

『ハハハ…。気づかれてましたか…。』

副島『どうした?そんな格好して。』

副島の目の前には邦南高校の制服を着た男が立っていた。その男は…
副島『西口…。いてもたってもいられなくなったか。』

この試合は地元のテレビに生放送されているので今の展開も副島は知っている。

西口『はい。自分のしたことはわかっているはずなんですけど…。
なんかダメなんです…。スタンドから応援するだけじゃ…。オレが
ベンチにはいったらみんなに迷惑かけるってわかってる。でも…』

副島『そんなことないぞ。』

西口『え…』

（カキーン！！！！）

『打球は三遊間を抜けてヒットになった！！同点、そして逆転を狙う邦南高校！！先頭の１年生氷室くんが今日初ヒットを放ち出塁しました！！』

『７番、レフト、木村くん。』

西口『そんなことないって…どういふことですか？』

（コン！）

『送りバントはきっちり決まった！！いいバントだ！！これで一打同点の場面になりました！！ワンナウト二塁！！！！』

副島『小宮が被害者でおまえが加害者。だけど小宮は気にしてなかったんだって、小宮の行動を見て思った。』

西口『え？』

『８番の藤武は三振！！！！！！これでツーアウト！！！！大峰明館高校、あとアウトひとつでベスト８進出！！！！』

『ここは…絶対に打つしかない…。』

邦南ナインが必死に願っている。

次の打者は9番、1年生の島谷涼太だ。

副島『今はその意味がわからなくてもあいつらと野球やってれば気づくよ。お前は大切なチームメイトの一人だってね。気にすんなよ。いつてこい。オレからも監督にお前の起用を進言する。』

西口『オレの起用？代打ですか？』

副島『違う。代走だ。小宮が出塁するまでに着替えてまってる。代打小宮だ。』

そう言つて副島は足を引きずりながらベンチに行き…

副島『監督。代打小宮です。代走の準備もできました。西口が今着替えています。』

小宮『拓磨くん！』

『西口か。早くしろ。小宮！松葉杖でも代打なら可能だよな？ルー尔的にも。』

小宮『はい!!』

『邦南高校、選手の変更をお知らせします。9番、セカンド、島谷涼くに代わりまして、代打、小宮くん。』

『おっとここで邦南高校の代打は小宮くん!!松葉杖を使いながら打席にたちます!!場面はツーアウト二塁!一打同点です!!!』

大峰明館サイドもタイムをとり松葉杖を使いながらの登場がオツケ!だということを確認した。

『プレイ!!!!!!』

小宮『拓磨くん…。今のキミなら僕の気持ち、きっと届くよね。』

9回裏ツーアウト!一打同点の場面で打席に松葉杖の小宮が入る!!

N o . 4 4 : バ ッ ター は 松 葉 杖 (後 書 き)

松葉杖で出場できるかは実際よくわかりませんがご了承ください？
(現実じゃたぶん無理だろう。)

感想待ってます？

N o . 4 5 : 走れ！小宮哲都！（前書き）

感動系？になったら嬉しいです？

No.45：走れ！小宮哲都！

代打に出た小宮は松葉杖だ。

前日の練習後に3回戦（愛農大名林戦）で死球をくらい痛めていた右足首を西口に暴行された際にさらに痛めてしまい（ヒビが入った）松葉杖になった。

打席での格好は、

バットを両手で持ち、左脇に片方の松葉杖、もう一方の松葉杖は打席のすぐ横に置いてある。

絶妙なバランス感覚。

ちなみに痛めている右足は浮かせている。

小宮（拓磨くん…。）

小宮は、あの時のことを思い出していた。

回想シーン←←

『ねえ！キミ！僕とキャッチボールしない！？』

家の近くの公園のブランコで一人で遊んでいた小宮（当時6才）に西口が話しかけてきた。

小宮『……。』

西口『ねえ！聞こえてる！？』

小宮はハッと顔をあげた。

小宮『ぼ…僕のこと…？』

西口『うん！もし暇なら一緒にキャッチボールしようよ！』

小宮『…キャッチボール？』

西口『キャッツ？なにそれ？キャッチボールだよ！』

小宮『…。なにそれ？なんで僕なの…？』

西口『いつもなら一緒にキャッチボールやってる男の子が今日はいないみたいなんだあ。だから今日は相手がいなくて暇なの！はい。これグローブ。』

小宮がグローブをはめてみる。

小宮『なにこれ。臭い。』

西口『そんなこと言うなよお！そのグローブ昨日手入れたばっかなんだから！』

小宮『ご、ごめん。』

西口『いくよー！それ！』

ビュッ！

小宮『うわあ！-！』

（バシッ！-！）

小宮は完全に怖がりながらもまぐれで捕球した。

西口『わぁ！キミうまいね！名前なんて言っの！？』

小宮『こ、こみや…てつと…』

小宮は少し照れながら言った。

なぜなら今まで幼稚園の先生以外に名前を聞かれたことなんてなかったからだ。

小宮は今まで一人も友達がいなく、性格も内気だった。

西口『コミヤ、テツト…。じゃあテツくんね！』

『全ては、あの時から始まった。親が死んで妹が病気になって…これまで幾度となく野球から手を離そうとした。だけど無理だった。それまでは野球をしてればどんなときにも西口拓磨がそばにいた。唯一の心の休め時が野球だった。』

“ だけど一瞬にしてその充実の時間が消え去った。 ”

『全てはあの女…赤崎明日翔の仕業だ。西口は真実を知らずに…ただただ小宮に暴力をふるった。』

今ンチ裏で着替えている西口も同じことを考えていた。

“ なぜ、オレは小宮を殴ってしまったのだろう…。 ”

“ もっと深く考えていれば赤崎明日翔にもだまされずに…昔と同じ最高のパートナーと最高の野球ができたかもしれないのに…。 ”

二人は野球の時ならほとんど考えることは同じだった。

プライベートですらお互いの考えていることはお見通しだった。いつも二人の笑い声が近所の町に弾んでいた。

西口は思った。

“なぜ…最高のパートナーを傷つけてしまったのだろう…。なぜ…
どうして…”

そんな言葉が頭をよぎる。

(ガチャっ！)

考えながらもベンチに入る。

そのとき…

『僕は今まで拓磨を恨んだことなんか一度もない。拓磨、むしろ僕は感謝してる。』

『何をだ？』

『決まってるじゃんか。あの時…キャッチボールに誘ってくれたこと。』

『お前は…このオレが憎くないのか？この1年…今までと手のひらひっくり返したようにお前にさんざん暴力ふるってきたこのオレを…。』

『うん！拓磨にどんなに殴られても、わかってたから。』

『…っ。』

『拓磨の中に昔の拓磨が見えてた。普通の人じゃ絶対にわからない

『ヘッドスライディングだ!!!!!!!!!!』

(ズザザザザザアアツツ!!!)

小宮『ハア…ハア…。…。ハア。ハア…。』

『セーフ!!セーフ!!』

西口『よっしゃあ!!!!!!!!!!』

大場『西口!代走だ!』

西口『はい!!』

(パチン!!!!)

小宮と西口がハイタッチをして西口がベースの上に立つ。

『ナイスバツティン!!!!!!!!!!』

『あとは任せたよ!』

端から見ればただのハイタッチだが、二人の間では会話が展開され

ていた。

昔のように。

『ピンチランナー、西口くん。』

『見とけよ。テツくん。あとはオレがホームベースを踏んでやる！』

西口が小宮の心に話しかけた。

小宮も応答する。

大場『あいつら。』

それは誰の目にも明らかだった。

二人が最高のパートナーだということが。

『一番、キャッチャー、鬼頭くん。』

遂に同点に追いついた邦南高校、二死一塁で打席に先ほどランニングホームランを放った鬼頭が向かう。

N o . 4 5 : 走れ！小宮哲都！（後書き）

感想待ってまーす？

No.46：共に上を目指す仲間

鬼頭『同点。そして逆転サヨナラ、next stageに進むのは俺達だ。』

飯尾『言ってくれるじゃん。このオレからそう易々と連打が打てるとでも？大峰明館のエースナンバーはこのオレだ。谷は控え投手だ。自分の実力をわきまえてから言いな。』

鬼頭『勘違いするなよ。』

飯尾『このヤロウ!!』

ビュッ!!

カッキーン!!

飯尾『え...。』

鬼頭『自惚れるなよ。オレのが格上だ。』

《 136km/h 》

『打球はライトへ!!!!!!!!!!!!!!』

(バン!)

鬼頭『くそっ！！ギリギリか！！』

『打球はライトフェンスダイレクト！！！！！！！！あと少し高ければホームランという当たり！！！！！！！！一塁ランナーはツアアウトなので好スタートを切っている！！』

飯尾『バ、バックホームだ！！』

西口『オレが！オレがホームベースを踏んで、この試合を終わらせてやる！！』

『ライトの宮池もボールまで素早く追い付いた！！一塁ランナーの西口は三塁も回る！！セカンド笥がボールを繋ぐ！！いい連携だ！！バックホームする！！』

西口『どりゃああ！！』

笥『間に合えっ！！』

『西口はヘッドスライディング！！！！！！！！！！』

大場『！！！！！！！！！！』

副島『頼む！！』

氷室『！？！？』

鬼頭『セーフか！？』

谷
:
!
!
!
!
!

宮池「アウトか!？」

「タイミングはほぼ同時――！どっちになってもおかしくないぞ――！はたして主審吉村の判定は――！？」

セーフ!!セーフ!!ゲームセット!!!!!!!!!!

西口「よっしやああ！！！！！！！！」

小宮「ナイスラン!!! 拓磨!!!」

西口『おう!』

(パチン!!!)

二人はちっちゃかった時のように、人前でハイタッチをした。

谷クソ…。

飯尾 「ちくしよおおおおお！」

『ゲーム!!!』

『『『ありがとうございます!!!』』』

鬼頭『おい!』

鬼頭が大峰明館のエース飯尾に声をかけた。

飯尾『なんだよ。勝者が敗者に話しかけるなんて、マナー違反だろ。』

鬼頭『まあそう言っなよ。お前には、ここで野球を辞めてほしくなくてな。』

飯尾『突然どうした?』

鬼頭『最後の1球、オレは確実にスタンドに放り込んだつもりだった。だけど結果はフェンス直撃だ。』

飯尾『フェンス直の時点でオレの負けだよ。』

鬼頭『お前のストレート…もっともつと磨けば、プロでも通用するはずだ。だから…』

飯尾『プロって…。そんな夢中坊の頃にとっくに捨てたよ。』

鬼頭『諦めんなよ。おれだって1度は諦めた。だけどまだ心のどこかでプロを目指している自分がいる。』

飯尾『お前…本気か? 邦南だろ。』

鬼頭『ああ。本気だ。まあ高卒から行く気はねえけどな。大学からオレは行くつもりだ。』

飯尾『なんで俺なんだ?』

鬼頭『オレはお前に…可能性を感じた。俺とプロ目指さねえか?』

飯尾『ハハハ…。なんかな…お前がそんなこと言ってこなきゃ、明

日から実家の魚屋を継ごうと思ってたのに。』

鬼頭『ってことは!』

飯尾『いいよ!!俺ももう一回、自分の可能性に挑戦してみてえし。
大学でまた会おう!』

鬼頭『おう!!!』

愛知県公立No.1進学校の県立邦南高校、5回戦の大峰明館高校
を破り、ベスト8進出!!!!!!

大峰明館	—
0	0
0	0
0	3
0	0
0	0
2	1
2	1
2	0
—	—
6	5

N o . 4 7 : 準々決勝へ向けて（前書き）

準々決勝が始まります？

No.47：準々決勝へ向けて

大峰明館との熱戦の次の日、
鬼頭が初めて練習に現れた。

大場『今から鬼頭さんに自分の過去のことについて話してもらいます。実力なら他の誰にも劣っていない人ですが皆さんはこの人がこれからスタメンに名を連ねてもいいか判断してください。』

鬼頭『えー…知っている人もいるかもしれませんが、3年E組の鬼頭 博行ひろゆきです。出身中学は大阪の南阪中学つてところです。』

副島『な…南阪中学つて…あのS・6の出身校のか!?!』

氷室『ほんとつすか!?!』

松坂『マジだったのかよ…。』

鬼頭『あーはい…。3年前までは今のS・6にmeを加えてS・7つて言われてました。だけど自分の進路については公表しなかったんでマスコミもmeが今どこにいるかはわからないはずです。ましてや愛知県にいるなんて。』

島谷涼『すげえ…。次元が違う…。』

鬼頭『それで中学三年の時、みんなと一緒に中学硬式野球日本代表に選出されて…。』

大場『先輩。そこまで話す必要があるんですか?そこから先は言わ

ないほうが…。」

鬼頭『シャラップ。俺のtalkの邪魔をするな。』

大場『…。』

鬼頭『そこから慣れない硬式ボールで連戦連投。お陰で俺の肘はボロボロ。あの頃は俺もまだガキだった。その時はまだ世界大会には連投禁止みたいな決まりはなかった。先のことなんて考えもしてなかった。そしてだ。遂に世界大会決勝。相手はアメリカ選抜。肘にかなりの痛みがあるなかでもオレは世界一になりたい一心で投げ続けた。野球の本場アメリカの高校生だ。当然日本人のやつらとは体格もめつきも全然違う。厳しく攻めていかなきゃ当然勝てやしない。球数も当然のごとく増えていく。そして世界一まであと1球。オレは投げきった。でもな。最後の1球を全力で投げた瞬間。』

そう言って鬼頭は右肘を見せてきた。

副島『それって…。』

鬼頭『手術の跡だ。』

大場『はあ…。』

鬼頭『手術って言うてもただの手術じゃあなかった。中3の夏から2年の冬まで、2年半で合計4回…肘にメスをいれた。』

木村『なんだって!?!』

島谷倫『よ…4回…。』

鬼頭『そして今に至る。1ヶ月前にやっと投げ始められたところだ。まあキャッチボールだけだな。』

そして鬼頭はその後話も続けた。

鬼頭『これで俺の話は終わりだ。』

大場『みんな、この人がスタメンでもいいか？』

するとみんなにつこりした。

副島『いいよ！お前が苦労人なのは分かったし、俺もそういつやつ嫌いじゃない！』

キャプテンの副島が真っ先に発言した。

木村『俺も。』

慶野『同感。』

島谷倫『もちろん。』

島谷涼『よろしく頼むよ。』

氷室『はいはい。』

松坂『了解だよ。』

藤武『オレだって同感さ！』

小宮『先輩の言うことなら従いますよ！』

西口『よろしくです！』

副島『ただどね、ヒロはまだスローイングが完全じゃない。できれば

ばファーストか外野を守らせたい。だけどファーストで使うのは勿体ない。ライトを守ってもらおうと思ってる。佑介、ファーストの練習やつとけ。藤武は控えに回ってもらう。』

氷室『はいよ。』

藤武『わかってるって!!』

(ピリリリリリ!!)

副島の携帯が鳴る。

副島『はい。もしもし。…はい。はい。わかりました。伝えておきます。…はい。では。』

副島『みんな、いま片野監督(邦南高校監督・名前は初登場)から連絡があつた。』

一同『!!!!!!』

副島『次の相手は…上社西だ。』

大場『強打の上社西が来たか…。堅守の大峰明館に似たタイプの豊田学園が来たほうが正直やり易かつたな。』

副島『同感だな。上社西には韓国人の三つ子クリーンナップがいるだろ。』

大場『そいつら3人はかなりの驚異ですね。うちらもどちらかといったら打のチームなんで打ち勝つしかないか…。』

鬼頭『おい!アホか!!今から明日へ向けて守備の猛練習だ!!監督が来るまでオレがノックしてやる!!』

「ちよつと待て！！！！！！！！」

横から声がした。

野中「オレが打つてやる。」

大場「野中のおっちゃん」。

野球部では邦南高校野球部の熱烈なファンである野中の存在は有名だ。

野中「そんでもってコイツも。」

野中の横には……

川越「お前らとは初めましてだな。おれの名前は川越っていうんだ。大峰明館戦、見てたよ。まさか逆転するなんてな。感動しちまった。だからその礼としてバット振ってやる。」

野中『お前ら、この人はすごい人なんだぞ。享神が甲子園初出場で初優勝したときのエースで4番の人だ。』

副島『じゃあす!!!!!!!!!!!!!!』

その後、小宮を除く12人が6人ずつに分かれ、ノックを受けた。

8時間後:

『もう9時だよ…』

「死ぬかと思った……」

『完全に殺人ノックだ…』
『てか明日準々決勝だよ…』

午後1時から9時まで8時間ノックを受けまくった。

そして次の日…

先攻・上社西高校

1：3 B：正親おつき
2：R F：岩見
3：C F：朴昌龍バクチャンヨン
4：C：朴昌秀バクチャンス
5：P：朴昌圭バクチャンギュ
6：L F：野村
7：1 B：岸
8：S S：榊原
9：2 B：小山

後攻・邦南高校

1：R F：鬼頭
2：C F：慶野
3：P：大場
4：C：西口
5：1 B：氷室

N o . 4 7 : 準々決勝へ向けて（後書き）

感想お願いします m (. | .) m

No.48:ちょっと計算外

『1回の表、上社西高校の攻撃は、1番、サード、正親おじぎくん。』

西口（この打線…全員打力があるがそのなかでも特に要注意人物なのは…1番、3・4・5・6番…）

大場『ふーっ。要注意人物一人目か。』

西口（まずは初球…。絶対にストライクが欲しい。）

大場が振りかぶる。
そして投げる。

ビュッ！！

ズバーン！

『ボール！！！！』

高めに浮いた投げた瞬間ボールと分かる球。

西口（この人は早めに打ち取りたい…。前の試合を見る限りカット

の技術は並みじゃない。カウント悪くするとすぐ歩かれる。)

2球目

ズバーン!

『ボール!!』

外角に決まったストレート。

しかし判定はボール。

大場(今のがボールか…。)

西口(今日の主審は辛い…。いまのコースをボールにされると困るぜ…。)

3球目:

ビュッ!!

大場『あ!!』

ググッ!

バン!

大場の3球目はカーブ。

しかし左打者の正親の後ろに抜けてしまった。

これで初回の先頭打者正親に対しスリーボール。

西口(こいつを出すわけにはいかない…。しかも先頭バッター。初

回。何気にかなり大事な場面だ。）

四球目

ビュッ！！

バン！

今度はショートバウンドになってしまった。

『フォアボール！！先頭バッターの正親くんがストレートのフォアボールで出塁です。』

大場『くそつ。』

西口（今日の大場さんはあんまり球がキテないな。それに加えて審判もからいし…ちょっと想定外だ。）

No.49：さらに計算外

パラ…パラ…パラ…

鬼頭『雨…？』

慶野『空はそこまで曇りつて訳でもないし…。』

西口（通り雨だ。今日、朝？ズバーン！（朝のニュース番組）で
天気お姉さんの江本^{えもと} 美緒^{みお}ちゃんが今日は通り雨の可能性があり
しょうって言ってた。）

『2番、ライト、岩見くん。』

西口（コイツは強力上社西打線で唯一の繋ぎ役と考えていい。どう
せバントか進塁打、こいつの打力じゃ長打は考えられない。）

岩見が右バッターボックスに立つ。
すでにバントの構えをしている。

岩見（いきなりやつちゃう？）
正親（しかけるか。）

ガッ！

一塁ランナーの正親おつねが大きなリードをとる。

大場（でかいな…。こりゃ刺せるぞ。）

大場はフィールディングや牽制などにはかなりのものを持っている。

ジー…

大場がランナーを焦らす。

ランナー正親の呼吸を変える。

そこから…

ビュッ！！

ザッバーン！

『セーフ！！』

正親（牽制上手いな…。いつもみたいに余裕ぶっこいてたらアウトになってたかも。てかいきなり速い牽制か。まずは遅い牽制で様子を見てくると思ってたんだがな。まあいきなり速い牽制だったから次は勝負だな。）

正親がリードをとる。

大場（よし。さっきより一歩くらい小さくなった。盗塁はない…。）
正親（とか勝手に思ってくれたらラッキー♪）

大場がセツトポジションから足をあげる。

『ランナー走った!!』

大場（マジで!?)

間に合わず打者に投げてしまう。

岩見（先頭バッターをストレートのフォアボール。そしていまボクはバントの構え。そして正親がピッチャーを揺さぶる。）

回想シーン←←

金丸（かねまる：上社西高校監督）

『お前ら、いいか？邦南は俺らと同じ打のチームだ。守備は決して得意じゃない。だが、エースの子、それから背番号12の今大会途中からサイドスローに変えた子、この二枚は非常にいいピッチャーだ。だがな…ここにきて背番号12の子が5回戦で松葉杖だった。つまり相手はいま一枚しかピッチャーがいない。そう、エースの子は大場っていうんだけどな、そいつは中学のとき硬式野球日本代表に選出されている。しかもその時もエースとして。いいか？だがその大場くんも今大会の防御率はかなり悪い。なぜか。そう、彼は序盤に失点を重ねてしまう典型的なスロースターだからだ。だから今日は特に序盤にとれるだけとおきたい。』

そして…

金丸『おい！岩見！お前に話がある。今日はまずほぼ百パーセント正親が先頭打者で出る。そうなたらお前の仕事だ。お前はバントの構えをしる。まあスロースターターの大場くんのことだ。バントは初球でやらせてくる。アウトが欲しいはずだからな。…でだ。ここからが本題だ。一塁ランナーの正親が揺さぶりをかける。牽制とかをはさんでくるだろう。そしてらもう序盤の大場くんはバッターに集中できてない。そしてらな…』

回想シーン終わり

『置きにきたストレート一本狙い！』

カッキン！

『バスターエンドランだ！！打球はライト線に落ちる落ちる！フェアだ！一塁ランナーの正親はもう三塁到達！！そして三塁も回る回る！！打ったバッターの岩見は二塁へ！！先制しました！！1回の表上社西高校！！初回からいきなりバスターエンドランを仕掛けてきました！！！！』

西口（クソ…。ここでいきなりバスターエンドランか…。完全に頭になかった。でも…）

パラ…パラ…パラパラパラ

西口（…！？）

大場（雨が…）

鬼頭（強くなってきた…。）

西口（空が…黒くなってきた…。）

松坂（こりゃ本格的に降るんじゃないか？）

西口（ここでの悪天候はさらに計算外だ…。江本美緒ちゃん…天気予報…しっかりしてよ…。）

名林戦の時のような雨が襲うか！？

No.50：祝！50回記念！～過去篇～（前書き）

今回は50回記念ということで過去篇をやらせてもらいます？

是非読んでください？

ちなみに時は小宮たちが中学三年生のときの全国中学生硬式野球大会決勝です？（1年前）

No.50：祝！50回記念！～過去篇～

“堂金！堂金！”
どうがね

『7回の裏、名古屋東ブラックシャークの攻撃は、1番、センター、
多賀谷くん。』
たかや

多賀谷『クソったれ…。』

（バン！）

『ストライク！ワン！』

（バン！ブン！）

『ストライク！ツー！』

（バン！）

『ストライク！バッターアウト！』

勾城『だれか…コイツを打ってくれ…。』
うづき

『2番、シヨート、岩栗くん。』
いわくり

堂金（はあ。つまんねえな。これで決勝かよ。）

ビュッ！！

ボコッ！！

『デッドボール！』

勾城『よし…』

堂金（最後にちよつとくらい遊んでやるよ。まあウイニングショットを封印してる時点で軽く遊んでるけど。）

『3番、ライト、かめまる亀丸くん。』

亀丸（コイツ…人間の投げる球のキレじゃねえ…。）

堂金（コイツが全国大会決勝の3番打者？やっぱ大したことねえ。中学野球なんて。完全に俺のボールに自信喪失してんじゃない。）

（ズバーン！）

『ストライク！ワン！』

《 143 km/h 》

小宮『ここにきて140km/hオーバーか…』
西口『コイツは完全に次元が違う…。』

堂金（しょーがねーから罫に出してやるよ。）

…

…

（バン！！）
『フォアボール！！』

勾城『よっしゃあ！！ワンナウト―罫！！』

『4番、サード、勾城くん。』

小宮『勾城！！打てよ！！』

堂金（歩かせるか。相手がチャンスになってちよつと期待したところを俺の力で粉碎するのも面白いし。）

…

…

（ボール！！フォアボール！！）

小宮『点差は二点。絶対に打ってやる！』

『5番、ピッチャー、小宮くん。』

堂金（お前らがこの俺を打てるわけないだろ。人生で1度も負け投手になったことないのだからな。）

（バン！！ブン！！）
『ストライク！』

《144km/h》

小宮『速すぎる…。でも…打たなきゃ…打たなきゃ。』

（バシーン！）
『ストライク！ツー！』

（バコン！）
『ストライク！バッターアウト！』
《145km/h》

多賀谷『まだ…まだだ…。』

『6番、キャッチャー、西口くん。』

堂金（あーあ。二点リードの最終回。ツーアウト満塁。こんなしびれる場面なのにバッターが背番号12かよ。）

ちなみに西口は名古屋東ブラックシャークでは背番号12だ。

（バン！バン！）

『ストライク！ワン！』

（ボコン！）

『ストライク！ツー！』

西口（くそっ…くそっ…）

西口は堂金の出す、打者を完全に威圧するオーラに圧倒されていた。

堂金（お前らはタイムリーでも希望してるのかもしれない…）

ビュッ…！

西口『クソオーツ…！』

（バン！）

西口は空振りした。

《 146 km/h 》

堂金『これがお前らの現実だ。』

『ストライク！バッターアウト！ゲームセット！』

名古屋東ブラックシャークは、全国中学生硬式野球大会決勝で堂金率いる静岡オーシャンズにノーヒットノーランで敗北を喫した。（堂金が最後に手を抜かなければ恐らく完全試合。）

名古屋東ブラックシャークのナインにこの敗北は深く心に刻まれている…。

No.50：祝！50回記念！～過去篇～（後書き）

堂金いくらなんでも球速すぎましたかね？

感想お願いしますm（・）m

No.51：お前の不調は俺らがカバーする！

『3番、センター、朴昌龍パクチャンヨンくん。』

西口（まだ一点とられただけ、焦る場面じゃない。だけどここどこいつらクリーンナップトリオか…。上社西はノーシードだがこいつら韓国人の三つ子で5試合で51打点だ…。）

大場（攻めよう。）

西口（しまだ初回だけど厳しいコースにいくぞ。）

大場（韓国人3人全員右打者。俺は左打者より右打者の方が得意だ。そのぶんラッキーだが…。ひとつ問題がある…。今日は明らかに調子が悪い…。構えたところにいく保証は全くない…。）

キャッチャーの西口が右打者の朴昌龍のインコースに構える。

ピッチャーの大場はふーっと息をはいた。

投球モーションに入る。

大場『思ったところに行きやがれ！！！！！！』

朴昌龍（！！！！！！！！！！）

（スバン！）

西口（くそっ。初球でストライクがほしかった…。）

ボールは高めに浮いた。

『ボール！！！！』

西口（いつもの大場さんなら初球からこんなボールはまずない。小宮もまだ投げられない。今日も大場さんに頑張ってもらっしかないけど…。）

大場がまたセットポジションに入る。

大場『ふうつ。落ち着け。落ち着けよ。調子悪いからってなんだってんだ。』

大場（下半身を意識して、あと大事なのは…）

（腕を思いっきり。振りきることだ！）

ランナー走った！！

「おっとここで二塁ランナー岩見くん！スタートを切った！！！！！」

(バシューッン！)

大場のボールはインローにキマった。）

☞ ストライク！ ☞

西口（ランナーのキミは意表をついたかもしれないけどね。）

西口が三壘へスローイングをする。

ビュッ！！

(パン！)

「タッチはどうだ!？」

「アウト!!!!!!!!!!!!!!」

『アウトだ!! キャッチャー西口がこの場面では考えもしなかった三盗を刺しました!!』

西口『そんなこと想定内だよ。』

大場『ナイス西口!!』

西口『大場さんが調子悪いぶんは俺らでカバーします!! だから大場さんは一人で野球しないでくださいね!』

大場『おう! 頼んだぜ!』

松坂『翔真! 頼りないかもしれないけどさ、いざとなったら頼ってくれよ?』

副島『ああ! どんな打球きたって絶対体で止めてやるよ!』

島谷倫『そうだぞ! 打たせてとらないと俺らもつまんねえだろ! もっと楽にいきましょう!』

大場『ああ! ありがとう! お前ら! 今日甘いボールも多くなってお前らの仕事が増えるかもしれないけど、頼むぜ!』

『おう! そうじゃなきゃ楽しくねえよ!』

大場(このチーム…去年とは比べ物にならないな。去年だったらこ

の場面で俺に話しかけてくれるやつなんていないだろう。みんな進化してる。だけど俺がここで自己満足してたらダメだ。みんな…)

大場『絶対勝つぞ!!!!!!!!!!!!!!』

『よっしゃあ!』

No.52:ドラゴンと呼ばれる男・青龍寺翔牙・（前書き）

正親 おつぎ

や せいらゆうじ
青龍寺

という名前はあるみたい？

No.52:ドラゴンと呼ばれる男・青龍寺翔牙・

(カキーン！)

『強い打球だがショート島の島谷倫曉くん、うまくさばいてスリーアウトチェンジ！一回の表上社西高校の攻撃は一点先制です。』

大場『ふう。やっぱりあの韓国人のやつらはいい打球飛ばすな。』

西口『たしかに。内角の直球にもうまく対応されてますし。でも厄介なのはあの1番バッター……。正親おつぎってやつです。アイツがこの試合、色々面倒な打者になりそうです。』

大場『まあアイツの得意コースなら知ってるよ。中学の頃結構対決したからさ。ただ、今日はあんま思ったところに球がいかなえから無駄な情報ってやつだ。』

『1回の裏、邦南高校の攻撃は、1番、ライト、鬼頭くん。』

鬼頭(先発右腕の朴パク昌圭チャンギョ、覚えてるよ。世界大会1回戦で韓国をコールドで倒したときの韓国の先発だったやつだ。コイツの中学までの持ち球はストレートとスライダーのみ。それもスライダーはドラゴンには到底及ばない。)

その頃、バックネット裏で座っている享神の桜沢と余語。今日は二人で偵察に来ている。

ちなみに邦南ナイン以外は鬼頭が野球を再開したことは知らない。

桜沢『いやあ。懐かしいな。』

余語『何がだ？』

桜沢『上社西のピッチャーの朴昌圭。世界大会でフルボッコにしてやったのにわざわざ日本に来て野球やってるとはな。』

余語『あのピッチャーも世界大会に出場してたのか。』

『おい！』

余語『…！？、え…え…』

桜沢『ド、ド、ド、ドラゴン…！』

余語『去年の夏、決勝で俺らを1安打17奪三振完封で全国制覇…春のセンバツは部員の不祥事で出場できなかったが…今年も全国制覇本命の大阪の名門、啓稜学院けいりやうがくいんのエースで4番の青龍寺せいりゅうじ翔牙しょうご…。なんでこんなところに…！？』

青龍寺『あ？知らねーな。誰だオマエ。ザコが俺に口聞くんじゃねえよ。殺されてえのか。』

余語『くっ…。』

桜沢『おいおい…。相変わらずだな。ドラゴン。もうちょっと気使ってやれよ。かわいいそつだろ。』

青龍寺『サク。オマエずいぶんと真面目なやつになっちまったじゃねえか。なあ！』

（ガンっ！）

青龍寺が椅子を蹴った。
回りの人も驚いている。

桜沢『おいおい……。どうしたんだよ……。』

青龍寺『帰る。じゃーな。』

そう言っつて青龍寺は帰ってしまった。

余語『あいつ……初めて間近で見たけど、あんなに荒れたやつなんだな。』

桜沢『最近は特にヤバイらしい。なんたつてあいつ一人で春のセンバツをもぎ取ったのに仲間の不祥事で出場できなくて……その不祥事を起こしたやつはドラゴンにシバかれたらしい。まあ表には出てないがな。』

No.53：厄介なタイプ（前書き）

今日は秋季リーグ一次予選で愛知の名門、中京大中京と試合をしました！

あつ、申し遅れましたが、自分は現役高校球児です？
ちなみに一年生です？

野球は小学校2年生から始めました？

中京大中京との試合…

中京	—	1	1	4	2	1	2	5	—	1	6
自軍	—	0	1	2	0	0	0	0	—	3	

見ての通り、七回コールドです？

いやぁ…

自分は2番キャッチャーでスタメンだったんですが、

飛ばしますね〜中京打線…

てか俺らの先発ピッチャーは一年生左腕だったんですけど7イニングを一人で投げ抜いて四死球の数…まさかの、16個？？

やばい。制球難過ぎる？？

特に今日はやばかった…
もはやピッチングじゃない

自分の高校は愛知の中ではわりと進学校？
ちなみに名古屋市立です？

中京大中京との試合
感想は、楽しかった？？？

てか、キャッチャーやってる人に質問？なんですけど、

左ピッチャーのインコース（右打者）を捕球するとき、クロスファ
イヤーになるじゃないですか。

そのとき球威を潰すように思いっきり捕球するんですけど、そのと
き左手の親指が痛くなりませんか？

単に自分のキャッチングが下手なだけかと思いますが…

俺もなる？

とか

いや、俺はいたくなっただことないよ？

とかある人がいたら、回答をお願いしますm（・・）m

あつ…

なんか大敗にイライラしてて長文になってしまいました…m（・・）
（m

ごめんなさい？

では、本文へ！

No.53：厄介なタイプ

鬼頭（初球はほぼ100%真っ直ぐ。コイツの制球難はそう簡単には改善されてないはず。）

初球、

ビュッ！！

鬼頭（予想通り！外角ストレート！）

ゴグッ！

鬼頭（！？）

（カン！）

『打球はセカンドへ！セカンドの小山が軽快にさばいてワンナウト
！』

鬼頭『くそっ！！ツーシームか！なかなか厄介なボール持ってやが
んな……。』

（カキン！）

『2番の慶野もショートゴロに打ち取られ、これでツーアウト！2
球でツーアウトを取りました、上社西高校のエース朴昌圭。』

『3番、ピッチャー、大場くん。』

大場『2球でツーアウト…。少しばかり粘るようにしないと相手のリズムになっちまう。鬼頭さんが打ち損じたのはツーシームって言うた。そして今の文哉が打ち取られたのも恐らくツーシーム。ツーシームが生命線…。だったらその生命線のツーシームが来る前に…』

『叩く!』

(パキンッ!)

『大きいぞ!入るか!?入るか!?』

ボサッ!

『入ったーっ!3番エースの大場の今大会4本目となる本塁打が飛び出した!これで同点!邦南高校、取られたあとすぐに同点に追い付きました!』

『4番、キャッチャー、西口くん。』

朴昌圭『今ノアイツ、狙ッテタノ力？』

朴昌秀『マチガイナイ。シヨキユウカラアノスイングダカラナ。ヤマヲハツテタノハマチガイナイ。』

朴昌圭『アイツダケハ、次以降モ要注意シナキヤナ。』

朴昌秀『アア。オマエノストレートヲハツミデウツンダカラタイシタモノダ。オマエノクセダマハソウカンタンニハジャストミートデキナイ。トニカクキリカエ口。』

朴昌圭『アア。心配スルナ。』

…

…

…

『ボール!!!カウントツースリー!』

西口「俺にも早打ちさせてくると思ったら、結構緻密に攻めてくるな…。次はなんだ…？今まではオールストレートだ。そろそろ決め球を見せてきもいい頃だが。」

ビュッ！！

西口「ストレート！」

ギュー！

ゴン！！

西口「くそつ。手がしびれるぜ。」

鬼頭「なにも打たせて取る術はツーシームだけじゃないってか。」

西口「高速シュート…。それもかなり速球に近いスピードだ…。」

副島「こういうタイプが1番厄介かもね。この手のピッチャーは安定感抜群だ。」

鬼頭「3年前からだいぶ投球スタイルを変えてきたな。めんどくさ

いタイプのピッチャーになりやがって。』

慶野『打たせて取るタイプ…上社西の打線もリズムがいい。打撃がいいのは果たしてこのリズムがいいところにあるんじゃないか。』
大場『それもあるだろうな。守りから攻撃にリズムを作る。そういうチームだろう。』

パラ…パラパラ…パラパラパラ…

大場（まっ。雨の試合はもう経験済みだ。その点で若干有利なのは俺らだ。）

準決勝を懸けた対決、
邦南VS上社西

邦南は天気を味方につけることができるかー！？

N o . 5 3 : 厄介なタイプ（後書き）

感想お願いします？

No.54：大乱調…どうすりゃいいんだ！！

『2回の表、上社西高校の攻撃は、5番、ピッチャー、朴昌圭くん。』

『さあここで韓国三つ子クリーンナップの5番、朴昌圭が打席に入ります！このトリオの中で1番の長打力を誇る打者です！』

（バン！！）

『ボール！！ツー！！』

野中『先頭バッターにボール先行か。球も走ってない上に、コントロールも定まらない。』

川越『しかも相手が強打の上社西だからな。ボール先行で自分を苦しめてそのあとストライク欲しさに球を置きにいつて長打なんかくらう、つてのは避けたいが…。』

野中『こういうときにバックがピッチャーを助けられるといいんだが…邦南の守備力じゃなんともな…。』

川越『5回戦の大峰明館戦では大場がバックを引っ張ってなんとか勝った。今度はバックがピッチャーを助ける番だ。』

カキーン！

『大きい！打球はかなりあがった！レフトの木村くん、落下地点には入れるか！？』

『風が強い…！ああ！！捕ることができない！！風に流された打球を捕球することが出来なかった！！打ったバッターは三塁へ！スリーベースヒット！！！！！！』

大場（…）

川越『今のはなんとか捕ってピッチャーを助けたかったな…』

野中『ああ…。この回、終わるのはまだまだ長そうだ。』

『6番、レフト、野村くん。』

『さあここで今大会のラッキーボーイ、4回戦と5回線で二試合連続でサヨナラタイムリーを放っているチャンスに強い野村がバッターボックスに入ります！』

西口（ノーアウト三塁。一点は仕方ない。四球でランナー溜めるの

は勘弁…。)

大場(正直今のは捕って欲しかった…。道のりはまだまだ険しいぜ…。)

野村(ピッチャーは前の試合と比べたら球威は大分ない。球速も前の試合より10km/hほど落ちている。つまり、苦しんでいる。だから…粘るべきだ。この回、まだまだ何点でもいける。)

(バン!!)
『ボール!!…!』

西口(落ち着いて…翔真くん。)

(バン!!)
『ボール!!…ツー!』

西口(まずい。この流れは…)

ビュッ!!

野村(外角やや真ん中、ストレート!)

カキーン!!

『打球は右中間を割る!!…!』

野村『よっしゃあ!』

『三塁ランナーはもちろんホームイン! 2回表、上社西高校、ノーアウト三塁から野村の右中間へのタイムリーツーベースで一点勝ち越し!! 2-1、取られたあとすぐに突き放しました!!』

大場(くそ…。甘くなっちまった。)

西口(ここにきてさらに大場さんが若干自分を見失ってる…。さらにいつもよりリリースポイントが早くなって、球が高めに、そしてバッターに見切られやすくなった…。くそ…。他にピッチャーはいないか…?)

西口が邦南のベンチを見る。

小宮と目が合うが、小宮は左足首を故障している。

西口(いるわけねえか…。そもそも小宮をあーしたのはオレだ…。だったらせめて俺が今の代場さんをうまくリードするしかない…。悪いのはオレだ。だけど…。どうやって…。今の代場さんをリードすればいいのか…。)

『7番、ファースト、岸くん。』

西口(ここから2番の岩見まで左打者が続く…。大場さんは左投手だが左打者のほうが被打率が高い…。くそ…。くそ…。とりあえず…。アウトロー真っ直ぐ…。…。)

ビュッ！！

カキーン！

『打球はセンターへ！！7番岸も繋いでノーアウト一三塁！』

野中『今のも打球が痛烈すぎて三塁ランナーが還ってこれなかった。序盤だがこりゃ本格的にやばいね。』

川越『もはや下位打線にもいとも簡単に打たれてるし。』

西口（今のは注文通りのアウトロー真っ直ぐ…。それを7番バッターにあっさりセンター返しされる…。もうどうすりゃいいんだ！！）

大場（西口…悪い…。）

『8番、シヨート、なかきはら榊原くん。』

……

……

……

バンー！！

『ボール！！フォアボール！』

『なんとストレートのフォアボール！ピッチャー大場くん、制球が定まりません！！』

川越『8番バッターにストレートのフォアボール…。』

野中『しかもまだノーアウト。さらには満塁だ。』

『9番、セカンド、小山^{こやま}くん。』

ビュッ！！

『デッドボール！押し出しのデッドボール！これでさらに一点を追加して3 - 1。』

西口（8番、9番に連続四死球…。）

『1番、サード、正親くん。』

西口（ここでこの1番バッターか…。）

片野（邦南高校監督）

『伝令じゃ。』

『さあここで邦南高校、一回目の守備のタイムです。』

西口がマウンドへ向かう。

西口（どうすりゃいいんだ…。）

雨も降る、大場の調子も最悪。
邦南は準決勝にいけるのか…？

No.55:ピッチャーは愉快なヤツ(前書き)

今回の話は結構自分的に面白いです?(笑)

是非読んでください?

No.55:ピッチャーは愉快なヤツ

『さあここで邦南高校、一回目の守備のタイムです。内野陣が集まります。』

大場「悪い…。言い訳したくねえけど…今日、全然ボールが走ってくれねえ…。」

西口「ですね…。審判もいつもより判定が辛いですし…。結構厳しいですね…。」

副島「そんな弱気で良いのか！？審判なんか関係ねえ！自分を信じ
てしっかり腕振りや良いじゃんか！！」

島谷倫「そうだ！！ど真ん中でもいい！俺らが守ってやる！！」

「『そんなこと、できたら今こんなに苦労してねえんだよ……！！！！！！！！！！』自分を信じてすっかり腕振りや良い？簡単に言うんじゃないよ！腕振るのなんかいつも意識してやってる！」

も今日はいくら振ったって球が思い通りにいかねえんだっつーの！！ど真ん中でもいい！？なめてんのか！？相手は上社西の打線だぞ！？甘い球いって長打食らってるからこうなってるんだろ！？オマエら…勝手すぎるぜ…。自分達は出して守ってもくれねえくせして…いつも俺一人我慢して…踏ん張って…。『』『』

大場が今の二人の言葉に対して、今までのものがすべて吹っ切れたように言った。

ポイツ！

大場が持っていたボールを遊撃手の島谷倫晁に渡した。

松坂『ど…どうした？』

大場『そこまで言うならお前が好きに投げてくれ。俺んどこに打たせてくれや。守ってやるから…。』

島谷倫『え、お…おい！』

『すみません。』

横から声が聞こえた。

氷室『ぼ、ぼく…前からずっとピッチャーがやりたかったんですけど、投げていいですか？』

松坂『…は？』

副島『フオ…？』

大場『……………？』

島谷倫『な、な、なにい！？』

西口『クスッ。』

氷室『あゝ、ダメですか…？』

松坂『ダ、ダメに決まってるだろ！俺らの高校野球生活が懸かってんだぞ！』

西口『良いんじゃないんですか？』

松坂『え…？』

西口『打たれると思いますが。』

副島『いや…まずストライク入らないだろ…。』

西口『その可能性は低いでしょう。コイツ、キャッチボールとか見る限り、案外コントロール良いんですよ。どうせ誰が投げたってストライクなら打たれるなら、氷室でオツケーっしょ。』

大場『賛成。』

島谷倫『ちょ…エースのお前がどうしたんだよ！』

副島『いいんじゃないですか？打球が飛んできたほうが試合を楽しめるし。』

大場（何が楽しめるだ。人の苦勞も知らずに綺麗事ばっかいいやつて。）

西口『島谷さんもいいですよね？』

島谷倫『く…ああ。』

西口『松坂さんは？』

松坂『みんながそうなら…俺も…。』

西口『よし！満場一致でピッチャーは氷室に交代！！』

『邦南高校、シートの変更をお知らせします。』

- - 守備位置の変更 - - -

大場：1 ↓ 3

氷室：3 ↓ 1

- - - - -

慶野『はあ！？！？！？！？！？！』

木村『氷室がピッチャー！？！？！？！？！』

鬼頭『Surprised！！』

西口『変化球は持つてるか？』

氷室『うんっ！コレッ！』

そう言つて握りを見せてきた。
カーブの握りだ。

西口『カーブか。とりあえず投球練習の7球中2球は試してみる。
それからカーブのサインを実際に出すか出さないか考える。まあ、
基本的にストレートしか要求しない。』

氷室『ちよつとちよつとちよつと！！勝手に話進めないでよ！これ、
カーブじゃないよ！』

西口『…は？どうみたってカーブだろ。その握りは…じゃあなん
の球種なんだ？』

氷室『フフフ…。コレはね、コレはね…。聞いてビックリしないで
ね。』

西口『さっさと喋れ。』

氷室『このボールの名前は、【Y・H・LOVE ZUKKY
UN・ボール】って言うんだよ！』

西口『ワイ・エイチ・ラブ　ズッキュン・ボール？』

氷室『そう。自作のオリジナル変化球さ。ちなみにY・Hってのは
氷室　佑介ゆうすけのイニシャルを取ってるんだからね。』

西口は口を大きく開けてポツカーンとしている。

氷室『じゃ、投球練習しよつか。』

西口『もう。呆れてものが言えないぜ。まあそのなんとかボールは
正直たぶんカーブだ。』

氷室『カーブじゃないもん！』Y・H・LOVE　ZUKKYU
N・ボール』だもん。』

西口『はいはい。M・J・LOVE　注入・ボールね。』

氷室『マイケルジャクソンじゃないし！！楽しんご（芸人）でもな
いわ！！！！！！』

【Y・H・LOVE　ZUKKYUN・ボール】だわ！！』

西口『わかったわかった！わかったから一つ言わせてくれ！』

氷室『もう！！なんだ？』

西口『誰よりも元気にピッチャーやれよ！！それだけ！』

氷室『当たり前だろ！ピッチャーなんかやっちゃったら…二学期か
らのクラスで…女の子から…ラブレターが…。ウフフフ。二学期が
楽しみでしょうがねえぜ！』

西口『そうだ！！二学期からオマエはモテモテだ！それをよく想像

してピッチャーやれ！あと、オマエの大好きな佳美ちゃんよしみはフォアボール出す男が大の苦手らしいぞ！」

氷室『え！？佳美ちゃんが！？…こりゃ…死んでもフォアボールは出してはいけないようだな…。』

西口『ああ。頼むぜ。あとな、佳美ちゃんは、打たせて取るピッチングをするピッチャーがタイプらしいぞ！』

氷室『のあ！？マジでか！！貴重な情報ありがとう！！』

西口『佳美ちゃんにいい姿見せてやれよ！（ちなみに佳美ちゃんは球場には来ていません。）』

氷室『任せろ！燃えるぜ！バーニング！』

西口が戻っていく。
そして座る。

西口（つたく。相変わらず、調子のいいやつだ。つか、アイツが佳美ちゃんのこと大好きって知っててよかった。ははは。）

氷室が投球練習に入る。

独特のヘンテコ投球モーションから…

ヒュッ！

スパン！

西口『ナイスボール!』

西口（遅っ!）

氷室『次! Y・H・LOVE ZUKKUN・ボールね!』

ヒュッ!

カクッ! スパン!

西口『またまたナイスボール!!』

西口（思ったよりキレのいい縦のカープか。案外使える、かも。）

∴

∴

『プレイっ!』

島谷倫『頑張れよ! 氷室!』

氷室『おうつ!』

予想もしなかった氷室の登板は、どうなるのか!?

No.55:ピッチャーは愉快的ヤツ(後書き)

感想もらえると嬉しいです(= =)

No.56:Y・H・LOVE ZUKKUN・ボール

『さあ2回途中で上社西高校、邦南高校のエース大場をノックアウトしました！尚ノーアウトフルベースで好打者の1番バッター、正親くんが打席に入ります！代わった氷室くんは今大会初登板ですがこの悪い流れを断ち切ることができるか！？』

ドクッドクン…

氷室の心臓が高鳴る。

氷室（しっかり撃ち取って、いや…絶対に撃ち取って…）

氷室が独特のヘンテコ投球モーションから第一球を投げる。

氷室『佳美ちゃんを振り向かせるんだあ！』

バーン！

正親『…む！？』

『ストライク！ワン！』

《 89 km/h 》

西口『ナイスボール!!』

正親（こりゃ…球速以上に遅く感じるな。相当伸びてないボールだ…。）

正親がバッターボックスの1番前に立つ。

西口（まあ…。そうなるわな。打たれたら…しょうがねえか。）

2球目…
ヒュッ!

正親（思いつき…フルスイング!!）

カキン!

『遅いストレートを痛烈に引つ張ったあーっ!打球は切れるか!?切れるか!?』

『ファール!ファール!』

『惜しくもファールです!いやあ、しかしいい打球を飛ばします。上社西高校のリードオフマン、正親おつき勝成かつなり』

正親（あの投げ方、そしてアバウトなコントロール、さらには遅いストレート。完全にピッチャー経験は浅い。たとえ変化球を持っていようと、確実に俺なら仕留められる！さあこい！！）

西口（何がなんでも打たせてとりたい。見せ球は不要だ。三球で片付ける。）

西口が縦カーブのサインを出す。

（氷室曰く、【Y・H・LOVE ZUKK YUN - ボール】）

氷室『よっしゃあ。遂に禁断の魔球…Y・H・LOVE ZUKK YUN - ボールを解禁するぜ…。くっくく。（実際は縦のカーブです。）』

西口（よし！こい！お前のM・J・LOVE 注入 - ボール！）

ヒュッ！

シュルシュル…ピュッ！

正親（なんだ！？）

西口（よし！引っ掛かったな！）

氷室（佳美ちゃん…佳美ちゃん…佳美ちゃん…！！！！佳美ちゃん

の為に撃ち取られてくれ！)

正親(案外キレがいい……!!くそ……。)

(バットが止まんねえ……。)

カスン!

『バッターの正親、変化球に対して泳いでしまった!ちょっと当たただけの打球はサードへ!!サードの松坂くん、捕球してすぐサードベースを踏む!そしてセカンドへ送球!!!!セカンドの副島くんも流れるように一塁へ送球!!!!一塁の判定はどうだ!?'

『アウトオオ!』

『なんとまさかの三重殺成立!!!!!!!!邦南高校の2番手の氷室くん!ノーアウト満塁からの登板でしたが、なんとトリプルプレーでこのピンチを退けました!!!』

氷室『どんなもんじゃあーい!!!!!!!!!!ダアアアアアアア!!!!!!!!!!』

氷室がマウンドの上から空に向かって、拳を突き上げた。

『見てください！！この闘志溢れるガッツポーズ！これは2回の裏の攻撃も乗っていけそうです！！』

西口（まったく。やりやがって。）

小宮（なんか氷室くんがピッチャーってスリル満点で楽しいね。）
西口（ああ。これで流れが変わるといいな。）

『2回の裏、邦南高校の攻撃は、5番、ピッチャー、氷室くん。』

嫌な流れを断ち切った氷室のピッチング！

この男が今度は先頭打者としてバッターボックスに登場する！！

No. 57: 暴走こそが氷室佑介クオリティ（前書き）

今日2話目です♪

No.57：暴走こそが氷室佑介クオリティ

ポピイ！ポピイ！プブー！
ポピイ！ポピイ！プブー！
ポピイ！ポピイ！プブー！
ポピイ！ポピイ！プブー！
ポピイ！ポピイ！プブー！

氷室『ん？』

副島『この音は…？』

木村『ラッパ？』

慶野『あれ？なんで？』

藤武『僕が兄貴に頼んで来てもらうように言いました。』

小宮『あっ！そういうことね！』

西口『何がそういうことなんだ？』

藤武『僕の兄貴、吹奏楽部なんですよ。まあもう最後のコンクールは終わっちゃって引退してる身なんですけどね。3年生だけ最後の思い出作りのために来てくれたみたいで。最近猛練習してくれてたらしいです。』

松坂『へえー。でもうちの吹奏楽部って超スゴいって事は期待していいのか？』

西口『何がスゴいんですか？』

小宮『拓磨知らんの！？邦南高校伝統の吹奏楽部のこと！』

西口『なんや。知るわけないやん。』

慶野『邦南の吹奏楽部はね、全国大会常連で全国制覇を通算で7回もしてるんだよ。今年は惜しくも準優勝だったらしいけど。』

鬼頭『だから当然部員も多かった。一学年で40人はいるはずだ。だから3年生だけでも迫力十分ってわけ。』

藤武『そういうことです。応援はあった方が燃えるでしょ！』

氷室『あれは吹奏楽部…。たしか…佳美ちゃん（1年生）も吹奏楽部だ！って事は来てくれてる…。』

（佳美ちゃんは1年生なので来ていません。）

『かつとばせー！佑介！』

島谷倫『あれ？いつもより声援が大きいような…大きくないような…。』

島谷涼『俺がサッカー部とラグビー部に招集かけておいたよ。』

副島『お前ら…。』

島谷涼『控え選手でもやれることはたくさんありますから。』

藤武『絶対勝ちましょう！』

『ア、アウトオオ!』

『アウトだ!』

『セーフセーフ!』

『いや、セーフだ!! キャッチャーの朴^{バク} 昌秀^{チャンス}、クロスプレーの際にボールを落球してしまった!! 一点を返した!! これで3 - 2! 1点差に詰めてきた!!』

副島『ナイスラン氷室!!』

大場『なにがナイスランだ…。キャッチャーがしっかり取ってたら完全にアウトだろ。暴走がたまたまセーフになっただけ。ノーアウトでやるプレイじゃない。』

『まっ。良いんじゃないか?』

大場『鬼頭さん…。』

鬼頭『あいつ、一年坊のくせして、なかなか面白いヤツじゃん。俺次の墨を積極的に狙うの、嫌いじゃないぜ。』

大場『氷室佑介…か。』

氷室『大場先輩！！まだまだ諦める点差じゃないですよ！！いきま
しょう！甲子園！暴走こそが氷室佑介クオリティの真骨頂です！！』

大場『ポジティブなやつ。てか、諦めてねえし。』

鬼頭『なあ翔真？お前、昔のこと忘れてないか？お前がbaseball
a11始めた頃のこと。』

大場『どうしたんです？』

鬼頭『初心忘れべからず！そういうことだ！』

その後、邦南は打線が沈黙。
打たせて取るピッチングをする朴昌圭から得点圏にすらランナーを
置けない。

鬼頭『くそ……。』

副島『ドンマイドンマイ！切り替えていこうぜ！』

鬼頭（速球派は得意なんだけど……。こういうパツとしない技巧派の
小さくピュッと曲がるような変化球を何個も持ってるやつは中学の
頃から苦手なんだよね……。）

…
『空振り三振！…！氷室、カーブで空振りの三振に切ってとりました！！』

氷室『シャアアア！…！…！…！』

大場『氷室…やるな…。』

そして氷室がなんとも気味の悪いテンポで投球して、ピンチも多少ありながらなんと6回まで無失点。
持ち前の遅いボールで強打の上社西を見事に沈黙させる。

『6回の裏、邦南高校の攻撃は、1番、ライト、鬼頭くん。』

『いやあ。先程から少々雨が強くなってきました。7回が終了しない時点で降雨コールドゲームとなりますと、再試合となります。』

ザーザーザー…！！！！！！

吹奏楽部『あ！今日天気予報見るの忘れてて傘持ってきてねえ！！』
『俺も…！』

『ウチもない…！』

『ヒャー！』

スタンドは少々混乱気味。

鬼頭（ここまで球数は5イニングを投げて47球。一イニングにコイツは平均して10球も投げていない計算だ。魅せてやるよ。過去に至高の7人組と言われたうちの1人、鬼頭博行の実力を！！）

『1番の鬼頭くん^{バク}に朴^{チャンキュ}昌圭が投げる——』

次回、鬼頭が魅せる！！

No.57:暴走こそが氷室佑介クオリティ(後書き)

すみません…

ちよつと夏休みの宿題に本気出したいので夏休み明けまで更新できません>(一一)<

ご了承ください？

N o . 5 8 : 野球ってのはな。 (前書き)

朴昌秀のセリフは読みづらいです？

No.58：野球ってのはな。

カーン！

『ファールボール！！！！！！』

『いやあ〜本当に良く粘ります！次が16球目！カウントはフルカウント！！』

すげえ……
慶野

ネクストバッターサークルの慶野は鬼頭の芸術的とも言えるカットにすっかり見とれている。

朴昌秀（シツコイヤツダ。）

朴昌秀がカットボールのサインを出した。

鬼頭『この試合、スライダーは温存か？』

鬼頭が朴昌秀に話しかけた。

朴昌秀（コイツ…ナゼスライダーノソンザイヲシツテイル？コノタイカイノタメニイチネンイジヨウ昌圭ニハオンゾンサセテキタノニ。）

鬼頭『もう一回聞くよ。中学のとき、よく使ってたスライダーは温

存かい？』

朴昌秀『オマエ、ナニモノダ？』

鬼頭『日本語喋れるようになったんだ。よく日本に来て野球やろうと思ったね。覚えてる？中学の世界大会1回戦でやりあったんだけどさ。』

朴昌秀『オマエ、アノトキノメンバーノイチインカ。ダジュンハナンバンダツタンダ？』

鬼頭『まあ6番だな。監督もエースのオレには打撃ではあんま無理してもらってほしくなかったみたいだし。まあその分、ピッチャーとしては随分と潰されたけどね。』

朴昌秀『アノトキノエースノヤツカ。ウチノ朴昌圭ハアノシアイデミゴトナピッチングヲシテイタオマエノトウキユウスタイルヲマネシテイタ。』

ビュッ！！

カーン！

（ファールボール！）

『16球目もファールでカウントはフルカウントのまま！！粘ります！1番の鬼頭！！』

鬼頭『中学の頃のオレのピッチング？笑わせないの。俺はこんなバッターをかわしていくピッチングなんかやってた覚えはないね。俺はストレートと変化球のコンビネーションを軸に三振をとりまくるタイプだったと思うけど？』

朴昌秀『アイツモサイショハソレヲメザシテタ。シカシアイツハオ

マエトチガイ、ソノピッチングスタイルガマチガツテイルコトニキ
ガツイタ。』

鬼頭『ハハハ。雑魚がオレの批判なんかしやがって。事実お前らは
敗者、オレらが勝者だ。負け惜しみにしか聞こえねえな。』

カーン！

『ファールボール！！』

朴昌秀『ヒトリノエースニタヨリガチナコウコウヤキュウデハエー
スノデキガシアイヲオオクサユスル。ソンナナカデサンシンシ
カネラワナイヨウナトウキュウハイノチトリダ。モシフチヨウダッ
タラドウスル？サンシンガウバエズレンダヤフォアボールガツツイ
テシマツタラドウスル？ソレニキツイタ朴昌圭ハミズカラコノピッ
チングスタイルニシンカシテイッタ。』

鬼頭『いくらでも言ってる。』

カーン！

『ファールボール！！』

鬼頭『どう？決め球がないと辛いでしょ？アイツみたいに決め球が
ないと強い相手は試合終盤に慣れてきたらいつも通りの打撃ができ
るようになるもんなんだよ。別にヒット打ってって言われたら打てる
けどさ、こっちの方が嫌らしいでしょ？この雨だし、あんたら勝っ
てるんだからノーゲームにはなりたくないから早く七回の攻防を終
わりしたいとか思ってるんでしょ？』

朴昌秀『ソンナコトハベツニオモツテイナイ。オマエミタイニカッ
トシテルイニデオウナンテウチノメンバーハオモツテナイカラナ。』

鬼頭『あんたらわかってないね。野球ってやつを。』

バン！

『ボール！！フォアボール！！』

鬼頭『もっと野球について語り合いたかったのに残念だ。でもお前らが逆転されないうちに一つ言っておくよ。』

朴昌秀『ゴカッテニ。』

鬼頭『野球つてのは、相手にとって嫌なプレイを積極的にやっていくスポーツなんだよ。』

朴昌秀『オレハタダシイ。マチガッテイルノハオマエダ。』

『2番、センター、慶野くん。』

一塁ランナーの鬼頭がかなり大きなリードをとる。

鬼頭『ご理解してもらえなくて残念だなあ。こういつやつには身をもって教えてあげなくちゃね。』

藤武「…。…!？」

藤武「鬼頭さん…目が…」

続く!!

No.59：桁外れの洞察力

藤武『鬼頭さん…目が…』

一塁ランナーコーチの藤武は鬼頭の殺気に満ちた鋭い目に驚いている。

『いやあゝ大きなリードをとります。一塁ランナーの鬼頭くん。』

朴昌秀（バカメ…。昌圭ノ牽制ヤクイックノジツリヨクハカナリアル。）

昌秀が牽制のサインをだす。

昌圭（狙ッテヤル。大事ナノハ焦ラスコト。）

ビュッ！！バン！

『セーフ！』

昌秀（ヨクセーフニナッタナ。ホメテヤル。）
もう一回昌秀が牽制のサインを出した。

牽制が来ても鬼頭のリードの大きさは変わらない。

ビュッ！！バン！

『セーフ!』

昌秀（ナニ!? サツキヨリモハヤクモドツタダト?）

鬼頭『牽制は上手いって評判だったのに、いざランナーとしてでると全然上手くないじゃん。こりゃ、あと2歩いけるな。』

昌圭（クソッ、更ニリードガデカクナツテヤガル。舐メヤガッテ…。）

昌秀（サシコロセ。）

ビュッ!! バン!

『セーフ!』

鬼頭『うんうん。まだ出れるね。』

ガッ! ガッ!

鬼頭がもう一歩リードを大きくした。

端から見れば、なぜあんなにリードしているのにピッチャーは牽制で刺せないのか?と思う状況だ。

副島『おい…さすがに出すぎじゃ…』

大場『大丈夫です。鬼頭さんはピッチャーの足を見てリードをとってるんじゃない。ピッチャーの上半身を見てリードをとっているんです。』

松坂『どういうことだ?』

小宮『並外れた観察力、洞察力でピッチャーの心理を読み取って、牽制が来る少し前にピッチャーの心の変化を読み取って塁に戻るんですよ。あの人は。だからあの人は盗塁を仕掛けるときも、完全にモーションを盗むし、ランナーとしてあの人に勝る人間は一人しか

いないんですよ。』

島谷倫『なんだ？一人つて。』

小宮『S・6の1人、静岡の晟西高校の水仙です。鬼頭さんはいつをランナーに出したら一点相手に渡すようなもんだっていつてました。あいつだけがオレが認めたランナーだって言っていました。』

『ランナー走った!!』

小宮『ほら、完全に盗みました。』

カン！

『エンドランだ!!打球はセカンドへ!!二塁は無理、一塁へ送球ワンナウト!!あーっと一塁ランナーの鬼頭くん、サードまで向かうぞ!!セーフセーフ!なんとセカンドゴロでサードまで到達です!!これで一死三塁!』

副島『すげ…今ので三塁かよ…。』

『3番、ファースト、大場くん。』

カキーン！

『打球はセンターへ!!これはタッチアップには十分か!?!』

邦南高校、同点なるか！？

No.60：強肩センター

『これは犠牲フライには十分か！？センターバクチャンヨン朴昌龍、落下地点に入
ったー！』

慶野『よし！』

木村『同点やー！』

パシッ！

『ゴーーッ！』

『センター2歩後ろから前に来てとってバックホーム！！！』

鬼頭『ん！？』

『これは…素晴らしい送球が返ってきた！！！！！ストライク送球だ！！！！！』

ズザザザーッ！

鬼頭『クソッ！』

『アウトオォーッ！！』

『タッチはアウトだ！！センターの朴昌龍、素晴らしい送球でホー

ムをアウトにしました！！これでスリーアウトチェンジ！！！！！！
点差は一点差のまま、七回の表、上社西の攻撃に移ります。』

鬼頭『わりい……。みんな……。帰ってこれなくて。』

氷室『いいっすよ。』まだまだ試合は終わってませんから！！もつ
ともつと楽しんで！！僕らの野球をしましょう！！うっほほーい！
！』

西口『今日のあいつ、やたらとテンション高いな。まああーいうやつが1人いるだけで違うけど。』

小宮『みんな、試合に出られない僕の分まで頑張ってくださいよ！』
木村『おう！』

副島『ヒロ！切り替えるよ！オマエで帰ってこれなきゃだれも帰ってこれなかったって！』

鬼頭『おう！』

藤武『てかセンターのアイツ、すげー肩してるな……。』

氷室『ウェイ！ウェイ！イエーイ！』

小宮『氷室くん相当ピッチャーが楽しいみたいだね。』

西口『だな！よし！守るぞ！』

大場（……。……。！！！！！！）

- - - - -

鬼頭『なあ翔真？お前、昔のこと忘れてないか？お前がbaseball始めた頃のこと。』

大場『どうしたんです？』

鬼頭『初心忘れべからず！そいつことだ。』

- - - - -

大場『…!!』

大場がハッと顔をあげた。

大場『忘れてたよ。鬼頭先輩。』

大場が忘れていたことは…!!？
次回に続く!!

N o . 6 1 : 大場翔真の過去（前書き）

なんか自分で書いてて泣けてきました？

No.61：大場翔真の過去

『七回の表、上社西高校の攻撃は、3番、センター、バクチャンヨン朴昌龍くん。』

『さあ打席にはさつきセンターから好返球で同点を防いだ朴昌龍。今日は4打数3安打と当たっています！』

氷室『とおっ！』

朴昌龍『しょきゆうをたたく！！』

カキーンっ！

『大きいっ！！！！これは伸びるぞ！越えた越えた！！バッターラインナー朴昌龍は二塁ストップ！！七回の表、上社西高校の攻撃、この回先頭の3番朴昌龍のツーベースヒットでいきなりノーアウトランナー二塁です！！』

氷室『チツクショー！！めっちゃくちゃいいボールだったのに！！』

西口（確かに、今のはいいボールだった。落ち込まなきゃいいが…）

氷室『みんなー！注目注目！！！！！！！！！！』

副島『ん？』

島谷倫『どうしたんだ？』

氷室『いきなりツーベースヒットを打たれまして、申し訳ないが、これからも打たせてとりたいたいと思っています！！どうか守ってください！！ハッハッハー！！』

邦南メンバー全員（ただし氷室を除く）

『……は？』

大場『まったく、あいつのせいで、思い出しまつじゃねえか。あのときの俺を……』

回想シーン←←

『ツアアウト！ツアアウト！』

『しっかり抑えろよ！』

『楽に楽に！』

『自信もって投げ込め！』

『まだ3点も余裕あるからな！』

安田^{やすだ}翔真^{しょうま}『オッケー！！打たせてとるからな！！しっかり守ってくれよ！』

カキーン！

翔真『レフト！！！！！！！！！！』

レフト
坂田『くそっ！』

打球はレフトの頭上を越えた。

『回れ！回れ！』

『カット！！カット！！』

結果はツーベース。満塁から二人のランナーが入って点差は一点差、翔真の所属するチームはわずか一点リードとなった。

そのときマウンドに立っていたのは、

やすだ

安田 翔真しょうま

今で言う、大場おおば 翔真しょうま

のことだ。

『タイムお願いします。』

『タイム！』

内野陣がマウンドに集まる。

山本『サード 安田！まだまだ勝ってる！強気にいこうぜ！！』

杉山『ショート 打たれるのはしょうがない！』

そして…

『おにい！次のバッターで仕留めるよ！』
この声の主は、

翔真『おう！わかってるって！慶大！』

安田『やすだ 慶大』

翔真の一つ下の弟だ。

ちなみにポジションはキャッチャー。

そして…

『プレイ！！！！』

カキーン！

慶大『ショート！！！！』

杉山『あいよ！』

『アウト！！！！』

翔真『よっしゃあ！公式戦初勝利！！！！』

この安田兄弟は翔真が小学校4年生（慶大は小学校3年生）のときまで愛知ではなく、福岡にいた。
4人家族で、いつも明るく、とても仲の良い家族だった。
が、悲劇は突然起きた。

…
ブーブー！

悲劇の起きた日、慶大と慶大のお父さんは車でスポーツショップに向かっていた。

お父さん『慶大！新しいグローブの色は何色がいいんだ？』

慶大『んーと、今までは黒だったから、黄色がいいなあ。』

お父さん『そうか、キャッチャーミットは高いんだから、大事にしろよ！』

慶大『うん！大事にする！』

そして…

お父さん『よし！帰るぞ！』

慶大『やったあ！ありがとうお父さん！』

ブーブーブー！

二人が車に乗って家に帰るとき、遂に悲劇の時がやって来た。

お父さん『最近楽しいか？』

慶大『なにがあ？』

お父さん『野球だよ！野球！！』

ブブー！ブブー！

慶大『うん！楽しい！！』

お父さん『よし！これからも…』

お父さんは一瞬固くなった。
そして…

ガラガラガッシャーン！

『救急車だ！！！！』

『早くしろ！！！！』

『お、おい！まさかこの軽自動車が大型トラックと正面衝突したのか！？！？』

『中の人は大丈夫なのか！？』

ピーポーピーポー！

二人は、病院に搬送された。

ドクターの懸命な努力も実らず…

『残念ですが…お二人ともに…もう二度と息を吹き返すことはありません…。二人とも…即死のようです…。』

お母さん『……。翔慶^{しょうけい}…慶大…。』

翔真『お母さん…お父さんと慶大…どうしちゃったの…？』

お母さん『翔真、これからは二人で生きていかなくちゃならないの…。』

翔真『え…。それって…。』

お母さん『二人とも…死んじゃったのよ…。』

そのとき、翔真は何も考えられなかった。

N o . 6 1 : 大場翔真の過去（後書き）

感想よろしく願います???

No.62: 出逢いは運命

翔真の父と慶大が亡くなったとき、福岡にいたのは翔真たちだけじゃなかった。

当時福岡には、小宮哲都、それに西口拓磨の二人もいたのである。

小宮を野球に誘ったのは西口。

その西口を野球に誘ったのは翔真の弟、安田慶大。
そして慶太を野球に誘ったのは翔真である。

- - - - -

西口『もし暇なら一緒にキャッチボールしようよ!』

小宮『キャッチボール?』

西口『キャッツ?なにそれ?キャッチボールだよ!』

小宮『...。なにそれ?なんで僕なの...?』

西口『いつも一緒にキャッチボールやってる男の子が今日はいないの。はい!これグローブ!』

- - - - -

そして...

- - -
小宮『も、もう帰らなきゃ…。』

『おい！！』

西口『あ、来た来た！！』

『遅れてごめん！』

小宮『え…あ…』

西口『遅いよ慶大くん！』

安田慶大『ごめん！ちよつとカブトムシの観察してて…。』

小宮『な、なんで慶大？』

安田慶大『あ！哲都！なんでここにいの！？絵梨が寂しそうにしてたよ！』

小宮『はあ。さみしがりやなんだから。じゃあ先に帰ってるね。』

安田慶大『うん！晩御飯の時までに帰るってお母さんに言っておいて！！』

小宮『わかったよ。』

テクテク…

西口『今の子、知り合い？』

安田慶大『うん。いとこだよ。今日は夏休みだしウチに泊まりに来

てるんだ。』

西口『へえ…あの子、他になんかスポーツやってるの?』

安田慶大『たぶんなにもやってないよ。』

西口『そうなんだ!じゃああの子も野球誘おうよ!』

安田慶大『え…ホント?哲都、性格があんまり野球向きじゃないと思うよ。』

西口『まあ僕も野球始めてからお喋りになったし、あの子もきっと一皮むけると思うよ。』

安田慶大『わかった。じゃあ誘ってみる。』

- - - - -
- - - - -
- - - - -

そして…時は四年後、あの悲劇の時、

- - - - -
- - - - -
- - - - -

翔真の母『翔真、これから引越すの。場所はおじいちゃんたちのいる愛知にしようかと思ったんだけど…大阪に決まったわ。あと、これから翔真は【安田翔真】から【大場翔真】って名前になったのよ。ごめんね…。さあ行きましょう。』

翔真『う…うん。』

そして二人が車に乗ろうとしたとき…

『待つてよお！』

『そうだそうだ！待ちやがれ！』

そこにいたのは…

翔真『小宮…、西口…。』

小宮『相変わらず、よそっばい言い方だね。』

翔真『まあいところだからって特別扱いする必要もねえよ。』

西口『うぐ…うぐ…。』

西口は泣いていた。

翔真『どうして泣いてるんだ？元気出せよ。』

西口『…ゆ…。…な……。』

翔真『ごめん何て言った？聞こえなかったわ。』

西口『野球！絶対にやめるんじゃないやねえぞ！もしやめたら…お前が慶大の兄貴だったことも帳消しだからな！…！』

ダッダッダ…

西口は走ってどこかへ行ってしまった。

四年たって二人とも大分性格が変わった。

小宮『僕からもお願いです。慶大が野球をできない分…翔真が慶大

の分まで背負ってやってください！！お願いします！！」

翔真『バーカ。』

小宮『え…？』

翔真『お前らに言われなくたって背負っていくっての。まあ、野球はやんねえかも知れねえけど。』

小宮『…。』

翔真『でも…約束する！！　いつかまた、一緒に野球をしよう！その時は、敵か味方かわかんねえけど、いつか、いつか絶対、野球やるうな！！じゃあな！元気でいろよ！』

小宮『チツ。』

ブーン！

大場の二人は、空港に向かった。

小宮絵梨『もう福岡には帰ってこれないんだってね。翔真と翔真のママ。絵梨は慶大とももつとしゃべっていたかったな。』

小宮『ああ。また、野球…できるかな…。』

小宮絵梨『当たり前じゃん！だって拓磨、哲都、翔真の三人の出逢いは運命でしょ。運命ならまた必ず会えるときが来る。その時を待とうね。』

小宮『ああ。また、できるよな。』

小宮『よし！家にかえって素振りでもするか！！絵梨は病院だから

な！
『

小宮絵梨「はい。」

— — — — —

続きます（笑

No. 63：照丘小 v s 南阪小

- - - - -
- - - - -

大阪に引越した大場の二人は、てるあか照丘小学校に転校してきた。

そこは大阪の軟式野球の名門中学、南阪中学の附属の南阪小学校があるところだ。

もちろん、後のS・6（中学まではS・7）

と呼ばれるようになる面子がもろもろ揃っていて、さらにその至高の7人組に、さらに当時、「悪童コンビ」と呼ばれた双子の相当野球の上手い悪童までそろって、南阪の完成形だった。

が、南阪中学の時、悪童コンビが事情があり、南阪中学を退学し地元の中学へ転校してしまったので、南阪は7人組となった。

悪童コンビが退学しなければ、いまではきっとS・9と呼ばれていただろう。

話を戻して、照丘小学校。

翔真は野球をやるかやらないかで揺れていた。
入るなら小学校の部活に入ろうと思っていた。

そして、小学校の野球部を見たとき、ものすごいタラタラだった。
その時気持ちの低かった翔真は、厳しい世界に入るつもりはなかった。

たし、この野球部に入ることにした。

小学校の部活なのでやるのは水曜日、金曜日、日曜日だけだ。

その時の翔真は、野球がうまくなりたいというより、野球を楽しみたいという気持ちだった。

『ハッハッハ！！なんやそれ！！』

『アホやんけ！』

『うっさいわ！』

『ハハハハ！』

練習中は笑いが絶えず、公園でやってる野球と同じだった。

もちろん、この照丘小学校は弱かったし、翔真もこの頃の自分の野球に関しても、いまになっても後悔はしていないという。

そして小5の夏の小学生軟式野球阪神大会。

1回戦の相手は、なんとあの南阪小学校。

翔真はエースで4番だ。

南阪小はすでに地元では有名だったのでギャラリーもたくさんいた。それまで練習試合では、楽しむことだけを第一に翔真は考えていたので、皆のために打たせていた。

が、今日は違った。

1番から9番まで隙のない究極の打線。

打たれて当然という妙な安心感。

そしてこの超強豪に自分のピッチングがどれだけ通用するか、試してみたかった。

このとき、翔真は小学校5年生。

練習でも当分ピッチング練習を本格的にはしていなかったので自分のからだの成長に気がつかなかった。

そして一回の表、南阪小学校の攻撃。

大場翔真がギャラリを啞然とさせる圧巻のピッチングを披露する。

『水仙、打てよ。』

水仙『あたりめえだろ。黙って見てろ。』

翔真『これが南阪のリードオフマン、水仙か。』

翔真が振りかぶる。

ビュッ!!

バンッ!

水仙『ん。。』

水仙のバットはピクリとも動かなかった。

『ストライーク!』

『おい。ドラゴン。水仙が初球見送ったぜ？あいつの大好物はゲム開始直後のストライクのボールだよな。』

青龍寺『知るかよ。まずは球筋を見極めようとしてんじゃねえか？いちいちそんなことを俺様に聞くな。ぶっ殺すぞ。』

2球目：

ズバン！

『ストライク！ツー！』

水仙はまた見逃した。

水仙『こ、こいつ！！』

ズバーン！

『ストライク！バッターアウト！！』

水仙『クソッ！俺が空振り三振だと！？舐めやがって！！』

上村（キャッチャー：キャプテン）

『は、はええ…。あいつ…こんなに早いボール投げれたのか…捕るのすら難しいぜ…。』

町田^{シート}『いきなり三振か！！ナイス翔真！』

『へ！！ザーコザーコ！！』

『それでも一番バッターか！！』

水仙『うるせえ！この悪餓鬼二人組が！！』

そして、二番バッターも三振に倒れ、三番の鬼頭の打席。

ちなみに…打順は

南阪小学校

1：3 B：水仙

2：C F：？？？

3：P：鬼頭

4：1 B：青龍寺

5：L F：桜沢

6：R F：？？？

7：C：？？？

8：2 B：？？？

9：S S：？？？

（？？？はまだ未登場の選手。）

鬼頭（やるな…。だがまだまだ始まったばかりだ。）

翔真（攻めるぜ！！！！）

ビュッ!!

続く
↓

ビュッ!!

鬼頭（どりゃっ!）

カスン!

『ファール!』

鬼頭（クソッ。いまのもど真ん中…。捉えられない…。）

どりゃあ!

ブン!

鬼頭（な…なに…? まだ振り遅れ…? いや、もっと球速が上がった…?）

『ストライク! バッターアウト!! チェンジ!…!』

『お、おい! なんなんだあのピッチャーは!?!?』
ギヤラリーも騒いでいる。

上村（今日のあいっ…完全に、マウンドで…）

『躍動してる!…!…!』

翔真『しゃあああああ!』

青龍寺（雑魚どもが。次の回、俺が打ってやる。）

だが…

ズバーン！

『ストライク！バッターアウト！！』

青龍寺『…』

『お前が三振なんて、珍しいな。』

青龍寺『殺されたくなけりや、黙れ。』

『あいよ。』

『ストライク！バッターアウト！！』

『ストライク！バッターアウト！！チェンジ！！！！』

そして三回の表、

『ストライク！バッターアウト！！』

桜沢『な…7連続…』

『おい剣刃^{けんと}、俺らでチャンス作るぞ。』

『わかってるって。破刃^{やいと}。アホか。』

鬼頭『さて。この双子ちゃん。打ってくれるかな？』

剣刃『俺、いきがってるやつ嫌いなんだ。アイツみたいに楽しそう

に野球やってるやつなんて特にね。
上村『で？来ますよ。』

バンッ！

ストライク！

剣刃（くー。はえー。）

ビュッ！！バンッ！

『ストライク！ツー！』

剣刃（タイミング合わねー。）

ビュッ！！

ドバン！

（くそ…手が出なかった…。）

『ストライク！バッターアウト！！』

『なあ剣刃？どんなだった？』
『確かにいいボールは持っている。だがお前なら確実に仕留められ

るはずだ。見せてやれ、天才の実力を。』

『おう。さすがわかってるね。剣刃は。』

『破斗のことなんかわかりきってるっての。』

ビュッ！！

キン！！

『ファールボール！！』

上村（初球から当てた！？こいつ9番のクセに…。やっぱり南阪だな。油断はできない。）

『なんだ。普通に当たるやんけ。こんなピッチャーに何てこずってんだか。』

ビュッ！！

カキン！

『ファールボール！！』

上村（今度は引っ張ってきたか。こいつ、バットが触れてやがる。タイミングもあってる…）

バンッ！

『ストライク！バッターアウト！！チェンジ！！』

上村（こともないか。）

鬼頭『一巡目は全打者三振か。さすがに悔しいね。二巡目以降が楽しみだな。』

（まさかこんなやつが現れてくれるなんてね。思っても見なかったよ。）

そして、4回の表、照丘小のエース、5年生の大場翔真は、二巡目となった一番の水仙と、二番バッターも三振に打ち取り、これで1人連続奪三振。

そして打席には…

『ヒロ、打てよ。』

鬼頭『わかってるって。』

3番、鬼頭博行。

そして二人の運命を変えた対決を迎える。

No.65：ハイレベル対決

（なんか今日の試合時間経つのはえーな…。）

翔真（こんなスゲーやつらと、欲を言えばまだまだ対戦していたい気分だ。けどそもいかない。本気で勝ちにいくぞ。）

鬼頭（1回戦からおまえみたいなやつとやりあうことになるなんてな…。今度こそ全力で打ちにいく…。）

（ふー。）

両者が呼吸を整える。

0-0だが両者の置かれている状況は大きく違う。

翔真のいる照丘小は1回戦敗退も当然な弱小校。

しかし一方の南阪小は最強のメンツが揃った超強豪。しかもゲーム開始直後から今まで大場翔真に11人連続奪三振を喫している。まだ3イニングほど残っているとはいえ、メンタルのあまりできていない小学生である、南阪小の選手は若干焦りを感じていた。

そして初球…

翔真が振りかぶる。

ビュッ！！
ゴウッ！！

鬼頭（どりゃっ！）

カーン！！

『ファールボール！！』

上村（さつき空振り三振したときとほぼ同じスピードだが今度は当たってきたか。さすが南阪の3番バッターだ。）

鬼頭『ちっ…。』

2球目…
ビュウッ！！

鬼頭（くっ…。カスン！

『ファール！！』

鬼頭（くそ…。コースもど真ん中…。完璧なタイミングで打ってい

るはずなのにどうしても差し込まれる…。」

翔真（やっぱスゲーやつらだ…。こんなに速い球放つてもついてきやがる。このままストレートを投げ続けても三振は奪えそうにない。だったらさ、）

（三振なんか奪いにいかなきゃいいんだよ。どうせ奪えないんだっただらさ。）

鬼頭はピッチャーである翔真を睨み続けている。天性の洞察力を持っている鬼頭は翔真の見えない心の変化を感じとった。

鬼頭（なにか変わったぞ…。確実に…。まさかとは思うが…ここから…更に…）

翔真（三振なんか狙わずに…楽に、力抜いて…）

『指先！……！！……！！……！！』

ビュウツツツツツ！

鬼頭（なにに！？！？！？！？！？！）

上村（うぎゃあ！）

ドバーーーーーッッーッン!!!!!!!!!!ガッーンッッッ
ッ!!!!!!!!!!

鬼頭『…!?…は??』

上村（ぐは…。な、何が起きた…）

上村が前を向くと、ボールが翔真の元へ転がっていた。
そして翔真がそれを拾うと一塁へ送球。

アウトが宣告された。

これでスリーアウトチェンジ。

しかしバッターランナーの鬼頭は走っていない。

鬼頭（な…な…なんなんだ!?今の1球…。目で追えなかっただど
!??）

上村は何が起きたのかわからなかったが、自分の胸の辺りが猛烈に
痛いのに気がついた。

ベンチに帰ると、翔真が寄ってきた。

『先輩、ちゃんと構えたところに投げたんだから捕ってくださいよ。』

『

上村はそのとき翔真の言っていることの意味がわからなかったが、
自分のはめていたキャッチャーミットを見た瞬間、全てを理解した。

（キャッチャーミットを貫通した！？！？）

（いや、そうに違いない。じゃなきゃ紐が切れるはずがないじゃないか…。そして貫通したボールが俺の胸に直撃して跳ね返って翔真の元へ転がっていったのか…。そういうことか…。だけど…俺の新品のキャッチャーミットを壊す球威と球速なんて…。）

そのころベンチに帰った鬼頭は笑っていた。

（まさか、この試合中に更に進化するなんてね…。）

そのときの鬼頭の表情は、試合の先の事を考えている顔だった。

ゲームセット!!!!!!!!!!!!!!

結局試合は南阪小が勝った。

スコアは

南阪	—
0	0
0	0
0	0
0	0
0	1
—	—
0	1

最終7回に疲れが出てきた翔真のボールをやっと南阪打線が捉え始め、最後の最後にエラーが出てしまった照丘が負けた。

しかし翔真は7イニングを投げ、最終回以外はすべてのアウトを三振で取り、20奪三振、被安打2、無四球のピッチングだった。

南阪小はその後地区大会を圧倒的な強さで圧勝していき、全国制覇をする。

この照丘戦以外はすべての試合で5点以上の得点を記録した。

大会が終わり、とりあえず引退した鬼頭は、ある日翔真の家を訪ねた。

N o . 6 6 : 師弟関係の始まり（前書き）

今回ののはなし若干微妙かもです…

No.66：師弟関係の始まり

ピンポン！！

『はい！』

鬼頭が翔真の家のインターホンを押すと、翔真の母が出てきた。

『どうしました？』

『大場くんいらつしゃいますか？』

とりあえず単刀直入に聞いた。
すると、

『ごめんね、今ちょっと留守してて。』

どうやら翔真はいないようだ。

『わかりました。ありがとうございます。』

（また明日来るか…。）

とりあえずエレベーターで地上に降りて、自転車に乗って帰る。

そして5分ほど自転車を漕いでいて、公園の横を通りすぎるとき…
バシーン！

『ナイスボール！』

『うわーはえー！』

野球をしている人間が3人。

若干遠くからだったのでよく見えなかったが、もう1球投げた瞬間、

（大場だ！）

そして歩きながら近寄る。

3人いて、一人がピッチャー、一人がバッター、そしてもう一人が
キャッチャーをしていた。

鬼頭『ちよつといいですか？』

大場『はい？』

もう二人も翔真の元へ駆け寄る。

そして今駆け寄った二人の防具をつけてキャッチャーをやっていた
方は、西口拓磨。バッターをやっていた方は、小宮哲都。

鬼頭『おまえ…大場だろ？』

大場『は、はい。』

鬼頭『何から話したらいいかわかんねえんだけど、単刀直入に言う
よ。』

大場『…？』

鬼頭『俺は南阪小の3番エースの鬼頭だ。1回戦でお前らを倒した。それでだ、おまえ、南阪中を受験してくれないか？』

大場『え…南阪の3番エース！？』

鬼頭『ああ。俺たちは試合には勝ったが、おまえとの勝負には負けたと思ってる。それで…。今年の冬、南阪を受験してくれないか？』

大場『え…でも…』

鬼頭『もちろん私立だし色々とお金も掛かるところが出てくるだろう。でも…おまえ…俺たちと一緒に自分を磨いてみないか？おまえはプロも狙える素材を持っていると思ってる。だから今年の冬…』

大場『あのみ。』

鬼頭『ん？』

大場『話が進んじやってますが、俺、今年の冬受験するなんて無理です。』

鬼頭『どうしてだ？なんなら色々…』

大場『そうじゃなくて、俺、小学校5年生なんで。』

鬼頭『え…？』

大場『だから、今年の冬は受験できません。』

鬼頭（俺たちが20三振も食らったやつ…5年生だったのか…。こりゃマジで欲しい逸材だぞ…。ただ、学校の関係者を絡ませるのも面倒くさいし…。しかし来年小6だろ…。無名の照丘小で才能潰されるのも最悪だし…。うーん、よし…まあ急がば回れってことで…。）

鬼頭『これから一年、俺がおまえの自主練、付き合ってやる。』

大場『え！？ホントですか！？南阪のエースの人が！？ヤッター！
！』

鬼頭『おう。約束する。』

大場『じゃあこの二人も一緒に自主練やっていいですか！？』

鬼頭『ああ。多い方が楽しいしな。』

ちなみになぜこの二人がいるのかというと、小宮は住んでいた家が
火事でなくなり、いとこである大場家に引っ越してきた。西口は父
親の仕事の都合で引っ越してきている。

鬼頭『じゃあいくぞ！』

『おー！』

No・67：エースの我が儘（前書き）

久々に現在に戻ってきました（笑

No.67:エースの我が儘

『『フォアボール!』』

氷室『クソっ...。』

朴昌圭『ヨシ...。』

『これで2者連続のフォアボールで、ノーアウトフルベース!ここでバッターは...6番の非常にチャンスに強い今日タイムリーを放っている野村!』

『6番、レフト、野村くん。』

西口『タイムお願いします。』

邦南の内野陣がマウンドに集まる。

西口『バテてきたか?』

氷室『そ、そんなんじゃねえよ!』

西口『いや、球が明らかに浮いてきてるし。』

氷室『むむむ…。』

大場『あのさー…。』

西口『どうしたんですか？』

大場『さつきは、悪かったな。一人で切れちまって…。』

氷室『まあ…ね。』

大場『こんな俺がエースで情けないと思ってる。だけど…今…今だけ俺の我が儘…聞いてくれねえか…？』

西口『…。』

大場『ダメ…か…？』

氷室『大場先輩。』

大場『？』

ポイツ！

氷室が翔真に向かってボールをトスした。

氷室『あとは任せました。一点ビハインドのこの場面…。もう一点もやれませんか。打たせてとる僕のピッチングでも限界がありますし、最初より打ち取れる率は低くなってきましたし。』

大場『氷室…。』

島谷倫『頼んだぞ。エース。』

松坂『今度は絶対抑えろよ。』

西口『その代わり…。』

バシーン！

翔真が投球練習を始める。

『いやーまた雨が強くなってきました。ここ瑞穂市みずほ民球場。』

大場（雨の場面はもう既に経験済みだ。）

バシーン！

西口（やっぱり…さっきよりはコントロールは少し安定しているが、ボールは走ってないな…。やっぱりいつもの大場先輩じゃない…。）

『プレイ！！！！！！』

バシーン！

『ボール！！！！！！』

大場（落ち着け…。落ち着け…。）

2球目…

ビュッ！！

野村（甘い！！ど真ん中！！）

No.68：思考転換

『大きな打球だあーっ!!!!!!!!!!!!!!』

木村『クソっ!』

ポテ!!

『レフトの頭上越えた!!!!!!!!!!!!!!三塁ランナーはタッチアップの体勢からホームイン!!!!!!!!!!二塁ランナー^{バックチャンス}朴昌秀もハーフウェイの体勢から今ホームイン!!!!!!!!!!一塁ランナーは止まっ
た止まった!!!!!!!!!!!!!!』

大場『くそ。。。』

『七回表上社西高校、ノーアウトフルベースから6番の野村のレフトオーバーの二点タイムリーツーベースで二点を追加し5-2!!!!!!止まっていた試合が動き出しました!!!!!!!!!!!!!!』

氷室（くっそお。。。3点差かよ。。。）

ザーザー!!!

『おや?どうやら主審が選手を引き上げさせますね。あー中断です。雨がこの回強くなってきたのでグラウンドに出ている選手を引き上げさせます。』

←途中経過←(現在七回の表)

上社西一	1	2	0	0	0	2
邦南高一	1	1	0	0	0	0

ザーザー!!!ザーザー!!!

邦南ナインももちろんベンチに戻る。

松坂『スゲー雨だな。』

副島『ああ。なんでまた俺らの試合のときに降るかなあ。』
氷室『ですねーっ。』

ドコッ

翔真もベンチに座る。

(ふーっ。)

大場（3点差になっちまったぜ…。楽しみながら投げるって意識しながら登板したのに…。やっぱり今日は全然ボールが走らねえ…。）

ドコッ

一人でベンチに座っている翔真の横に西口が腰を掛けた。

西口『そろそろ思い出してくださいよ。あの頃の自分の姿くらい。』

大場『お前…俺が何考えているかよくわかったな。』

西口『そりゃあわかりますよ。一応何年も翔真先輩のこと見てますから。』

大場『あの頃の俺って？』

西口『意識しないと楽しくピッチングできない。そんな人じゃなかった。投げることで自体に喜びを感じていたんじゃないんですか？少なくとも僕はそう見えてましたよ。』

大場『投げることで自体が楽しい…。か。確かにな…。』

（いつからだろう…。勝利にこだわるあまりに投げることの楽しさを忘れてしまったのは…。きっと中学の頃だろうな。常勝軍団、名古屋東ブラックスヤークに入ってから、引退するまでみっちり『勝つ野球』を教わってきた。今思い出したよ。照丘小のころの阪神大会の南阪小戦のときみたいに投げることも大事なんだ。）

『勝ち負けにこだわらず、精一杯楽しく投球をする。』

西口『どうかしました？』

大場『なんでもねーよ。ほら、雨ちよつとずつやんできたぞ。さあ、キャッチボールでもしとこつぜ。』

西口『はい!』

西口（何か思い出したのかな?）

『雨が弱くなって審判も出てきました。再開するようです。』

『いくぞお!』

『おう!』

『7番、ファースト、岸くん。』

『プレイ!』

『さあ7回の表、ノーアウトランナー二三塁から再開します!』

初球…

野中『大場くん…今日は明らかに調子が悪い。抑えられるのか?』

ビュッ!!

ゴウ!!

岸（ん!?!）

ズバーン！

『ストライク！』

《 140km/h 》

『さあこの場面で今日最速のボールがいました。』

2球目…

ビュッ！！

ゴウ！！！！！！！！！！

岸（くっ。。）

カキーン！

『ファール！』

カキーン！

『ファール！』

カキーン！

『ファール！』

カキーン！

『ファール！』

西口（しつこいな。次はこれで三振を取りに行くぞ。）
西口が下村フォークのサインを出す。

No. 69 : MAX149 km/hの豪速球(前書き)

ちょっと短いかも？

No.69:MAX149km/hの豪速球

榊原『最後のボール、さっきよりも速くなったよな？どんな感じだった？』

岸『悪い…俺、最後のボール、見えなかったわ…。』

榊原『え？』

『8番、ショート、榊原くん。』

岸『と、とにかく頑張れ…。』

榊原（どうしたんだ。岸のやつ。あんな顔して。）

初球…

ビュルツルツ！

ドバン！

『ストライク！ワン！』

榊原『え…』

ビュッ！！

ゴウッ！

ドガン！

『ストライク！ツー！』

『さあ2球で簡単に追い込んだ！！バッターの榊原、まだバットを振っていないがこの球速にあと1球で合わせられるのか？』

榊原「おい……こんなの有りかよ!？」

大場がボールをリリースする。
ビュルッ！！

（ボールが……マジで見えねえ……。）

ズバーーーーーッッッーッッーッッ！

「ストライク!!!!!!!!!!バッターアウト!!!!!!!!!!」

「3球連続渾身のストリートで榊原を見逃し三振に斬って取った！
！！！！！！これでツーアウト！！！！邦南高校背番号1の大場、流
れを断ち切ろうと言わんばかりの豪速球、MAX149km/hの
ボールで2連続奪三振！！！！！！！！」

「9番、セカンド、小山くんに代わりまして、代打、青山くん。」

西口（やっべー。めちゃくちはえーな…。）

…

『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！！！』

野中『おいおい…ホントかよ…』

川越『ああ…。あとは邦南が3イニングで4点以上取れればってところだな。』

小宮『ノーアウトフルベースの大ピンチをしのいだ。流れは完全にこっち向きだ。』

『7回裏、邦南高校の攻撃は、4番、キャッチャー、西口くん。』

西口（この回確実に複数点は取りたい。だったら…先輩達うしちに繋ぐし
かねえよな！！！！）

No.70：フルスイング

『『フォアボール!!!!!!!!!!朴昌圭、この回少し制球が乱れ、ツ
ーアウトフルベース!!!!!!!!!!!!!!!!!!』』

『9番、シヨート、島谷倫暁くん。』

島谷が独特のオープンスタンスで打席に構える。

ビュッ!!

スバン!

『ストライク!!』

くそ……アウトローギリギリか……
島谷倫

野中『ここ最近島谷兄は守備でこそチームに貢献しているが……』

川越『バットではサッパリですもんね……。』

野中『ああ……。3点差の終盤7回裏……ツーアウトフルベース。ここ
で一本出さないと流れ的にも邦南はもっと不利になる……。もし一本
出れば次のバッターは……』

野中&川越『鬼頭!』

ビュッ!!

カクッ!

『ストライク!! ツー!!』

『さあ2球目も得意のカットボールでストライクをとり簡単に追い込んだ!!』

野中『ダメだ…狙い球が絞れていない…』

島谷倫（昔っから俺は打撃よりも守備の方が好きだった…。だけど…ただけど…それだけじゃ高校野球なんかやっていけねえ…。だから毎晩気の済むまでバット振り続けてきた…。なのになぜ打てないんだ…。）

『第三球!!』

ビュッ!!

ズバーンッ!!!!!!

島谷倫（くそっ! ストライクか!?)

『ボール!!!!!!!! ボール!!!!!!!!!!』

島谷倫（た…助かった。）

島谷涼『兄貴!』

島谷倫『?』

「！！！！」

『セーフ！セーフ！』

『セーフだ！！9番島谷倫暁くんの相手のタイムリーエラーを誘う執念のフルスイングで一点を還して5 - 3！！！！！！とられたあとすぐ一点を返した！！』

野中『よくあの厳しいコースに手が出たな…。なにか気持ちに変化があつたのか？』

川越『結果オーライは必然だ。それ相応のことをしてやっと奇跡は起きる。あいつの場合は迷いのないフルスイングが奇跡を呼んだ。これで次のバッターは…』

『1番、ライト、鬼頭くん。』

鬼頭『meで決める。見てろよみんな！！』

No.71：日本でこんな野球がしたかった。（前書き）

韓国人トリオの会話が読みづらいため、普通の表記にしました。

NO.71:日本でこんな野球がしたかった。

朴昌秀 「タイムお願いします。」

タイム！！

朴昌圭 「どうした？」

朴昌秀 「覚えてるか？」

朴昌圭「ああ。3年前のあいつとの対決だろ。忘れるわけねえ。」

朴昌秀「そうだ。3年前の世界大会の初回一挙8失点も全てアイツのツーアウトフルベースからの満塁ホームランから始まった。」

だから忘れてねえって。本気でいくぞって言いたいんだろ。

朴昌秀「ああ。だからあのボールを解禁しよう。」

朴昌圭「わかってるって。俺は早くアイツにリベンジしたくてウズウズしてるんだ。それで終わりなら戻ってくれ。」

朴昌秀 「頼んだぞ。エース。」

朴昌圭
ああ。

プレイ!!!!!!

「さあ7回の裏、一点を返し2点差となり尚ツーアウトフルベース
！！打席には今日2打数無安打1四球の1番の鬼頭！朴昌圭、セツ

『ボール！！！！』

朴昌秀（やはり終盤だけあつて昌圭の武器であるボール1個分の出し入れを自由自在に実行するコントロールが無くなつてきている。コイツを抑えれば勝利は見えてくる！！）

ビュッ！！

鬼頭（ストライクからボールになるカットボール！！！！もらった！！！！！！！！）

朴昌秀（注文通りのナイスボール！！！！！！）
ガッ！

朴昌圭（なに！？）

朴昌秀（読んでいた！？こんなに踏み込んでくるなんて！！だがこのコース…ファールにしか…）

カキーン！

『打球はまたレフトへ！！しかしこれも切れてファール！！！！！！！！』

朴昌秀（まさかこんなに踏み込んでくるなんてな。ならこのボールには手も足も出ないだろ！！）

『インコース！！！！！！！！勝負にきた！！！！！！！！』

鬼頭『舐めんな！！！！！！！！』

カキーン！

『今度はインコースの140km/hのストレートを強引に引っ張っていつてファール！！』

朴昌圭『これならどうだ！！』
ビュッ！！

カクッ！

『ボール！！カウント2ボール2ストライク！！』

『第6球目はボール！！！！！！！！』

朴昌圭『この野郎！！』

朴昌秀（落ち着け！！昌圭！！！！）

バンッ！！！！！！

『ボール！！！！！！カウントツースリー！！！！』

『さあこれでフルカウント！！！！ランナーは投げた瞬間に自動スタート！！！！！！！！！！』

朴昌秀『タ、タイムお願いします！！！！』

ビュッッッッッ！！！！！！！！！！

鬼頭
！？

カクッ
ツッ
ツッ
ツッ
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!

鬼頭「ス、スライダー！？ここで来たかつ！！」

「くらえ……!! 俺の渾身のスライダー……!!」

鬼頭クニ あ、やべえかも…。

カーン！！

野中
あ

川越
◻
:
◻

『打ち上げたーっ！！朴昌圭のスライダーのような球種に窮屈なバツティングになってしまった！！これはライトか！！フラフラッと上がった！！』

野中『こりゃもしかして…』

『ライト追う！！ライト追う！！風にのって飛距離はぐんぐん延びていくぞ！……………！』

朴昌龍『え…』

ポーンっ…。

鬼頭『や、や、や…』

朴昌圭 『何でもねえよ。次のバッター、抑えよう。』

朴昌秀 『ああ。』

朴昌秀 (あの球をホームランにするか…。しかも真のウィニングシヨットのスライダーを。)

朴昌圭 『あんな詰まったのにあそこまで運ぶか…。やっぱり日本人のバットコントロールは半端ねえな。』

(てか俺はよ…)

(俺は日本で、こんな野球がしたかった。)

ゲームセット!!!!!!!!!!!!!!

『『『ありがとうございます!』』』

野中『結局コールドゲームか…。』

川越『ああ…。まさか鬼頭の一発のあと、あんなに上社西の韓国人エースが崩れるなんてな。』

野中『そのあと2番手として登板したセンターの子も打たれちゃったしな。』

川越『まあ大勝したんだ。素直に誉めてやろうぜ。』

小木曾『やつぱ邦南が勝ったか。新星の登場なんて楽しみだ。』
芝田『ああ。楽しみな準決勝になりそうだな。』

上社西一	1	2	0	0	0	0	2	—	5
邦南高一	1	1	0	0	0	0	1	0	1
							×	—	2

副島『みんなナイスゲーム!!!!!!』

鬼頭『ところで県営小牧球場でやってた湯本学園池下VS猪子石はどっちが勝ったんだ?』

副島『それ今言おうとしたけど、明日の準決勝の相手は…猪子石高校に決定した。』

氷室『え、猪子石って！』

大場『たしか大会前から享神に対抗できる唯一の高校って言われてたな。』

鬼頭『ああ。エースの小木曾は今秋ドラフト1位候補の先発完投型右腕。打線も隙がなくて代打陣も充実。2番手投手のの芝田もかなりの好投手だ。』

西口『まあそんなやつらと対戦できるなんて最高じゃん！享神の前に力試するには最適な相手だぜ！』

小宮『だね！！じゃあすぐ学校に帰って練習しよう！』

『『『 おう！ 』』』

そして次の日…晴れ

先攻・邦南高校

1：RF：鬼頭 博行

2 : C F : 慶野 文哉
3 : P : 大場 翔真
4 : C : 西口 拓磨
5 : 1 B : 氷室 佑介
6 : 2 B : 副島 充
7 : 3 B : 松坂 健祐
8 : L F : 木村 太郎
9 : S S : 島谷 倫暁

後攻・猪子石高校

1 : 2 B : 根本 健太郎
2 : P : 小木曾 泰大
3 : 3 B : 芝田 大
4 : C : 渡辺 一紀
5 : 1 B : 坂本 成生
6 : C F : 坂本 良太
7 : R F : 大平 雄貴
8 : L F : 新谷 拓己
9 : S S : 日根野谷 一貴

『プレイボール……!!』

No.72:ドラ1候補

『さあ始まりました！！時刻は現在午前9時！！ここ瑞穂市民球場で行われる全国高等学校野球選手権愛知県大会準決勝、優勝候補・猪子石高校vs愛知県に今、旋風を巻き起こしている県内屈指の進学校・邦南高校の注目の一戦！！！！！！』

川越『今日の試合はほぼ大場くんの出来に懸かっているとってても過言じゃないな。』

野中『ああ。なんとって相手は猪子石^{いのこいし}。しかもエースの小木曾は難攻不落。だが大場はいまいち安定感に欠ける。そしてスロースターターという一点勝負の試合では致命的なステータスを持っている。』

川越『上社西戦の雨で中断した後のリリーフの時のようなピッチングを続ければ邦南にも十分チャンスはある。』

そのころ…

下村健太『俺も猪子石にするか愛農大名林にするか迷ったんだよ。』
長岡『フン。知るか。てかなんで俺もお前の高校野球観戦についてこなくちゃならねんだよ。』

下村健太『まあそう固いこと言うなよ。楽しもうぜ。』

…

飯尾『楽しみな対戦だな。』

谷『ああ。だけど総合力では完全に猪子石の方が上だ。まあ邦南がどう戦うのか見ものだな。』

カキーン！

飯尾『さすがの鬼頭だな。1打席目でいきなりクリーンヒットか。』
谷『あいつさえいなけりゃな。まあ終わったことに言い訳してもしやーねえか。』

『2番、センター、慶野くん。』

コン！

『さあ手堅く送ってワンナウト！いいバントです！！これで一死二塁です！！』

『3番、ピッチャー、大場くん。』

小木曽（おいおい…。なんか圧されてるみたいだけどよ…。）

キャッチャー
渡辺

（見せてやれ。お前の高精度のボール達を。）

『さあ初回、いきなりチャンスで3番の強打者大場を迎えた邦南高校！！！！！このチャンスをものにできるか！？』

ピュッ！！！！！！

ズバーンッ！！！！！！

《 146 km/h 》

大場（速いな。しかも相当手元でピュッとくる。）

『さあ第2球投げた！』

フッ！

バン！！

『ストライク！！ツー！！』

大場（チェンジアップか？くそ、追い込まれた。次は外の変化球がストリート…？3球勝負か…？情報だと他にスライダーもある。いや、初回から3球勝負はない。外の変化球を狙うか。だけどボール球に手を出すのは厳禁っと。）

渡辺（初回から飛ばしていくぞ。）

小木曽（当たり前だろ。どんなバッターにも容赦はしねえ。）

『セットポジションから第三球、投げた！』

ビュッ！！

大場（くそ！内角直球！？クロスファイヤーか！！！）

（3球勝負？ダメだ…。手がでねえ…。）

ズバーーーーーッッン！！

審判の手が上がる。

『ストライク！！バッターアウト！！！！！！』

《 150 km/h 》

『150km/hのストレートで空振り三振!!!!!!!!!!3番の大場くん、手も足も出ず!!!!!!!!!!』

下村健太『初回からいきなり150km/hオーバーとか...やつばすげえな...。ドラ1候補つてのは...。』

小木曾(これで二死二塁。冷静にいくぞ。)

渡辺(ドンドン攻めていくぞ。)

小木曾(おう。)

...

『ストライク!!!バッターアウト!!!チェンジ!!!!!!』

『アウトロー直球ギリギリ一杯のところを攻めていきました!!!!!11回の表、邦南高校、スコアリーグポジションにランナーを進めたんですが、無得点に終わりました。』

鬼頭『翔真、切り換えや。』

大場『わかってます。』

大場（え…。まさか…。もう…。いや、聞き間違えか…。）

『さあ1回の裏、マウンドに上がります、邦南高校のエースナンバーをつけた大場くんのこれまでの投球成績です。』

【大場翔真】

投球回… 3 7

失点… 1 7

奪三振… 5 0

被安打… 3 7

四死球… 1 1

『そしてこれが一方の猪子石のエース、小木曾くんの投球成績です。』

『

【小木曾泰大】

投球回… 3 0

失点… 2

奪三振… 5 4

被安打… 1 3

四死球… 6

『1回の裏、猪子石高校の攻撃は、1番、セカンド、根本くん。』

『さあ今大会チーム打率・450を誇る猪子石高校の攻撃!!バツターは1番根本くん!!』

根本（初球…）

『攻撃!!!!!!!!!!』

カキーン!

『打ったーっ!!いきなり先頭の根本くんがヒットで出塁!!!!!!!!!!
!これでノーアウト一塁!!!!!!!!!!』

『2番、ピッチャー、小木曾くん。』

コン!

『さあうまく送ってワンアウト一塁になりました。1回の裏、猪子石高校の攻撃。1回表の邦南高校と同じ状況で3番の芝田を迎えます。』

『3番、サード、芝田くん。』

野中『ズルズルいくなよ...。』

川越『先制点だけは絶対にやっちゃダメだ。』

大場（ツーンアウト三塁でオツケー。打たせていくぞ。）

芝田（情報ではMAX149km/hのストレート、決め球によく使うフォークと使用頻度はあまり高くない高精度のフォーク。あとはカーブ。カーブはかなり制球は良いみたいだ。高精度のフォークは基本的に勝負どころでしか使ってこない。）

芝田『準備完了。今から大場翔真の出鼻を挫く。』

No.73：スロースターター（前書き）

テスト週間とか個人的な萎え期で更新が遅れてしまいました？
すみませんm（．．）m

No.73：スロースターター

西口（この3番の芝田…チームトップの打率を誇る…要注意打者だ。だが次の4番の渡辺も今大会既に5本のホームランを放っている。4番の前にランナーを溜めるのは避けたい…。）

芝田（デカイのは要らない…。ヒット一本でねもちゃん（根本のアダ名）なら還ってこれる。）

小木曾『シングルでオツケーだぞ！大！！』

芝田（わかってるって。ヤス（小木曾泰大のアダ名）。）

西口（序盤は制球の安定しない翔真先輩。変化球も混ぜていかなないとかなり危険だ。）

西口がカーブのサインを出す。

大場『おっけ。』

セットポジションから投球モーションにはいる。

ビュッ！！

カクッ！

西口（まずい！！完全に…）
大場やへ

（（（ 浮いちゃった… （（（

ズバン！

西口（え？）

大場（助かったぜ…）

『ストライク！！』

芝田（ふう。）

坂本成『でたな。大の悪い配球予想。』

坂本良『ああ。アイツもあのピッチャーと同じで打者版のスロースターター、つまり4打席立って結果のこすタイプなんだよ。野球選手でいったら、大阪ナイトタイガースの鉄本かな。』

大平『この打席は正直あんま期待できんやら？あいつ第一打席苦手だし。』

日根野谷『ですね。』

西口（今の浮いた打者にとっては絶好球を見逃した…？強豪猪子石の3番だ…いま何を狙っている…）

芝田（やべー。次なに来るか全然わかんねー。 棒読み）

西口（次もカーブでいきましょう。）

大場がうなずく。

大場（次は低めに集める。）

ビュッ！！カク

西口（マジかよ！？やめてくれー！）

大場（また浮いちまった！！）

（（（今度こそ運ばれる！！）（）（）

ブン！

『ストライク！！ツー！！』

『さあ豪快に空振りしてツーストライク！！2球で追い込まれた！！』

西口（え、空振り？）

大場（てかバッター打てよ。まあこっちからすれば助かったけど。）

根本『おいおいおい。』

小木曾『さすがにいつものあいつでも一打席目だからといって、ん
…ちよつと待てよ…』

坂本良『俺もたぶんいまヤスと同じこと思った…。なあ…みんな？』

3年生一同『うん…。』

小木曾『なあ…伊永？^{これなが}』

伊永（記録員）『どうしたの？みんなしてそんな顔して。私なんか
した？』

大平『あのー。大変申しずらいんですが…今日大くんは…伊永の大
好物の…栃木直送かんぴょうを食べましたか…？』

伊永『うん。今日は準決勝だし。元気出ると思って。それがどうか
した？』

3年生一同『それだあーっ！っ！っ！』

日根野谷『栃木直送かんぴょうがどうかしたんですか？』

小木曾『大はな…かんぴょうが大嫌いだな…食べるとその反動で食
べた半日は頭が回らなくなるんだよ…』

藤川（控え）『じゃあ食べなきゃいいじゃないですか。』

坂本良『大はな…気が小さいからな…彼女の言葉には一切反抗でき

ないんだよ…』

日根野谷『彼女って…』

小木曽『伊永…』

ビュッ!!

またまたまたまた

西口

大場（甘すぎるー。）

芝田（3球続けて甘いカーブ!! 舐めんなよ!!）
ボン!

『詰まった!! おっ! しかしこれは面白いところに落ちるぞ!!』

ポテン!

『落ちたーっ!! ポテンヒット!! 二塁ランナー根本は打球が落ちたのを確認してからスタート!!!!』

小木曽『さすがに3球あの球が来たらバットに当てるか…。まあ結果オーライか…』

坂本成『あんくらい捉えろよ…』

伊永『ふー。私の栃木直送かんぴょうのお陰かな。』
伊永がボソツと呟く。

グラウンド上の選手以外全員

『『『勘違いしてるーっ！！』』』』

『さあ3番の芝田も繋いでこれで一死二三塁。』

『4番、キャッチャー、渡辺くん。』

大場（きたか…。）

渡辺『久しぶりだな。翔真。』

西口（え？）

大場『黙れ。』

続く…

No.74:容赦ナシの直球勝負

『さあ初回いきなりワンナウトランナー一二塁で非常に勝負強い4番の渡辺!』

大場(ここでカズキ(渡辺一紀)か…。ちとやっかいだな。)

渡辺『まさかお前が準決勝^{コリ}まで来るとはな。正直なところ、驚いてるら。』

西口(知り合いか…?)

渡辺『やっぱ昔とかわんねえな。顔つきも。序盤の荒れ具合もな。』

大場(無視だ。コイツと会話をしたら厄介なことになる。)

渡辺『は…?シカト?まあ別にいいよ。昔と変わらねってことは昔と同じってことだ。つまり翔真は高校野球でも課題を克服できていない。弱いな。所詮こんなクズチームじゃ仕方ないわな。』

西口(く。好き勝手言いやがって。マナーを知れマナーを。)

大場『今なんつった?』

ズバン!

『ボール!!!!!!』

西口（なんだ……？今のボールは他の球よりも球威が明らかに違った……？）

渡辺『もう一回言ってやるよ。クズチームのエースさんよ。』

大場『……。……。』

渡辺『どうした？早く投げろ。』

大場『『ぶっ殺す!!!!!!!!!!!!!!』』

小木曾『お、おい!!』

日根野谷『大くん走って!!』

『ふ、振りかぶったあーっ!?!』

渡辺『おいおい気が狂っちま……』

ドガー————ツツツツ——ン!!!!!!!!!!!!!!

渡辺『え…。』

『^{ボール}白球…は…？』

『ス、ス、ストライク！！』

《 149 km/h 》

西口（くうーっ！はえー！手痛いわぁー。）

川越『今日はいつもと違うな。』

野中『ああ。今の1球を見る限り。』

川越『今日の大場、こりゃスカウトも黙ってないようなピッチングをするかもな。』

野中『ああ。』

渡辺『ちよつとまで…。ヤスの球を毎日受けてるこの俺が…』

ズバーーーーーッッッッッー！！！！！！

《 148 km/h 》

『ストライク!!! ツー!!!』

渡辺『ボールが…見えねえ…。』

ドズバー… ツツツツ…!!!

《 149 km/h 》

『邦南高校のエース、2年生左腕の大場翔真、なんとなんと自己最速タイの149 km/hで猪子石の主砲渡辺を見逃し三振に斬って捕った!!!』

大場『^{オレら}邦南を馬鹿にするやつは誰であろうと容赦はしない!!!!!!
!!!!!!』

『それがたとえ、過去の最高の友達^{たち}だとしても!!!!!!!!!!!!』

No.75:切り抜け

ドバーーンッ!!

《 147km/h 》

『147km/h直球で5番の坂本成生さかもとなるきも見逃しの三振!!!!!!
!!初回猪子石高校、一死二三塁の好機生かせず無得点!!』

野中『やっぱりな。今日は序盤から球威が違う。』

川越『ああ。上社西戦で終盤に魅せたあの快速球と同じ感じだな。』

野中『試合前に言ったようにあのときの投球が続けば邦南が猪子石に勝つなんて事もあり得る話だな。だが問題はスタミナ。この投球がいつまで続くかな。』

川越『その心配はねえだろ。忘れたか?大峰明館戦で味方にいくら足を引つ張られても自分のピッチングスタイルを貫き、チームを勝利に導いたあのメンタルの強さ。たとえば体力的に厳しくなっても大場イッには精神力メンタルついていう最強の武器がまだ残ってる。』

野中『納得だな。さすが大場ファンのおっちゃんってだけはある。』

川越『うつせえよ。昔からの大の邦南ファンのおっちゃんのくせしてよ。』

高田(たかだ:プロ野球スカウト)

『速いな。今の左腕。大会誌によると2年生だな?』

谷口（たにぐち：プロ野球スカウト）

『はい。ただ、あの少年は中学硬式野球日本代表に選ばれた過去があります。』

高田『ほう…。ならなぜ無名なのだ？』

谷口『彼が入学する前までこの邦南高校は夏の選手権大会には出場していなかった模様で。邦南高校は昨年、つまり大場少年が高校一年生のときに7年ぶりの公式戦出場したそうです。だから皆大場少年は野球から離れると思ったのでしょうか。ましてや県内公立校断トツトップの進学校。私も彼が野球をしていると聞いて驚きました。』

高田『素晴らしい調査だ。さすが谷口くん。』

谷口『ありがとうございます。先輩。』

西口『4番の渡辺ってやつ、知り合いですか？』

大場『まあな…。ガキの頃の親友だよ。今はもう…。見ての通りさ。すっかり仲も悪くなっちまった。』

西口『何かあったんですか？』

大場『あいつ、一度野球から手を離れたんだよ。結構酷い怪我してよ。頭蓋骨骨折。』

西口『はあ…。』

大場『あの頃はアイツも大阪にいてよ、俺がやつちまったんだ。頭部への危険球。』

大場『アイツとは同じ照丘小ってとこにいてよ、俺は小学校の野球部に入ってアイツは有名なクラブチーム。学校ではメチャクチャ仲良くて野球では直接はあんまり関わりなかったんだけど、南阪小を7回1失点に抑えたって言ったら勝負挑んできてよ。』

西口『その勝負で？ってことですか？』

大場『ああ。本気で投げたら足がスパイクじゃないせいか滑っちゃまってそのまま頭にな……。あの時の球威半端なかったし。軟式といえどな。それから絶交だよ。』

『2回の表、邦南高校の攻撃は、5番、ファースト、氷室くん。』

氷室『しゃあああああーっ！！来いやあーっ！！』

No.76：小木曾泰大 対 大場翔真

小木曾『2年生サウスポー、149km/hか。』

マウンド上の小木曾がふーっと息を吐く。

小木曾『相手にとって不足なし。むしろそっちのが…』

『燃えるぜ!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

ズゴン!!

《149km/h》

『ストライク!!』

高田『同じ149km/hでもこうも違うのか。』

谷口『小木曾のまっすぐも申し分ない程キレている。なのにこの差はなんなんだ?』

高田『球が自分から打者に向かっていくようなあの大場の球。なあ谷口?こりや金の卵だ。事務所に調査を依頼しろ。』

谷口『わかりました。』

『空振り三振!!!!!!!!!!!!!!小木曾のウィニングショットの高速スライダーで5番氷室を空振り三振に斬ってとった!!!!!!!!!!』

ズバン！

『ストライク！！バッターアウト！！』

ズバン！

『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！！！』

『7番の松坂も三振でこれで5連続！！！！！小木曾、圧巻のピッチングでこの回も無失点！！！！』

川越『邦南自慢の打線もこのレベルのピッチャーと当たるとさすがにキツいか。』

野中『やつぱドラフト1位候補つてのは違うんだな。速球も150km/hオーバー。決め球の高速スライダーで打者を圧倒。』

川越『今日はまだ見せてないがチェンジアップやカーブのキレ、完成度も相当高いみたいだ。』

谷口『やはり小木曾は他の高校生と比べ物になりませんね。こりやものが違います。』

高田『そうか？俺には大場くんの方がいい最終的に上になると思っけどな。』

谷口『と…言いますと？』

高田『小木曾も勿論高校生としては申し分ない。ドラフト1位候補というのも納得だ。享神さえ愛知にいなければおそらく小木曾のいる猪子石が今まで甲子園に出ていただろう。ただ…』

高田『小木曾アイツと大場コイツじゃ、這い上がってきた努力が違う。小木曾アイツを低く評価してるわけでは全くない。ただな、大場コイツの方が長年高校生担当のスカウトとしてやっている俺には純粹ビュアに輝いて見える。』

谷口『そんなこと、僕にはわかりませんよ。』

高田『ははっ。当然だわかぞうよ。』

『ストライク!!! バッターアウト!!! チェンジ!!!』

『空振りの三振!!!!!! 猪子石のエース小木曾が2回の表、三者三振に斬れば、邦南のエース大場も三者三振に斬ってとった!!!!!!』

川越『すげえ闘いだな...。』

野中『ああ...。』

川越『この試合、長くなりそうだ。』

No.77: 蛹(さなぎ)から蝶へ

結局3回の攻防も得点には関係なく、試合は4回の表、邦南はまた小木曾に三者三振を食らう。

『4回の裏、猪子石高校の攻撃は、3番、サード、芝田くん。』

小木曾『そろそろ目覚めてくれよ…大…。』

芝田(あー、なんかクラクラする…)

渡辺『この打席もまだダメだな。まったく…打線の中心のはずの3番バッターがこれじゃあちよつと不利だぜ。』

ズバー…ツツツン!

審判の手が上がる。

『ストライク!!バッターアウト!!』

《 148km/h 》

渡辺『相変わらずはえーな…。』

4番、キャッチャー、渡辺くん。

大場（カズキ）。

渡辺（翔真）。

渡辺（俺は翔真を許す気はねえかな？）

大場（知ってる。カズキがそーゆーやつだって。）

渡辺（いかにも俺が悪いような言い方だな。）

大場（悪かつたな。）

渡辺（てか翔真、ちよつとは敬語使つたらどうなんだ？オレ一応お前より年上だろ？）

大場

渡辺（ふう。ささやき戦術には乗らねえか。もうスイッチ入れてきやがった。）

大場（ねじ伏せる！！！！！！！！！！）

ズバーーッツツーン！
《 146 km/h 》

渡辺『どーやらあのときの事はもう気にもとめなくなったみてえだな。』

大場

渡辺（ふ。いつまでその黙りが続くかな。だったらこっちがお前の口をポカンと開けてやるぜ。）

西口（次も直球^{コレ}！！！！！！）

ドガンっ！！！！！！
《 147 km/h 》
『ストライク！！ツー！！』

渡辺（速いっつつつても所詮140 km/h台…。このオレからそう何度も直球一本で空振りがとれるとでも…）

カキーン！

渡辺『思っなよ。』

『打球は大きく切れてファール！しかし4番の渡辺、振り遅れましたが少し捉えました。』

渡辺（次は翔真のことだ。直球だな。アイツは昔から直球勝負を好んでいる。もし変化球が来ても翔真レベルの変化球なら狙わなくても対応できる。）

西口（コイツ。打ち気がバンバン伝わってくる。素直なバッターだな。次は直球に絞ってるだろ。だったら…）

西口がサインを出す。

翔真は一瞬ひるんだが、頷いた。

大場（まだ下村程の精度じゃねえが…この場面、ワンナウトランナ―無し。失投でも高めにいかなければリスクは低い。自信持っていないくぞ…。）

大場が振りかぶる。

『身体脱力…力は要らない…。低めのミット目掛けて、思いっきり』

…』

『『指先…！…！…！一点大集中…！…！…！』』

『いつけえーっ！…！…！…！…！…！…！…！』

西口『大峰明館戦とは違う。絶対に止めてやる…！…！…！』

ビュッ！

渡辺『やはり思った通り！！ストレージ！？』

カクウツツツツツ！！！！！！！！！！

渡辺『お、お、おい！』

ズバーーーーーツツツツツン！！

『ストライク！！バッターアウト！！』

『空振り三振！！！！！！！！！！4番渡辺は大場の伝家の宝刀フォークボールで空振三振だ！！！！！！！！！！』

大場『しゃあああああああ！！！！！！！！！！』

渡辺『聞いてねえぜ。こんなフォークボール……』

下村健太『さすが大場だな。オレのフォークをもうここまでマスターしてきたか。』

長岡『お前よりスゴいんじゃない？』

下村健太『それはない。』

ズバーーーーーッッッッーン!!

《 149km/h 》

『空振り三振!! 5番坂本成生も三振でこの回も二者三振に斬った
!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

川越『おいおい…これじゃ…』

野中『間違いない…。今のアイツ…間違いなく…サナギから…』

『サナギから蝶に羽ばたこうとしている!!…』

No.78：展開急転

『5回の表、邦南高校の攻撃は、5番、ファースト、氷室くん。』

氷室『信じられねえよ…。俺がこんな舞台、愛知の準決勝の舞台に5番でスタメン出場…？』

島谷涼『佑介…』

氷室『去年の今ごろ…こんなこと想像できたか…？野球とも出会ってなくて…去年の夏休み、中3で受験生つてこともあったし…家で勉強して、菓子食って、寝て…勉強して…パソコンして…昔からスポーツ自体は好きだったんだけどどれも長続きしなくて…結局中学のときやってた陸上もあんま行かなくなっちゃって。ホントに中途半端な人生だった。唯一の取り柄は勉強。そんな俺が…こんな俺が…ここまで来れた…。どんな場面でも…あの頃の中途半端だったオレの人生に比べたら、何十倍、何百倍と楽しいんだよ。だからこの時間は終わらせられねえ…。負けたくねえ。絶対にこの夢のような時間を終わらせてたまるもんか。勝てば続けられる。野球をやってられる。野球を続けられるために…』

『絶対に勝つ！！先制のホームは、俺が踏む！！』

カッキイーーーーッッッ！！！！！！！！！！

小木曾『なにっ!?!』

『捉えた当たりはレフトの頭上!!!!!!!!!!!!越えたーっ!!!!!!
!!!!!!!!!!』

氷室『じゃあ!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

『打ったバッター氷室は悠々セカンド到達。これでノーアウトラン
ナー二塁、5回の表邦南高校の攻撃。初回の先頭鬼頭以来のランナ
ーです。』

『6番、セカンド、そえじま副島くん。』

氷室『キャプテン!続いてくださいね!!』
副島『ったりめーだっ!!!』

『イケイケ副島!!押せ押せ副島!!かつ飛ばせ!!そ・え・じ・
ま!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

『さあ場内の雰囲気も高まってきました!!』

カッキイーーーーッッッン!!!!!!!!!!!!!!

小木曾「え…？」

ボ
サ
ツ
:

「入ったあーつつつ！！！！！！」

ねもと
根本 「まじかよ」。

おおだいらい
大平 ツーラン…ホームランだと…

新谷「三点ビハインド……？」

渡辺（つえーぞ…邦南高校…）

大場『頼もしい先輩たちだな。』

『7番、松坂は無表情でダイヤモンドを回って今ホームイン!!!
!!!5回の表邦南高校、5番氷室、6番副島の連続二塁打で一点
を先制した直後、7番松坂の自身今大会2本目となるツーランホー
ムランでさらに二点を追加し3 - 0!!!!!!!』

渡辺『タイム、お願いします。』

『タイム!』

『さあここで猪子石の内野陣、1回目の守備のタイムをとります。』

桜沢『おいおい。猪子石負けてんじゃん。しかも三点ビハインド。』
勾城『そのようですね。』

堂金『……。』

桜沢『やっぱ気になるのか…勾城…?』

勾城『ええ。名東黒シャーの同期ですから。嫌でも眼中に入ってきますよ。』

（拓磨…哲都…ここまで来い…。）

No. 79 : 発見

小木曾『困っちゃうね。まったく…。』

渡辺『大丈夫。三点ならワンチャンスでいける。』

坂本成『大事なのは次を抑えることだよ。』

根本『だね。切り替えていこ。』

芝田『やつと栃木県産かんぴょうの効果が続いてきた…。』

日根野谷『頼みますよ。まったく大くん。』

芝田『わりい…。』

久保（伝令）『守りやすくなったし、ここから勝負な。』

小木曾『オッケー。』

渡辺『じゃあアレやるか。』

根本『おう。』

渡辺『せーの…。』

『『『 P U S H O U R L I M I T ! 俺達の限界に挑戦！！
！！！！！！！！』』』

小木曾『しゃあ！みんないくぞ！』

「おっ！……！！！！！！！！！」

『ストライク！！バッターアウト！！！！！！！！』

渡辺 「じゃあ！ ツーアウトな！」

1番、ライト、鬼頭くん。

カキーン！

大場 巧い！

桜沢
□
ん
:
?
□

「ツアウトから1番の鬼頭が今日2本目のヒットで出塁……！！」

桜沢「鬼頭……まさかな……アイツが野球やってるわけねえか。しか

も1番ライト。あり得ねえっての。』

『ランナー走った!!』

渡辺『舐めんなっ!!』

『渡辺の素晴らしい二塁へのスローイングでスリーアウト!!しかし邦南高校、この5回の表、三点を先制しました。』

桜沢『ん…。まさかもしかして…』

勾城『どうかしましたか?』

桜沢『いや、なんでもない。』

(まさかとは思うが…アイツ…、…ちょっと遠くて見えづらいな。もうちょっとこの試合観ていくか。)

余語『いくぞ桜沢。アップの時間だ。第二試合俺たちとやる瑞穂大
瑞穂戦の準備だ。』

桜沢『ああ。わかってる。だけどちょっと残っていいか?』

余語『なぜだ?』

桜沢『ちよつと確認しておきたいことがあってな。確認でき次第すぐいく。』

余語『わかった。』

桜沢『ヒロが野球をやってる？まさかな……。アイツのあの肘の故障じゃもう二度とボールを投げれないんじゃないか……』

カキーン！

『打球はライトへ！！ライトの鬼頭が背走する！！！！！！！！！！』

桜沢『難しい打球だが……』

『捕ったーっ！！！！！！！！ライトの鬼頭、5回の裏先頭の6番坂本良太のライトへの大きな飛球を好捕しました！！！！！！！！！！』

副島『ナイキャッチ博行！！！！！！！！！！』

桜沢『セカンドがあんなに深くまでボールを追いにいくのか。あのライト、肩が弱いのか。それが……』

『ボールを遠くまで投げられないか？』

桜沢『ライトがフェンス際でボールを好捕したのはよかったが……。あのカットとの距離……10メートル位しかないんじゃないか。しかも

その距離にも関わらずワンバウンド返球をするライト。そして名前が鬼頭。アイツが行った高校は…なんだっけな…」

藤野「旧S・7の一員、鬼頭博行の事を言っていますか？」

桜沢「うおっ。いいとこに来たな。マネージャーさん。そうそうそいつのこと。」

藤野「彼の行った高校名は、邦南高校ですよ。春毅^{はるき}くん。」

桜沢「下の名前で呼ぶなって言ってるんだろ。藤野。」

藤野「なんで？名字とマッチしていい名前じゃん。季節感もバツチりで羨ましい。」

桜沢「はっ。なんじゃそりゃ。まあありがとう。知りたい情報はこれで揃った。」

藤野「はいはい。どういたしまして。」

桜沢（ヒロ…オマエいつの間に…。）

No. 80：無死満塁

『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！！！』

『8番新谷は見逃しの三振！！！！これで毎回の12個目の三振を奪ってきました！！大場翔真！！！！！！』

試合は小木曾、大場の両軍エースの引き締まる投手戦で6回、7回も両チームランナーすら出せず無得点。

猪子石のエース小木曾は、7イニングを投げ被安打4、奪三振13、四死球0、失点3。

一方邦南のエース大場は7イニングを投げ初回の先頭打者根本のヒット、芝田の詰まったヒットの2本しか許さず、毎回の15奪三振、四死球0、失点0。

試合は3 - 0の邦南3点リードで8回の表、邦南の攻撃が始まる。

『8回の表、邦南高校の攻撃は、8番、レフト、木村くん。』

大場『タロ先輩！！！！打ってください！！！！』

松坂「キムタロ!!! かつ飛ばせ!!! フルスイングだ!!!」

ドガンっ！！

『空振りの三振!!!!!!!!!!小木曽もこれで14個目!!!!!!!!!!』

$$\frac{143\text{ km}}{\text{h}}$$

谷口「序盤に比べると若干球威が落ちてきましたね。」

高田「いや、下位打線には本気を出していないんだろう。小木曾は實力は勿論のこと、マウンド捌きや打者心理を読むのにも長けている。これらを含めてドラフト1位候補と言われている。」

9番、シヨート、島谷倫暁くん。

野中「下位打線じゃ手が出ないだろうな……」

カーン！

渡辺 ショート!!

日根野谷 「あいよ！」

アウト！！

『ショート』の2年生、日根野谷が捌いてツーアウト！』

1番、ライト、鬼頭くん。

川越 打線の巡りが悪いな。

野中『ああ。チームトップの打力を持つ鬼頭を1番つてのはな…。』
川越『今日も邦南の4安打の内、2本が鬼頭だしな。』

野中『打席が回ってきてても前にランナーがいなきゃ勿体無いよな。
特に鬼頭の場合は。』

川越『3点リードも相手が猪子石じゃあセーフティーリードとは言えない。』

野中『猪子石は後攻だしな。』

鬼頭『俺が切り開く…。3点じゃ足りねえ。』

小木曽『くらえ!!』

ズバーーーーーッッッーン!

《151km/h》

『ストライク!!』

『なんと8回にきて今日最速の151km/h!!!!!!』
鬼頭『くつ。速いな…。』

小木曽『どりゃ!』

ズバーーーーーッッッーン!

《150km/h》

『150km/h直球に空振り!!!!!!さあ小木曽、好打者鬼頭を
2球で追い込んだ!!』

ズバーーーーーッッッーン!

『ボール!!!!!!』

鬼頭『これがドラフト1位候補の実力か…』

『8回の裏、猪子石高校の攻撃は、6番、センター、坂本良太くん。』

大平『サッチャン！（坂本良太のアダ名）絶対出るよ！！！！』
坂本良『おうよ！』

西口（翔真先輩は今まで7イニングで91球。完封ベースだ。球数だけで言えばの話だが。でもな…初回から全打者全力投球だからな…。）

ビュッ！

西口（甘い！）

坂本良『隙有り！！！！！！』

カキーン！

『打った！！ライト前に運んだ！！これでノーアウトランナー一塁』

!!!!!!」

小木曾『久々のランナーだな。』

根本『うん。初回以来じゃない?』

芝田『そうだな。』

西口（ど真ん中だったか振り遅れて詰まった感じのライト前ヒットか。まだ球威があるって証拠か。）

『7番、ライト、おおだいら大平くん^{こたま}に代わりまして、代打、児玉くん。』

大平『ヒロキ！（児玉のアダ名）打てよ!』

児玉『おう!』

西口（左の代打か。やはり猪子石。右打者の方が翔真先輩は得意にしていることを知っていたか。）

児玉（久々のセットポジション。リズムが少し変わるはず。だからもっともつと俺が…）

スッ…

『セーフティバントだ!!』

（呼吸乱してやらないとな!）

コン!

西口「サード！」

松坂「わかってる！！」

「サード松坂バント処理はどうだ!? 素手でつかんで一塁へ送球! ! ! ! ! ! ! ! ! ! バッター児玉は一塁ヘッドスライディング! ! ! ! ! ! ! ! ! ! 」

「セーフ！セーフ！」

『ここで内野安打が出た！！！！！！代打児玉の意表をつくセーフてイバント！！！！！！これでノーアウト一二塁！！！！！！！！』

川越「サード松坂の一步目が少し悪かったな。」

野中「ああ。だが今まで大場の奪三振ショーで内野陣があまり足を動かしてなかったのは事実だな。」

川越「奪三振の小さなリスクがここにきて大きく出たか。さあこの
回が正念場だな。」

野中「ノーアウト——墨……」

『8番、レフト、新谷くんに代わりまして、代打、井上くん。』

児玉『ゆうた！（井上のアダ名）続けよ！！』

…

……

『フォアボール！……！フルカウントから5球粘って大きな大きなフォアボール！……！8回の裏、3点を追う愛知の強豪猪子石高校、ここに来てノーアウトランナーフルベースの大チャンス！……！……！打席には9番の2年生、日根野谷くんひねのやが入ります！……！……！』

『9番、シヨート、日根野谷くん。』

小木曽『ヒネ！……！……！（日根野谷のアダ名）おいしい場面だ！！……！……！もってけコノヤロー！……！……！……！……！……！』

西口（3点リードだがノーアウト満塁の大ピンチ。）
大場（逃げ場無し。全力勝負だ。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1249t/>

ホームスチール～SUMMER Baseball Miracle～

2011年11月4日14時08分発行